910. 26-Mi 96ウ
1200500754481
910.26
Mi 96ウ

始

エト5L+99
204

あたらしき、日本の、夜明めさめくる
花つき、つき、に咲き、つき、にほほ

910.26
MI96
ウ

明治文学の潮流

庭園ニ立テル著者

985
101

覺書

—序に代へて—

○

たしか大正七八年頃の事と覺えてゐる。つい先達故人になられた向軍治先生が、まだローマ字ひろめ會を主宰してゐられた時分で、その特別會員の中に出來てゐた集りの一つに、ローマ字の書き方に對する協議決定をするのがあり、私もそこに出席するようになつてゐた。藤岡勝二博士や高等師範の名譽教授の後藤牧太氏、山口鋭之助氏などの先生方が主となつて協議してゐられる會であつた。その集りで私は日本語の音韻について初めて學び、ひいて方言への關心を起させられたのであつた。或る時、その席上に誰方が持つて來られたのかはつきりした覺えがないが、明治十年代の印刷だつた英和對譯の物理學語彙の小冊を回覽させられた事があつた。

本箱の整理をしたら、こんな古い本が出て來たので、今日の集りに一つ皆さんにお目にかけて昔の話をし

ようと思つて持つて來たといふのが、その持主の方の說明であつた。皆さんがそれを珍しがつて喜ばれ、一時その頃の理學の話で華が咲いた。中でも喜ばれたのは後藤氏で、いつもの愼しい調子でどうも私はこの飜譯には關係が有るやうな覺えがあると言つて懷しさうにしてゐられた。その他にも、この小冊子に關與された方が、席に一二人あつて、當時のいろ〳〵の話をされたり、今の學術語と比較されたりした。

その頃、私は心靈問題に凝つてゐた時分で、それの日本の學術語――大體は飜譯であつた――について、いろいろの不滿を感じ、何とかしてぴつたりしたものにならないかと、いつも考へてゐたので、この皆さんの思ひ出話や、用意や、苦勞を身にしみて聞いてゐたのだつた。この日の先生方の話は、今一片も確かな記憶になつて殘つてゐないが、その席の印象だけは鮮かで消えないでゐる。

さてこの日私の心に播かれた種子は、その後私の心の中に芽を出した。芽を出したがそれは似てもつかない植物になつて育つた。それは日本民族の勝れた文化育成の魂と、攝取力、獨創性に對する信賴を掴む、これが動機になつたのであつた。

○

明治三十年代のをはり頃から、外國文學輸入全盛の時期にはいつた。これの遠因は初期からの日本の刺戟となつて明治の新しい覺醒を呼びさました西洋に對する驚異から出發し、それの攝取を始めたのが、この時期に花の滿開の時期にはいつたのである。新しい輸入に對する敬重の念は、判斷が正しくなるにつれて、正しさと深さを持つて來た。四十年代以後のこの時期の現象が決して輕佻な崇拜摸倣の心でそれを迎へたのではなかつた。そしてそれからの攝取に心を奪はれてゐた時期のやうに見える。

ちやうどその頃であつた。私なども惑溺に近い心持で外國文學に讀み耽つてゐたが、それにつれて日本の魂を振り向い見、更にそれを深く知らうとする心持を忘れてゐた。これは私だけの事で、心の狹く傾き易い性質からかうなつたのであらうが、目を前方にばかり向けてゐて、自分の生れて來た背後を忘れてゐた姿であつたが、前に書いたローマ字會の集りで見せられた物理學の對譯語彙小冊子は、全く偶然に私のこの頃の心に新しい反省の動機をつくつてくれたのである。その席で聞いてゐた時には、先生方が原野を伐り開く苦心をせられたのを、自分の眼前に髣き當つてゐる考へに引きつけて、それからの感動でいつぱいになつてゐたのだが、さて家に歸つてからこの力におされてその心靈問題に關する語彙のノートを出して見ると、やはりまだ自分の手にはあはない困難な仕事であつた。その時には全く自分自身が情なかつた。誰にも話せない事で、自分に對する痛切な失望を味はつたまま、またそのノートをふせてしまつた。

そのうちに、この目指した題目から反れて、私はいつとなしにただ先人達が昔初めて道をきりひらく爲めに力を盡されたその事だけを心に殘して、それを考へてゐるやうになつた。この心持の移つて行つた順序をうるさく書くのは私だけの興味におちる事だから必要でない。この事がやがて私に日本の攝取力、獨創力を

考へさせる事になつたのである。

我々の父親、我々の先輩は、私どもよりも更らに前に、有ゆる方面に渉つて新しく生きうとする心が燃え立つてゐたのである。そして眼の前に既に生みながら進んでゆく外國の姿と心とが見えてゐた、それを食べないではゐられぬ心がその時代から燃え上つてゐたといふ事が、私に實に切實なものになつて感じられて來たのであつた。

私は輸入されてゐる西洋文化に對して、耽り入つてゐたし、憧憬の心でいつぱいであつたが、その反面には自分達の民族の眞實の力を信じたかつたのである。それは空にわれぼめをする事では決して安心が出來る事ではない。實質を正しく納得出來るまで知らなければ、心の底から湧く確信は出て來ない。

この頃から、私はぼつぼつ古典を讀む事や明治以後の過去のものを讀む慾望がはつきりして來たやうに覺えてゐる。そのうちに私は下總に移住した。下總での山野の中の生活は一面に新しい方面の慾求――全く慾が深いほど、自分でも身のほどを知らないと思はれるほどの計畫を考へ始めさせたのであつた。多岐亡羊、私は自分の慾望の中をうろうろしながら、自分の生きてゐる日が無限に伸びてゆくもののやうに、「爲たい事」「爲なければならないと心で思ふ事」の中をさまよつて行つた。

その中の一つで、私の心にいつもついてまはつて、興味を深めさせてゐたのは明治の御代に於ける文學の生長したあの姿であつた。それは何としても私どもの心にしみて知つて置くべきものだと考へたのである。

黎明期と普通文學史家の言つてゐる明治十年――二十年代の文學。後年になつて見ると、それらの作品の多くは、時代推移の上からの價値を考へるより以上のものは無いと見られるのであるが、それが生れて來る本然の力には、後につづくものの心に迫つて來るものがあつたと思はれる。これが日本民族の中に生れ出す勝れた力だと信ぜずにはゐられない。

私はその中で特に、後年、明治の末期以後の文學を生れたものに對して、深い興味を感じたのであつた。それを詳しく知りたいと思ふ念願をその頃から起したのであつた。

○

今から十年位以前に、一度私はこの田舍でその考究をする仲間をつくらうとして失敗した。それから、少しづつ自分だけの必覺えとして書き取る事をやつてゐるうち、三四年前から、私はまだ健在である先輩や友達を訪ねて、この所謂黎明期についての記憶や感想を聞き、その聞き書きをこしらへて置かうと企てた。これもいくらの仕事もしないで時が經つて行つたが、その間に一番話を聞きたいと思つてゐた人々が、つづいて故人になつてしまはれた。この企てもやはり失敗であつた。そこで私は考究の仲間もつくり得ず、先輩友人の教へも乞ふ事をせず、獨りで自分だけの小徑をたどりながら今日に到つたのである。

この私のいくらかの用意を知つてゐる小川義信君が、今までの仕事を一括するようにとすすめてくれた。

私はそれで一つやつて見ようと決心した上、覺えの目錄をつくつて見たが、實際に取りかかつて見ると私の藏書は貧しいし、圖書館は遠く且つ不自由である。それで幾度か計畫をかへて、尙ほ自分のとるべき方法を思ひ煩つた。何だか目の前に形が見えてゐるやうで、その實體を摑めないものが非常に多いといふ事が頻りに感じられた。

元來、私は文學史を書かうなどとは思つてゐない。さういふ用意は持ち合せてゐないし、何の主唱は、某氏が第一であるか否かを餘り重要に思つてゐない。それよりもさういふ提唱の生れ出るもと、それが主唱されざるを得なかつた點が、私の實際の題目であると思つてゐる。さういふ處に時代をつくり、推移せしむる力はあると信ぜられる。それで一つ一つ自分の感じてゐる感想隨筆を書く事に定めて、初めてこの仕事の出發をした。

さてこの書にとりかかつてから、改めて私を啓發し、且つかげながら深く指導されたのは柳田國男先生の「明治大正史」の「世相篇」であつた、あの書に對してまことに感謝に堪へないものがある。

○

ところで、私の仕事は實に遲々として進まなかつた。幾度も迷路にはいつて出られない心持に犯されながら、或は袋地にはいつてしまひながら改めてやりなほしをして時をすごした。そして近くにゐた友人が親切に搜して來てくれた現在不自由勝ちになつてゐる原稿用紙をあら〳〵書きつぶしてしまつた。自分の不透明な爲めに、まことに申しわけない事をしたやうに思はれてならない。

更らに、ぐづ〳〵してゐるうちに、初めもくろみをした題目の大半に手をつける事も出來ないで、この書を印刷するようになつたのは、殘念であるが仕方がない。例へば當時の文學者がその心を育てるのに、ほゞどんな書を讀んだらうといふ事や、それぞれの時期に於ける言葉の含んでゐた內容。お伽話の問題。西洋の家庭で愛讀される小說の輸入とそれに對する一般の反應。又は明治三十年代後半期に「家庭小說」と稱された通俗小說……等々、十篇ばかりの草稿と覺えとをそのまゝ手をつけない事にした。

そしてこの書を、片側からばかり見てゐるやうな姿のまゝで一冊として公けにする事になつてしまつた。

○

以上、心覺えの大體を書きしるして置きたい。尙ほ終りに、遲れ勝ちの私の仕事を勵まし〳〵世話をやいてくれた小川君の友情に深い感謝を表したい。

昭和十九年五月

目次

歌四首
著者近影
覺書—序に代へて—
言文一致（三—三二）
△死語となつた「言文一致」—△言文一致の實現は小説からはじまる—△言文一致の創始者—△二葉亭の言文一致—△春のやの「書生氣質」と矢崎嵯峨のやの作品—△それから後—△「言文一致」といふ語の終り
二葉亭主人隨想（三三—四八）
藤村覺書（四九—七七）
△或る仲間の直接先輩—△藤村追懷—△「文學界」青年の惱み

△眉山 緑雨―△「文學界」同人の情熱―△新しい戀愛―
△芭蕉

植村正久・内村鑑三・巖本善治（七八―九八）

△植村正久文集―△詩人としての植村先生―△内村鑑三氏―
△巖本善治氏―△新しい移入の水口

明治三十年代の青年小説家（九九―一〇九）

一葉雜記（一一〇―一三五）

川上眉山の最後（一三六―一五九）

小説文體の推移（一六〇―二二五）

△美妙齋の手紙―△美妙齋の文章―△紅葉・露伴の文章―△うまい文章の破壞―△二葉亭の文章―△嵯峨の屋の文章―△「書生氣質」の文章―△「うたかたの記」その他

「おもかげ」（二二六―二四九）

「野邊のゆきき」（二五〇―二七六）

△詞華集「抒情詩」―△「若菜集」・「獨歩吟」と「野邊のゆきき」―△生れ來たつた詩人

和歌の革新（二七七―二九九）

△和歌―短歌―△和歌の道―△最初に稱へられた革新論―△淺香社の出現―△模索の一期間―△「自我の詩」―△革新の曲折の跡を

胎動期を回想して（三〇〇―三一〇）

【目次畢】

明治文學の潮流

言文一致

死語となつた「言文一致」

「言文一致」といふ言葉は、今では既に推移し去つた過去のものになつてしまつてゐる。死語になつた感がある。その役目をすまし、次ぎの段階に移り進んで死んで脱殼になつてしまつたのである。

私は時折、日本の文章が、この半世紀の間に急流の勢ひで變遷して、今日の姿になつて來た跡が思ひ出される。言葉の生死もそれにつれて激しかつた。これはもとより止る處なき進歩の跡だ。固い殼、型にはめられてゐた境から、その古い殼を割つて、どこまでも心の動きを言葉に移して表さうとする意慾の激流が、この變遷を作り、今日が到來したのである。これに口火をつけた或る人々はあつたとしても、實は吾が民族の精神の活躍、心の喚發の實に若々しい力が求めて進んだ結果であると、思はざるを得ない。

「言文一致」の着手實行は、際立つた文體變遷の初ではあるが、流れのはじまりではない。これは明治文學

[library stamp]

史家の各々が何れも詳しく說明してゐる事實で、改めて言はなくつてもいい事と思ふが、簡單に私なりの考へも述べて見たい。

文章に對する國字或ひは表現の問題は、旣に明治の初めから、いろいろの學者に依つて稱へられ始めてゐた。これは決して歐米文化の模倣からではなく、新文化の移入に從つて、從來破る可からざる殼のやうに思はれてゐた表現形式に對する自覺が生じたのに因るものと見られる。これは當然生るべき自覺ではあつたらうが、時を隔てた今日からそれを振り返つて見ると、如何にも鬱紆な心の動きで、それ等の憂悶を心に抱いた先人に對し、尊敬を禁じ得ないものがある。しかし、その主張をいろいろの書で讀んで見ると、それらの文章が悉く舊い表現の「漢文」讀み下し體のものなので、それらの意見が一つの机上の理づめの主張か、感能不隨の心から生じたものかといふ疑ひが生ずる。さう考へたと言ふばかりで、それを現前する表現に移し得なかつたのが全く、思慮と行動とに有機的の働きがなかつたあとを見せてゐる。感能不隨と見えるのはこの點である。

かういふ不思議なほどの矛盾には、明治の御代を越えて大正年代になつてからでさへ、私も面をつきあはせた覺えがある。それはローマ字を國字に採用する陳情書の趣旨が出來てゐて、それの末席に署名をするといふ場合であつた。ローマ字を國字にしようといふ位の意氣ごみを書くのに、極めて生硬な漢文體の古い表現で文章が書いて有つた。その文章をローマ字書きにしたらば、何人もその意味を了解するやうには讀めなかつたらう。それに對して會の主腦の人達は皆署名してゐられたので、私は深く考へさせられた事がある。それはもう日本の文章がはるかに複雜になり自由に表現出來る大正の年代だつたのであつた。

この時には、私はつくづくそれに連つて署名する事が躊躇された。この意見書はどう考へて見てもローマ字で日本の言葉を書かうといふ心になり切つてゐる人の書いたものではなく、全く實行とは干はりのない空言に思はれたからであつた。かういふ自分の覺えから思ひ合せて見ると、明治の初めの頃の國字論、新文體論などの主張者の心持と實行との間の矛盾に就いての心理が、幾分かはつきりと考へられるやうだ。必要を感じてはゐる、しかし自分は習慣のままでやつてゐるといふ事で盡きてゐる。萬事が新しい初めの黎明期であらうがどうであらうが、一つの主張が實行に移されないままで公けにされるといふ事は、自ら所論を裏切つたもので、不完全でも實際に行ひつゝ主張されるのでなければ、夢を談るのと同じ事になるのではないだらうか。

これが實行に移されたのは物集高見の「言文一致」がまづ初めらしい。それは明治十九年に公けにされたものでたどたどしいながら口語體の文章で書かれてゐる。處でこれらの考照、取り調べは史家に讓るべきだ。しかしこれら先覺の考慮の跡を見る時に、私どもは切實な感銘をもつてその時代の「心の惱み」に觸れるのである。何か一面に汪洋として新しい眼界が展け、そこからの未知の新しい流れが流れこみ、心がそれに向つて激しい鼓動をして——さぞ黎明の初々しい勇ましさが有つた事であらう——ゐる時に、自分たちの

表現は古い殻の中に閉ざされて、啞のやうな口しか持つてゐない――この矛盾から來る苦惱が時を隔てた今日でも明かに感じられるのである。そしてこの苦惱の生じる心は、全く慧敏で、尊敬すべき飢ゑであつた。しかもこれは單なる文章表現の一つだけの事でなく、その後半世紀の間に日本が内部で伸び育ち、肥え太つた萬般の事の上に働いた知性の表れの一面でもあるのをよく數へられる。

言文一致の實現は小説からはじまる

それで、私がいつも面白い事だと思つてゐたのは、その言文一致の文章が實際の用としては小説から始められたといふ事である。もつと短かい實用の文章の方に早くこの實行が現れなかつたのは、「型」が半ば記號の性質を持つてゐて、人々の心に通じるものが有り、それの不自由さ、不自然さ、不完全さに對する覺醒が起らなかつた故であらう。實際に明治二十年代の頃に、まだ少年であつた私達が、昔から傳へられた型の通りの文章で手紙を書き、それを少しも不思議の事に感ぜずにゐた心持を思ひ合せて見ても、それから、當時の成人たちが、相應に復雜な用事を書き、心持ちを述べた達意の手紙を讀んで、その文章が全く口語性から離れてゐたのを見ても、言はんとする事の表現に對して形式の點での約束、即ち傳統から來た「ものの言ひ方」が有り、それを決して變へようと思はなかつた心持がそのまゝ殘されてゐたのである。

その古い文體に對しての變更を必要と感じなかつたといふ消極的の考へではなかつたので、これには信仰のやうに固い傳統を守る心持が働いてゐて、後に「言文一致」の流れが、隨分それに對して苦しい鬪を永年に渉つてして來たのを思ひ浮べる。「二葉亭研究」第六號(昭和十三年四月十六日)に載せられた前田晁氏の「二葉亭主人の事」の終りの處をここに引用すると、

「翌年(明治四十二年)五月十三日、印度のベンガル灣で不歸の客となられたといふ飛報がわたしたちを驚かしてから二十數日の後、染井の齋場で告別式が營まれた時に、その靈前で島村抱月氏が初めて言文一致の弔文を讀まれたことをも序でに記錄しておきたいと思ふ。

言文一致の創始者に言文一致の弔文にふさはしいといふだけの意味でではない。すでに全く口語文の世の中になつた今日ではちよつと想像がつかないかも知れないが、當時、言文一致は小説以外の一般の文章界にも次第にさかんになりつゝあつたにもかかはらず、一部にはなほ言文一致は卑俗であつて、到底莊重謹嚴を要する儀式文には適用するにたへないと非難してゐた者もあつたのである。ところが、島村さんの弔文はどこまでも莊重であつて、いささかも儀禮を失はずに、しかもよく情意をつくしてゐた。島村さんは實に事實をもつて難ずる者の蒙を啓いたのである。そしてこれが口語體の弔辭の嚆矢でもあつた。」

前田氏のこの話を讀んでゐると、當時、將に消えやうとする燈火のような狀態でありながら言文一致を不

當な文章表現の形として反對してゐた人達のあつた狀態を思ひ浮べて來られる。私達若い者はそれが一方に橫たはつてゐる積亂雲を見るやうな氣持がしてゐた。今になつて見ると、それは古い習慣の傳統を信じ切つてゐる人達の心持で、新しく進步した表現の進路にそつて橫たはつてゐながら、時とともにおのづから消え去つた昔の「習慣・心持」だつたのである。

それにしても、この口語に基準を置いて文章を書かうとする新しい實行が小說から始まつたのは、實に自然の流れであつたのも今になつて私にはよくうなづける氣がする。

文章と現在使つてゐる口語とを二つの別ものにするのは間違つてゐる事だといふ意見を持つた人、その議論を公けにした人は、明治の文學史を讀んで見るとずつと前から有る。それにもかゝはらず、實際に言文一致の文章を書くのは、なかなかさう議論どほりに容易な仕事ではなかつた——これが恐らく初めの頃の狀態であつたらう。前にも述べたが、この主張をした人が、自分では古い形式の文章を書き、平氣でその文體で新文體の必要を說いてゐるのを見ると、全く矛盾至極の事であるが、よく考へて見ると、その明治の初めの言文一致主張者が、自分でその文體を試みて見なかつたと言ふわけでもないかも知れない。各々、その人その人の考へで試みて見たかも知れない。もしこの想像の通りであつたとしたら、試みた人々が誰も皆、試みに失敗したといふ事が、ひとしくその人々の歸着する處であつたのだらう。

議論の正しい事は信じてゐるが、やつて見ると巧く行かなかつた。それでやつぱり被り馴れた古帽子をかぶつて、新しい者へだけを說いたといふ事ではなからうか。私は物集高見の口語體の文章を讀んで、一層この想像を明かに描くのであつた。私自身の經驗から推察してだが、嘗つて一切をローマ字書きにしたいと思つて、それの實行に熱中した時、相當の熟練はしたし、大體どんなものも書ける自信は持つたが、どうしても世間一般からはづれて、或る範圍だけにしか通用しないといふ不自由さから、やはり漢字かな交りの文章を主として書く方に逆もどりをしてしまつた。この經驗も極く初期の言文一致論者との間に幾分か相通じたものが有ると思はれる。

それは一面で、一方には物集高見の文章を讀んでも感じられる事だが、口語體の文章を書くといふ事と、口語をそのまま文字に移すといふ事との間に、一つ重要な差別のある事が、まだ實驗ずみになつてゐなかつた時代なので、自分の意見に從つて文章を書いて見ると、無駄が多く、だら〳〵と長く、まどろつこしく、いかにも「文章になつてゐない」——つまり讀んで見て、心持がすつきりと通らないのを自分でもよく感じる、といふ自家撞着に墮ちたといふ點も考へられる。そこで自分でもあきれてしまひ、手がつけられなかつた苦しい經驗を、その人達は味はつて居はしなかつたらうか。かういふ想像は決して架空ではないと信じられる。そこで初めて、二葉亭や美妙齋が、「だ」「です」で文章を切るのを各々定めたといふ事が、重要な苦心の表れであつたとうなづけるのである。

主張はありながら、誰も手をつけにくかつた言文一致の文體が、小說の製作に限つて、すらすら書けたと

いふ事はちよつと奇異の感がする。その作者が偉かつたので、その以前の主張者はたゞ思ひついただけで論議したといふ事になるかも知れない。つまり主張、論議が先に立つ、それをする人が自分では手をつけないで、實行をする人を待つてゐるといふ點も有つたらう。それが一二の先覺者であつた小說家の手で實際に着手された。かういふ順序になるかも知れない。しかしかういふ考へ方があるとしたらば、それはもつと考へて見なければならないやうである。

私は大膽にかう考へてもいゝと思つてゐる。小說の文體が「言文一致」になつてゐるのは既に三馬一九の時代からだと。「膝栗毛」でも「浮世風呂」「浮世床」でも、あれは口語と文章とを極めてよく調節して書かれた言文一致の文體であつた。もつと前に遡つてもいゝのかも知れない、兎に角德川後期の小說の文體が、當時物語草子は碎いて話すと言つてゐたその事が言文一致だつたのだと私には受取られる。小說の文章には既にさういふ訓練も傳統もが古くからある。勿論それは必要が敎へてさうさせたのだ。

たとへさういふ穿鑿をしないとしても、坪内先生の「書生氣質」は、古い傳統を受けついだ文章ではあるが、それが明かに口語を土臺にして自由に書いた作品であつた。現在文學史家が一つの「劃期の仕事」として稱へてゐる言文一致創始者は、小說を書くのに、これらの素地から生れ出ても一歩文語體の習慣を捨てた、それが言文一致の創始者の事業だと思つてもいいやうだ。かういふ素地が有つたから小說の製作に、言文一致の體が明かな調節のあるものとして現れたので、初めの主張者達が「思へども爲し能はざりし」事が、立派な一つ形となりそして更らに幾階段もの鍛錬と變遷とを重ねて行くやうに生育し始めたのである。前に引用した前田晁氏の言に、後年明治の時代が終らうとする頃までも、世間か小說の文章には言文一致は適してゐるがといふ風に見てゐた理由、その觀念の本性は實は、曖昧なものだつたが、言文一致を卑俗だと見てゐた理由が改めて考へられる。

言文一致の創始者

ところで、その「言文一致」の創始に就いて、山田美妙齋と二葉亭四迷と、この兩氏のどちらが早いとかおそいとか一寸本家爭ひのやうな事が、それとなしに主張されてゐるが、それは餘り重要な事ではない。それよりも私は兩氏が各その親炙したヨーロッパ文學の影響が、その表現に就いても働かざるを得なかつた結果だと思つて、その點に深い興味を感じてゐる。元來、文學の藝術に身を委ねるものにとつて、表現のくふうといふ事は、一つの肉體上の要求と見て然るべきものであらう。どうも文章を書くのに自分に對して滿足するやうなものの言ひ方を――つまり表現をしなければ治らないといふのが、誰しもの本能からの要求であるべき筈である。これが無い作家もあらうがそれは論外で、誰のでも文章の「癖」と見られるものが――全體から見ての癖である――その人のものの言ひ方である。

美妙齋の方から考へて見る事にするが、美妙齋はイギリス文學に親しんだらしい。習得したヨーロッパの言葉がイギリスのだつた關係から、その小説を多く讀んだものと見える。そしてそれらの物語ぶりがちやうど心にはまつたものと見える。同じ仲間で（親しかつたかどうかは解らないが）あつた尾崎紅葉もやはり同じやうに、多分同じやうな範圍の讀書（外國文學に就いて）をしてゐたのであらうが、趣く處がまるで違つてゐるのは、兩氏の性情の違ひに基づいたものであらう。尾崎紅葉が言文一致の創始者の「群の一人」でなかつたといふ事を考へて見ると、實に面白い。紅葉の方が我が強くしつかりしてゐた點もあるし、傳統の表現をさらにずつと自由に豐富にする才能もあつた。も一つは美妙齋のやうな抒情詩家風の空想家よりずつと實際家だつたやうに思はれる。必ずしも文才が勝れてゐたなどと言ふ位の簡單なわけではなしに、どうして言文一致などといふやうに新表現に手をつける氣などの起る人ではなかつたやうである。

本間久雄氏の「明治文學史」を讀んで見ると、なるほど美妙齋は慧敏な青年であつた。本間氏は美妙研究者らしいが、同時に少し度をすごした贊嘆者でもある。それで思ひ合されるのは内田魯庵の美妙齋觀察記で、この方を讀んで見ると靴を隔てて痒きを掻く感がなく、且つ同年輩の青年期の初めに受けた印象をずばずば書かれてゐるので鮮かにその人と時代とを會得出來る。私には魯庵が

「丁度此の歐化主義（鹿鳴館時代）の最絶頂に達して、一も西洋、二も西洋と、上下有頂天となつて西歐文化を高調した時、此潮流に棹さして極端に西洋臭い言文一致の文體を創めたのが忽ち人氣を沸騰して、一躍文壇の大立者となつたのは山田美妙齋であつた。美妙齋は恰も歐化熱の人工孵卵器で孵化された早産兒であつた。」（「明治の作家」――「美妙齋美妙」）と言ひ切つたこの論斷と、自分の古い記憶に殘つてゐる美妙齋の作品の印象と、さらに本間氏の明治文學史に詳細な説明をしてゐられるのとを思ひ合せて見て、改めて美妙齋の新文體のよつて來る所以が明白になつた感がされる。

まづ私は本間氏の文學史によつて初めて美妙齋の主張した言文一致論の大體を知る事が出來たのは有難い事であつた。勿論、その時代のとしてもその議論は極めて簡單であつたし、も少し精密に當時の他の言文一致論と對比したらば、必ずしもそれが獨創と見られないもので有りさうに思はれた。たゞひどく目につくのは美妙齋の意丈高になつてすべてを否定してかゝつてゐる氣焰である。本間氏はそれを抱負の大きい所以に歸してゐられるが、私には年少の客氣の思ひ上つた姿はいいとしても、その抱負らしく見せてゐる高慢な點が如何にも變に感じられるのを止められない。

特にそれを感じる所以は、その議論で他の文章を否定してゐる當人が、作者としての作品の表現――その人自身の文章が、極めて不自然なこしらへものである點である。その時代とか、作者の年齡とか、いろいろの條件をつけて見ても、不自然な、無理な、粗末な理づめのこしらへものである事は、飜つてその議論も必然の要求からでないと考へるより外に考へようがあるまい。魯庵は美妙齋の文章のあくどさを罵倒してゐられるが、私にはあゝいふ風にものを言はずにゐられなかつたのは普通ではないと思はれる。

私はヨーロッパの文學作品に對しての智識は貧しいが、私の知つてゐる中にあんな擬人法もあんな變な表現法も有るのを見た覺えはない。才華を誇つてと見る人が有るとしたら、私はそれにさへ反對したくなる。要するに新しいものを考へついたから、それに依り貧しく狹い心でいろいろの獨りぎめの理由をつけてこしらへ上げた細工ものにすぎない。ただしかし、あの表現が作者自身に少くとも美しく見えたのだらうが、その自ら良いと思ひ、美しいと思つた心持が既に變だ。

要するに美妙齋は細工屋にすぎなかつたと、私は判斷してしまつた。同時に私ども年少の時、口語の文章を書き始めた頃には、たゞの文壇の人氣とか、忘却された人とか言ふ表面の理由だけでなしに、美妙齋から流れ出した文體の痕跡は絕對に無かつたと思はれる。たとへ短い期間でも、或る間あれほど贊嘆された作家でありながら、そして久しく言文一致の創始者として言はれてゐながら、その人自身がたゞその變な口語體で小說を書いたといふ事實が殘つてゐるだけで、そこから流れ出して後の口語體表現の土臺をなしたものは、何にもなかつたのである。魯庵が「早生兒」と言つてゐられるのは、生れはしたが育たなかつた月足らずの兒といふ意味にとりたいと思はれるほどである。

二葉亭の言文一致

二葉亭主人は、美妙齋の頻りと氣負立つて議論したのと反對に一切沈默の中から「浮雲」を書き、飜譯を公けにした。これらの二葉亭の書かれた作品はすべて「言文一致」で、恐らくその表現に苦心慘憺された事であつたらう。一方、世間では如何にも華かに見える風の「名文」或は「名作」らしい美妙齋のこてこての表現に比べて、あくまで地道な直ぐな態度で口語に依る新しい日本の文章を書かうと努めた二葉亭の表現は明かに後年の口語體の文章の源流になつたと言つていい。

二葉亭主人のは次ぎにあげる「余が言文一致の由來」といふ談話で自ら言つてゐるやうに、新文體を創始しようといふ野心に依つたのでもなく、一面に飜譯をするに就いて原作を味ひ得たすべてを――忠實な飜譯といふやうに曖昧な考へ方はいけない――日本の文章に移したいといふ要求と一緒に、自分の製作も出來るだけその內に動くものを粉飾なしに、直接に表現しようといふ、必然の要求に依つて生れて來た文章と見るのが正しいやうに感じられる。美妙齋とは質を異にしてゐる。一方は粉飾を美と信じ、拙劣なこしらへものを巧みないゝ文章と信じたのに、これは直接な呼吸を文章に移して表さうとする要求を唯一の道として步いた。そこで、時がたつに從つて、世間一般が文章の美しさを所謂美辭麗句の空虛な粉飾の中にない事をおのづから知るやうになるにつれて、二葉亭の苦しんで書いた表現が、それとなく了解されそのまゝ流れをつくるやうになつたと思はれる。これは日本の文學の爲めに慶賀すべき事であつた。

二葉亭の「余が言文一致の由來」は、いろいろの點で考へさせられるものが多いから、その全文を轉寫し

て、私の考へあはせる事を書いて置きたい。

○『余が言文一致の由來』

――二葉亭談話

言文一致に就いての意見、と、そんな大した研究はまだしてないから、寧ろ一つ懺悔話をしよう。それは自分が初めて言文一致を書いた由來――も凄じいが、つまり文章が書けないから始まつたといふ一伍一什の顚末さ。

もう何年ばかりになるか知らん、餘程前の事だ。何か一つ書いて見たいとは思つたが、元來の文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで坪内先生の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は圓朝の落語を知つてゐよう、あの圓朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。

で、仰の儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京辯だ。即ち東京辯の作物が一つ出來た譯だ。早速、先生の許へ持つて行くと、篤と目を通して居られたが、忽ち礑と膝を打つて、これでいい、その儘でいい、生じつか直したりなんぞせぬ方がいい、とかう仰有る。

自分は少し氣味が惡かつたが、いいと云ふのを怒る譯にも行かず、と云ふものの、内心少しは嬉しくもあつたさ。それは兎に角、圓朝ばりであるから無論言文一致體にはなつてゐるが、玆にまだ問題がある。それは「私が……で御座います」調子にしたものか、それとも「俺はいやだ」調で行つたものかと云ふ事だ。坪内先生は敬語のない方がいいといふお說である。自分は不服の點もないではなかつたが、直して貰はふとまで思つてゐる先生の仰有る事ではあり、先づ兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き始めた抑である。

暫くすると、山田美妙君の言文一致が發表された。見ると「私は……です」の敬語調で、自分とは別派である。即ち自分は「だ」主義、山田君は「です」主義だ。後で問いて見ると、山田君は初め敬語なしの「だ」調を試みて見たが、どうも旨く行かぬと云ふので「です」調に定めたといふ。自分は初め、「です」調でやらうかと思つて、遂に「だ」調にした。即ち行き方が全然反對であつたのだ。

けれども、自分には元來文章の素養がないから、動もすれば俗になる。突拍子もねえことを云やがる的になる。坪内先生はも少し上品にしなくちやいけぬといふ。德富さんは（其頃國民之友に書いた事があつたから）文章にした方がよいと云ふけれども、自分は兩先輩の說に不服であつたと云ふのは、自分の規則が、國民語の資格を得てゐない漢語は使はない、例へば、行儀作法といふ語は、もとは漢語であつたらうが、今は日本語だ、これはいい。併し擧止閑雅といふ語は、まだ日本語の洗禮を受けてゐないから、これはいけない。磊落といふ語も、さつぱりしたと云ふ

意味ならば、日本語だが、石が轉つてゐると云ふ意味ならば日本語ではない。日本語にならぬ漢語は、すべて使はないといふのが自分の規則であつた。日本語でも、侍る的のものは己に一生涯の役目を終つたものであるから使はない。どこまでも今の言葉を使つて、自然の發達に任せ、やがて花咲き實の結ぶのを待つとする。支那文や和文を强ひてこね合せようとするのは無駄である。人間の私意でどうなるもんかといふ考へであつたから、さあ馬鹿な苦しみをやつた。

成語、熟語、凡て取らない。僅に參考にしたものは、式亭三馬の作中にある所謂深川言葉といふ奴だ。「べらぼうめ、南瓜畑に落こちた凧ぢやあるめえし、乙うひつからんだことを云ひなさんな」とか「井戸の釣瓶ぢやあるめえし、上げたり下げたりして貰ふめえぜえ」とか「紙幟の鍾馗といふもめツけへした中揚底で折がわりい」とか、乃至は「腹は北山しぐれ」の「何で有馬の人形筆の」といつた類で、いかにも下品であるが、併しポエチカルだ。俗語の精神は玆に存するのだと信じたので、これだけは多少便りにしたが、外には何にもない。尤も西洋の文法を取りこまうといふ氣はあつたのだが、それは言葉の使ひざまとは違ふ。

當時、坪内先生は少し美文素を取りこめといはれたが、自分はそれが嫌ひであつた。否寧ろ美文素の入つて來るのを排斥しようと力めたといつた方が適切かも知れぬ。そして自分は、有り觸れた言葉をエラボレートしようとかかつたのだが、併しこれはとうとう不成功に終つた。恐らく誰がやつても不成功に終るであらうと思ふ、仲々困難だからね。自分はかうして無駄骨を折つたものだが……

思へばそれも或る時期以前のことだ。今かい、今はね、坪内先生の主義に降參して、和文にも漢文にも留學中だよ。

この「余が言文一致の由來」は、改造社版「現代日本文學全集第十卷」「二葉亭四迷集」から抄錄したもので、同集の年譜によると、この談話は——二葉亭のした談話の筆記で、明治三十九年五月の雜誌「文章世界」に載せられたものである。私の古い聞き覺えの記憶をたどるまでもなく、この談話の筆記者は當時「文章世界」の記者だつた前田晁氏である。その事も、そしてまた二葉亭自身でも前田氏が談話を筆記されるのが巧いのに信賴してゐたことも同氏の「明治大正の文學人」に收められた「二葉亭主人の事」に細かに書いてある。それでこの談話は前から信賴していいと思つて讀んでゐた中の一篇である。

第一に「何か一つ書いて見たいとは思つたが、元來の文章下手で皆目方角が解らぬ。」そこで坪内先生のとこに行つて談すと、圓朝の落語あれをならへといつて敎へられたといふ點、美妙齋が古今の文章を輕々と論じてゐるのより、この「途方にくれた」心持の深さを私はずつと痛切な同感をもつて聞く。恐らく二葉亭が心を打ちこんで深く讀んだ文學の作品は、その表情と一緒に生きて心に響いてゐたに違ひない。それはやが

てどうしても新しく心の姿、動きそのまゝの表現によらずにはゐられない必然の要求になつてゐた、心がそこまで到達してゐながら、まだ適當な形を備へてゐなかつた、それであつたと思はれる。文章下手と自分で稱してゐるのは、當時の文學上の文章、或は雅文と稱してゐたものが、大凡死んだ表現の型であり、一方の新文章らしい政治小説その他のものは雜駁で生命のないもの、それらの横溢してゐた中で考へて、さういふ文章を好まなかつたといふ心持であらう。全くそれらに興味がない、從つてその中に交つて上手に書けると思ふ氣持は持ち得ないと思つた事は、これは時を隔て聞いても當然と思はれる。だからこの二葉亭の言條を一種の反語として受取るのは間違ひである。二葉亭ほどの立派な作品飜譯を殘した人が、自分で「元來文章下手で」と言ふのは、その時代に對しての反語だと見るが間違つてゐると思ふのである。二葉亭ほどの藝術に對する良心が明かだつたから、眞實さう感じたのだと思ふからで、同時にその言葉に對して、實に同感が湧くやうである。——その結果がかの言文一致の文章がおのづから生れて來たのである。（二葉亭自身は苦心慘膽した文章であらうが、必然にそこに到着したといふのは、おのづから生れた姿である。）

次ぎに、坪内先生が圓朝の落語を學べと言はれたと書いてあるのが、私には久しく忘れてゐた親しみの深い記憶の復活になつて來る。その指導が先生から出たといふ事も久しく忘れてゐたが、若い時分（明治三十四五年頃かに、）二三の友達の口から折よくそれを話された。その前に當の圓朝の落語といふのを一二度聽いた事が有るのだが——私は學生の中には友達づれて寄席ばいりをした事は一度も無かつたが、時々父に連れられて行つた時に、運よく圓朝のはなしに出くはしたのであつた。聽いた時にはたゞ面白かつたといふだけしか心に殘つてゐなかつたが、後でこの先生から出た指針の言葉といつたらいゝか、それを聞くと、たしかに或る暗示があるのを感じた。

今の言ひ方でいふと、その描寫力だ。何れは落語の事であるから、さう復雜な情景ではないが、しかも平俗な日常の話しぶりの中で、それを聞いてゐる者の心に、はつきりした映像になつて情景が映り、人間が生きて活躍し、隨分下賤な人を描きながら、その話しにはおのづからの品格が備はつて居り、といふ描寫の力を備へてゐるのであつた。と、この坪内先生から出た言葉による暗示で、後になつて漠然とながら圓朝を考へ出してゐたのであつた。——自分の事をかういふ場で述べるのはよくないが、さういふ指針を知つて、それからおそまきにでも圓朝を聽きに出かけたかといふと、私は聽いた方がいい勉强にもなるのだらうなどとは思つたが、さて行くといふ事もしなかつた。今になつて自分の無精を後悔されるが、一方にはそれが却つてよかつたとも思はれる。若年の頃の私にとつて、さういふ先導者を持つ事の方が危險が多かつた氣もする。

二番目に、「だ」調「です」調について書いてある處を讀んで、つくづく「言文一致」になる初めの頃にこの文章の切り目の落ちつきに就いて、先人が苦勞された事が思ひやられる。この文章の切り目、それの落ちつきが、當時の——明治二十年代前後の、意識した言文一致創始の時にはひどく氣になつた理由は一應考へて見る必要がある。そこが文章を口語體へ移すに就いてのくくり結びになる言文一致の態をつくる鍵のやう

に思へたのであらう。一文の中に當時俗語と言つてゐた言葉を交ぜて使ふ事は、さほど苦にならなかつたらしいが、くくり結びの切れめに到ると、どうもはつきり考へを定めないと心持が落ちつかない。その點で二葉亭も美妙齋もいろいろ迷つたらしい。

この「です」「だ」の取捨については、その後も引きつづいての是非の論が——際立つた論文などを書いた人も無かつたらうが、またそれほどむつかしい問題でもないが、その後も文章を書く人達の間で、いつまでも氣になる事であつたらしい。四十年代にかかる頃でも、折ふしそれを言ひ出す人が有つたやうな覺えがある。

今日になつて見ると、それはすつかり通りすぎてしまつた後で、ちやんとした安定が出來、輕重が明かになり、自在になつてゐるので、誰もが初めの日のこの迷ひを思ひ返して見る事が一寸困難であらう。當時を親しく知つてゐる人も、まだ生存してゐられる人が幾らもあらうが、その日頃の氣持などは拭ひ消されたやうになつてゐる事であらう。それほど、またこの事は小さい末の問題であつたやうでもある。——しかし、この口語の文體がすつかり安定して、おのづからの姿を備へ、自在の境にはいつたのは、明治も末期の四十年代にはいつてからの事だと思はれる。——つまり今では、二葉亭の「だ」調が基本の表現になり、「です」調は特別の、そして適宜の表情をもつ現し方になつてゐるのは改めて言ふまでもない。

三つ目、この談話を讀んだのは、「文章世界」の誌上でではなく、それよりはるかに後の事だつたと覺えてゐるが、この談話を讀んで實に深く考へさせられた一點は、この「國民語の資格を得てゐない漢語は使はないといふ覺悟であつた。」それは實に目に見えない壯擧と言つていい。

たとへ、二葉亭自身では、それには失敗したと言つてゐるとしても、これに少しでも手をつけたといふ事は偉い仕事で、また偉い覺悟だつたのである。この覺悟の大きな價値は今日でも實際には文字の業にたづさはつてゐる人々の中で、どれほど認められ感じられてゐるかは疑問である。これがもつとすらりと一般に認められ、それに對しての意識が行き渡つてゐたら、日本の言葉は、今よりもずつと美しく明晰になつてゐたらう。

私はこの主張——二葉亭の規則とは關聯してでなかつたが、後に日本語をローマ字書きにする運動に加つて、それをやつてゆくうちに、この意見と同じ處に到達した。それにつゞいて日本語の取捨整理について考へて見なければならないと思つたが、さうなると廣漠たる中に無數に棲息してゐるものと面をつき合せるやうで、自分でも茫然としてしまひ、結局は思ひ切つてその中に飛びこむ勇氣が得られなかつた。且つはその緒も明かには摑み得ずに今日に到つてゐる。——だが、これは日本の言葉にとつて、如何なる方法かで、誰れかが明かに考へて實行にかゝらねばならない重要な問題の一つである。

二葉亭が大膽に、この壯擧を敢へて爲さうとされたのは、吾々が心に銘して嘆賞しなければならない事であるが、同時にその言文一致の文章を書かうと考へられる心組からは、これは必然の結果でもあつたと思つていいやうだ。しかしこの規則は考へて實行せんとし、そして失敗した。といふのは二葉亭自身の失望苦惱

であつて、その二葉亭自身は、國民語の資格を得てゐない漢語を安心して自分の文章に使へない神經を備へてゐるのであつた。この事が、實は實質上から言文一致の流れの方向を正しくしたと思はれる。

四つ目の點は、「坪内先生が美文素を取り込めといはれたが」二葉亭はそれが嫌ひであつた。嫌ひであつた。この嫌ひであつたのは、前の國民語の資格を考へた人が、口語の中に美を認め、それを撰び出さうとする上からの必然の心持である。特に「美文」と當時以後しばらくの間、よく世間が稱へてゐた言葉の飾り、それに對して當時の考へ方の習慣や迷信を思ひ併せて見ると、二葉亭にはそれは死んだ紛飾としか感じられなかつたらう。坪内先生のこの忠言は、眞實を知つてそれを身に帶びてゐる人に向つて、迷盲の說を送つたのである。

以上のやうな事を、この二葉亭の談話に依つて考へさせられる。事實、明治十年代から微かな自覺となつて芽ばえ始めた、日本文體の革正は二十年代にはいつて生長し始め、いろいろの試みの中で、その生存が强まつて來たのである。そして最も正しい要素を備へてゐた二葉亭の事業がおのづから主流となつて流れ進んだと、私は思つてゐる。

春のやの「書生氣質」と矢崎嵯峨のやの作品

幾つかの年譜によると、「書生氣質」は明治十八年から分冊として刊行され、十九年一月に完了した。(本間久雄氏の「明治文學史」、「明治大正文學全集」三、「坪内逍遙」などに依る。)それでこの小說は美妙齋の「柿山伏」又は二葉亭の「浮雲」などよりも、早く世に出てゐる。「柿山伏」が初めの題號「嘲戒小說天狗」として「我樂多文庫」第九集に載せられたのが十九年十一月それから第十三集まで連載され、「浮雲」第一篇の刊行されたのが、二十年七月。まづこんな風で「書生氣質」は、これらの言文一致で書かれた作品より先きだつて刊行され、そして少くとも小說の制作に心を向けてゐた人達に、殆ど全體誰も彼もにはつきりした印象を與へてゐる筈である。

「書生氣質」を、今日になつて讀んで見て考へて見るべき點は、當時どうして坪内先生が小說を書かうと思はれたか、その時代の環境の中でさういふ要求を心に感じられた點と、何かとの理屈のついた用意はあつたらうが――實は私には八九分通り習慣から出て來た文章と思つてゐる――どうしてあゝいふ文體を撰ばれたかといふ二つの點である。作品としては公けにされた當時でも少くとも多少の新しい心をもつた人には餘り感心されなかつたと思ふのが正當らしい。この點內田魯庵の回想記は正直直截にその心持の印象を述べてある。「有體に言ふと、坪内君の最初の作「書生氣質」は傑作でも何でも無い。(中略)であるから坪内君の「書生氣質を讀んでも一向驚かず、平たく言ふと、文學士なんてものは小說を書かせたら駄目なものだと思つてゐた。」(とんで)「けれども『書生氣質』や『妹と背鏡』に堂々と署名した「文學士春の屋おぼろ」の名がド

レほど世の中に對して威力があつたかも知れぬ。」（「明治の作家による」）この魯庵の言を、一種の皮肉と見る可きではないと思はれる。

何れの時代でも、驚き易い雷同はいつも似た姿で現れるもので、もの〻實質を考へてといふ餘裕を與へないで、拍手喝采が賑かに全體をくるんでしまふ。しかし「書生氣質」の時代に於いてはその「輕躁」の奥には新しく生々したもの、時代の眼をぬぐつてくれるものを要求してゐた潜在の力が非常に强かつた事を考へなければならない。この心こそ明治の中期以後の文學を生んだ母胎だつたので、だから魯庵の言ふ「下らない作品」も大きな劃期の鍵になつたのである。かういふ現象は、私などさへも後に幾度か親しく經驗してゐる事であつた。

處で、こゝで特に「書生氣質」を引合に出したのは、さういふ批評めいた事を言はんが爲めではなかつた。私はこの小説の叙述の文章が、どの位「言文一致」の體で書かれた小説と近いものだつたかといふ事を言ひたい爲めなのである。

私は、「書生氣質」が全く文學史の一存在としてばかり取り扱はれる四十年後の日に、改めてそれを讀む必要が起り、やうやくの事で通讀し了つたが、その時に一番興味深く感じたのは、坪内先生がその當時既に多少の論議が公けにされてゐた「言文一致」に對して注目せずに、かういふ表現の態でこの小説を書かれたといふ事であつた。しかし叙述と描寫とを自由にやりこなして、たゞの話のすぢを通すだけより、聊かでも描く處に踏み入る、そこまで進んだ心を持つた人には、所謂「美しい雅文」よりも「俗文」といふ風に當時も呼ばれてゐた文章で表す方が便利であつたらしい。徳川期後期の小説家が、だんだんと細かく描かうとする必要に依つて、習練されたその「俗文」がやはり「書生氣質」を書く當時の坪内先生には一番いゝ文體だつたらしい。それが少し――話し手が變ると必然に變る程度で先生風の文章になつてゐる。これが旣に實質の上から言文一致へ進むについての溫床であつたのだが、先生は何故こゝを一歩踏み越えられなかつたのだらうか――後日になつて見ると、そんな事は一擧手一投足の事に考へられるのだが、當時では實に鐵壁を突破するほどの困難が感じられたのであらうか。

この所謂「俗文」――雅文に對して言ふ俗文から、一階程を踏んだ言文一致の「創始者」諸氏が、この「書生氣質」を讀んだといふ點に幾分の重きを置いて見る。創始者たちは必ずしもこの作品に敬服もしなかつたらうし（魯庵の言ふ通り）それから直接の影響も受けなかつたらうが、少くともこれだけの力は加へられたのではなかつたらうか。即ち、新進のそして自分達より少し立ち勝つた學識のある人が書いた小説の文章といふ點で、おのづから自分等と空氣を同じふしてゐる表現の中に、口語の自由な言ひ表しが含まれてゐるといふ事。それを感じなかつたらうか。――この想像は少くとも何かの眞實を持つてゐるらしく思はれる。そして明かに意識はしなかつたらうが、それが充分力になつてゐるらしく思はれる。

古い作品を參考（研究と輕くいふ人もあるが）にするよりも、すぐ近い日に現れた作品の方が及ぼす力は

却つて活潑なものである。

それで言文一致の流れを考へる時、私は近頃は、すぐ前の階程の見本として「書生氣質」を思ひ出すのである。

も一つ、明治二十二年以來、つゞけて公けにされた矢崎嵯峨の屋の小說、例へば改造社版「現代日本文學全集」に收められてゐる「くされ玉子」「初戀」「野末の菊」（何れも二十二年に公けにされた作品。「初戀」――一月「くされたまご」――二月。「野末の菊」――七月。）などを見ると、何れも素直な自由な言文一致の體で書かれてゐる。美妙齋などの變奇な文體から見ると、遙かに立派な文章でこれを見る時、その頃まだ硯友社の小說家たちが、文章を弄んでゐたのに對し、これは二葉亭の源流にも一本滑らかな流れが加つたのを感じられるのである。

それから後

私はこの創始者たちの、初めの時期に就いてこの一篇は書いて置きたかつたので、それから以後の、この口語體表現の推移に就いては別に新しく書く機會を待つつもりでゐた。ここで一つ、どうも變なのは魯庵の「明治の作家」（柳田泉氏編）を讀んでゐて、以下の事の書いてあるそれであつた。

『言文一致の創始者として山田美妙が多年名譽を獨占し、今では美妙と言文一致とは離るべからざるものの如く思はれてをる。が、美妙の『夏木立』は明治二十一年八月の出版で、『浮雲』第一編よりは一年遲れてゐる。尤も『夏木立』中の『武藏野』は初め讀賣新聞に載つたのであるが、矢張『浮雲』の方が先んじてゐた。』

本間久雄氏の文學史によると、前に擧げた『柿山伏』が美妙齋の言文一致の最初の作になつてゐるので――處で、私はこの『柿山伏』をどうしても手にする事が出來ないので、實はこの心覺えを書くのに就いてそれを讀まずにゐるのだが――これに依ると美妙齋の作品の方が世間に公けにされたのは早い事になる。そこらは魯庵の記憶の誤りででもあるのか？

そこだが、こんな先後は餘り重要には思はれない。少くとも私にとつては美妙齋の言文一致は議論としても、作品としても、後の吾々に重要な恩惠を殘してゐない。單にさういふ文體に手をつけて見た一人、そしてそれに對する議論を、しかも惡く言へば饒舌を弄したといふにすぎないと思はれる。しかも言文一致を主張した先人は、それよりもさらに古くから幾人もあり、物集高見などは、美妙齋よりもずつと眞劍な文章を書いてゐるのが殘つてゐるに於いておやである。私どもが今日の日本の文體が、ここまで口語に近づき、これほどの調節をもつやうになつたに就いて、その源流となつたものを考へる事と、源流を生んだ母胎を知る事が大切であると思ふのである。何れはこれほどの大きい變化が日本の文體に生じたに就いては、その生れる初めの日が偶然で、又或る一人の考への中からだけ生ずるものである筈がない。私はさう思つてゐる。そ

れだから、言文一致で書かれた作品の前後を爭ふやうな考へ方に對して興味が持てないのである。その上奨妙齋の作品の如きは泡沫にすぎないと思はれる。

さて、その後この言文一致の文體はどういふ流れをたどり、どんな風に世間から受け入れられたらう。一言にして言へば三十年代の終り頃までは、表面からはたゞの傍流としか見えなかつた。露伴も鷗外も紅葉もそれにつゞく高名な小說家の人々も、大體その作品を文語の體で書いてゐた。私どもが少年期から靑年期、二十歲前後までの間に讀んだ文學上の作品及び論議の大部分は文語の文章で書かれたものであつた。

しかし、二葉亭或ひは嵯峨のやの作品が見せてゐる表現を、その間に有つて、しかし私どもは特に珍しいものと感じながら讀んでゐたといふ記憶が少しもない。これを思ひ出して見ると不思議な事だと思はれる。普通言ふ「變つた書き方」といふやうな感じで讀む方があたりまへであつたかも知れないほど、大體の文學作品が文語の體の文章で書かれてゐた時代だつたからである。

それを思ひ出してゆくと、言文一致體の文章が「變つた文體」と、奇異の感をもつて見られたのは初期の一時で、その間は割合短かかつたのではなからうか。既に三十年代にはいつた頃には二樣の文體が併び行はれながら、それを誰もが氣に止めない時になつてゐるのではなからうか。

二十年代前後に、言文一致體の小說が發表された後、一般の小說は文章表現の源流を元祿に求めたり、さらに「優雅」な古文に遡つたりしてゐたが、しかしそれに依つて、それぞれの作家が各自の表現の美しさを備へようとする苦心があつた。それは言文一致とは全く反對の方向をとつた流れのやうであつた。けれども私はこれがあの時代の「生みの苦しみ」をしてゐる姿だと見る。それぞれの人が模索して進んだ「入り亂れ」の現象であらう。結局は從來の藝術性の貧寒な、粗雜な、そして極言すると下劣な文學上の表現をのり越して、ずつと美しいものにしたい要求からの惱みであつたらう。

この惱みの中に――依つて來る處に、藝術に對する或る覺醒があつたのだと思ふのである。

「言文一致」といふ語　終り

さて最後に、私どもの記憶の中に、言文一致といふ呼び方がいつの間に消えてゆき、その言葉が死語となつていつたのは、いつ頃の事からであつたらうか、それを思ひ出して見るのは興味の深い事である。勿論、かういふ事にはつきりした境界が目に見える筈もなく、又何かの記錄のある筈のものでもない。しかしいろいろの記憶をたどつて行くと概略の推定をする事は出來ると思ふ。

それはほゞ大正年代の末期頃であつたかと私は思つてゐる。國語問題が熱心に論じられ始め、當時の小學校の國語敎育が新展開してそれが盛んに考究され、實行に移され始めた前後を一くぎりとして、古い「言文一致」の呼び方は「口語體」といふ名に代つた、と、私はまづさう見當をつけてゐる。この頃には既に日本

の文體は殆ど口語體になつて居て、從來の幹流であつた文語の體は、一つの特殊の領域に屬してゐるものになつてゐた。それで「言文一致」といふ名が消える頃には、それをわざわざ口語體とことわるのは、何かその文體を文語の文章と對比する場合か、その他に特に説明を要する場合に限られてゐた、といふ有樣であつた。

二葉亭主人隨想

この頃、若い友人の一人が「明治文學作家論」（上下二册）といふ書を貸してくれた。それの口繪に長谷川二葉亭主人が朝日新聞の特派員になつてロシアに出發する時、文學界の人々に依つて催された送別の會の寫眞が載せられてゐた。それを見て思ひ出した。その時には私もこの日の案内狀を貰つたのだつたが、どうかしたかの理由で出席出來なかつたやうに覺えてゐる。たゞこの寫眞を見ると、出席者三十七名の中に、昭和十八年の今日になると、故人になられた人が十八名以上にも及んでゐる。考へて見るといつの間にか多くの先輩友人が物故してゐられるので、何とも「時」の激流が洗ひ去つた跡を見るやうな感が深い。

この寫眞の寫された日は、明治四十一年六月六日と書かれてある。またその會の催されたに就いては前田晁君の「明治大正の文學人」の中に細かに書いてある。（『二葉亭主人の事』）前田君は昔からいろいろ文學界の事情に通じてゐる人だから、その時の記事を讀むと、おのづから記憶が新しくよみ返つて來て、當時が鮮かに思ひ出される。

二葉亭主人がロシアに行くといふ話が傳へられると、私どもの仲間に一種の昂奮が流れ傳つて來た。あの先

輩が何か偉い事をしに行くといつたやうな心持が漠然とした昂奮になつて口には出さないが、心に强い響が傳へられるのを感じてゐた。實は「平凡」が新聞に出るといふ豫告を見た時、私どもの期待は實に大きかつた。しかしいよいよ作品を讀み續けるとすつかり失望してしまつた。「其面影」もやはり失望させられた作品であつた。徒らに作者の苦心のいたましい話が、さも神聖なものを見て來たやうに話されるだけで、實體の作品には一向心が引き寄せられはしないでゐた。しかし私は毎日丁寧に切抜いて貼付帖をこしらへ、それを後年まで大切にしてゐたが、今でも或は本箱のどこかに殘つてゐるかも知れない。――それほど私は二葉亭主人に對して敬意をもつてゐた一人である。

しかし、何の理由でだつたか忘れたが、この送別の會――今の通り言葉では壯行の會か？　それよりももう少し敬肅の心の厚い送別の會に缺席したので、たうとう生面の二葉亭主人の謦欬に接する機會が一度もなしで終つてしまつた。

しかし、それ故にここに永い間私の心に巣喰つてゐた幻想を――幻想の二葉亭主人を書く事が出來る。

私はいつたい何時頃から二葉亭主人の飜譯を讀み始めたのか、どうしても思ひ出す事が出來ないが、たしか春陽堂から一冊になつて出た『かた戀』が一番初めに讀んだ書である事だけははつきりしてゐる――『かた戀』明治二十九年十月出版、ツルゲーネフの作品二篇を含む。『かたこひ』及び『あひびき』

この『かた戀』に收められてゐた短篇『あひびき』の林間の描寫の美しさと、その何とかいふ娘の純情とは、私の心を鮮かにしいきいきさせ、初めて眞實の藝術作品に觸れたと思つた。多分十八九の頃の事であつたらう。そのあと二三年して國木田獨歩氏の『武藏野』を讀んだ時にも、これは吉江喬松君が讀んでゐて皆に鼓吹したのだが、その吉江君に同感した心持は、たしかに『武藏野』が『あひびき』と相通じたものを含んでゐたといふ點からであつたやうに思はれる。

これは横路にはいつた。その『かた戀』で覺えた二葉亭四迷といふ名は、その後私にはいつも氣をつけてゐて見のがすまいと思ふ人になつたのだつた。そして當時一番流布力の廣かつた『太陽』とか『文藝倶樂部』といふ雜誌で、折ふしこの二葉亭四迷を見つける事が出來た。それはいつも飜譯であつたか、どれも實に心にしみる感銘をもつてゐた。この愛讀者は新刊の雜誌に二葉亭の出るのを待つてゐるだけでは滿足が出來ず更らに進んで古本屋の店頭に積み上げてある、太陽や文藝倶樂部の古本を一つ一つ捜し、その飜譯の載つてゐるのを掘り出して來るといふ事まで頻りにやつてゐたのであつた。

處で、たしか明治三十五六年頃だつたらうか、仲間の兄貴分だつた窪田空穗君が中心になつて『山彥』といふ雜誌を出した事がある。その前から新詩社（「明星」）以來の交友であつた平塚篤といふ人が、やはりこの雜誌の員外團式の一人で、私どもの下宿してゐる處によく遊びに來た。この人から二葉亭四迷の「偉さ」を聞いた。それが二葉亭といふ人に對して間接の謦欬に接した初めであつた。

その頃は、二葉亭主人が外國語學校の敎授をしてゐた時代であつたらう。たしかにさうだつたと思はれる。その平塚君の兄弟だつたか從兄であつたか、外國語學校の露語科の學生で、「噂さ」の主人から親しく敎へを受けてゐた人があつて、その人からの話を平塚君が聞き、更らに平塚君の感銘の靄をたゞよはせて私どものなかに來て話をする。その噂さは私どもに隨分大きな魅力をもつて聞かれたのだつた。

今ではその噂さがどんな話であつたか、殆ど記憶の痕跡もないほど忘れ去つてゐるのだが――こんな話も聞いたやうだつたといふ覺えがいくらか有つたとしても、そんな記憶は自分でも信用が出來たものではない――たゞそれらの幾つとなく重ね重ね聞いた噂さに依つて、私の心におのづからこしらへられた「幻想の二葉亭」（或は「傳說の二葉亭」とでもいつたらいいか？）は今でもはつきり覺えに殘つてゐる。そしてこれは恐らく私どもの仲間に共通の感銘ではなかつたらうか、とも思はれる。それは容貌魁偉の志士で、日本の北方發展に對して何か大きなものをにらんでゐる人だといふ事。その人は內に含み藏するものが深く、世上によくある壯士くづれのやうな人ではなく、何か偉いものを持つてゐる心持がしてゐた。この私などの幻想にはそれまでに大切にして讀んでゐた飜譯の譯者といふ事が特別の裏づけをしてゐて、いつも精神的の厚みを持つた人といふ考へを基礎にしてその「噂さ」に聞入つてゐた點もあつたのである。

今でも世間にさういふ人の跡をたつてゐる筈はあるまいが、その時分は政治上からも平安のやうであつて底に不安があつたのであらうか、著しく志士風の人が活躍してゐて、それらの人の噂さが私ども青年の耳にもよく傳つて來るのだつた。例へば宮崎踏天といふ人が、たしか神田にあつたきんき館といふ家で浪連節かたりになつて高坐に出るといふので、その噂さが異常な事のやうに傳へられ、私どもも單なる好奇心からではなしに、そこに聞きに行つたのを覺えてゐる。しかし二葉亭主人の噂さは、かういふ人のとは全くその領域が異つてゐるやうな感銘を受けてゐた。

「文學は男子一生の業とするに足らず」といふ二葉亭主人の宣言とでも言ふべきものを聞いて驚き、その言葉にいろいろの想像を纒りつかせ始めたのもこの頃からの事であつたかと思ふ。

國木田さんも、二葉亭主人からは深い影響を受けたのは勿論であつた。「武藏野」「獨步集」の作品には獨步が呼吸してゐるのは當然であるが、しかしそれにツルゲーネフの作用してゐる事も强度だつたと私には思はれる。そしてそのツルゲーネフは二葉亭主人を通じてのツルゲーネフが多分に獨步に浸潤してゐると私は感じてゐる。

それに就いて思ひ出すのは、明治三十年代になつて、二葉亭の飜譯がやうやく心の響きを帶びて靑年の間に感じられ始めたのではなからうか。私はどうもさう思はれてならない。國木田さんなどが、眞から心を躍らせて感動しながら讀み、その影響が作品にあらはれたごくごくの初め頃の人のやうな氣がしてならない。

（私どもも同じやうに二葉亭主人の飜譯を感動をもつて讀み、それを尊重してゐるのを、內心誇りにしてゐ

た。）獨歩の小説が世間から少しも認められず、どこに行つても快く受け入れられなかつた時分である。その頃の青年で小説を讀む人たち（文學作品として讀む人たち）は殆ど國木田さんなどは認めようとしてゐなかつた。誰も彼も尾崎紅葉たち一まきの作品に心を引きつけられてゐた。青年の雜誌に小説を公けにする人たちは、全くその潮流雰圍氣の中に棲息してゐる作品ばかりを書いてゐた。獨歩がさういふ雰圍氣の圏外に置かれたのは當然の事であつたが、必ずしも獨歩の作品の味ひが、味ふのに困難であつたのとは理由を異にしてゐた。たゞ多數の世間と、雜誌編輯者とがよそ見をしてゐたに過ぎない。眼を硯友社その他だけに集め、小説といふものはさういふものだといふ型をつくつて、心をそこの埒から外に出さないでゐただけの事だ。――それでなくつてどうして急轉直下、ままつ子だつた國木田さんが一世の文豪視されるやうになる筈があらう。鯔が昇天するのと同じやうな變化だ。

まつたくその頃の世間の潮流の中に、潜んだ流れのやうになつてゐた別の感受力があつた。それは青年の中にいつとなく目を覺して育つて來た覺醒である。私は覺醒だと思ふ。田山さんが「梅屋の梅」を公けにし、「重右衞門の最後」を公けにしたのは（田山さんとしての劃期性をもつた作品は、後の「蒲團」などよりも、この方に重要性が多い。「蒲團」は世間が「大膽」をはきちがへて騒いだ騒ぎが大きかつただけである。）恐らくその覺醒に一つの小噴火口が出來たのであつたらう。それより以前に、青年層の中のどこかに聲はたてなかつたが時代の幹流として世間が認めてゐた文學を否定する心が生れてゐたのである。二葉亭主人の飜譯は、鷗外先生の「水沫集」、雜誌「文學界」（各その性質は違ふが）と一緒に、この新しい覺醒に對して大きい力を持つてゐた。

私どもも、心を躍らせてそれらの源泉からの影響を受けたものゝ一人一人であつた。それは當時實に新鮮で、世間に流布してゐる一般の文學よりも、その美しさがずつと深かつた。

その後、自然主義運動と稱したものも、白樺派も、又は更らに新しく生じた新しい文學も、その作品に對する世間の感應反響が、私はそれらをたゞの氣まぐれ雷同から生じた敏感からの、目まぐるしく移り變つて行つたのだとは思はれない。なるほどその間には亂雜な動搖もあつた。しかし私には「日本の心」が一つ一つ目を覺して來たのだと思はれる。柳田國男先生が、「明治大正史」の一冊「世相篇」の中の、「仕事着の搜索」といふ項で、洋服がいろいろの職域の人達の仕事着になつた例を擧げた後にかう言つてゐられる。

> 併し單なる模倣で無い證據には、最初から必要なる變更を加へて居たのである。例へば學生が制服に足駄をはき、ズボンに帶を卷いて手拭を挾んだりすることは、三四十年前から今も續いてゐる。地方の郵便集配人には、足だけは和服のものが初から普通であつた。兵士でも警察官でも、最も眞劍な働きの際には、屢々是に近い改良が必要と認められて居た。夏の旅人には時々臍から下だけの洋服を着て行くものがあり、俄雨のぬかるみの中では、靴を下げて素足で通る人さへあつた。實際日本の氣候風土、殊に水田の作業を主とする村々に於ては、晴着以外の目的に寒い大

陸の國の服裝を學ぶことは、何よりも先づ足が承知しなかつたのである。即ち生活の必要が之を日本化させたといふよりも、單に落想を外國人から得た新たなる仕事着と、言つた方が寧ろ當つて居るのである。」

明治時代に於ける我庶民全體にわたつてのこの、「心の働き」は、單に仕事着だけの方面で働いたのではなかつたやうである。柳田先生のこの著に對して私は實に感嘆を深くしてゐるのだが、明治の中期以後に起つた文學の流れを考へてゐる際に、この觀察、判斷は實に目の覆ひをぬぐはせる暗示が有つた。私は心をひらいて「然り、然り」と言ひたかつたのであつた。日本の――明治時代に活躍した攝取力は、柳田先生の觀察を更らに廣く思想の世界まで及ぼして類推してもいいと思はれる。明治の時代が萬般に涉つて如何に細かに新しく觸れた文化を味ひ攝取し得たかを考へると、この民族の内に持つてゐた傳來の精神が、どれほど逞しく且つ銳く、旺盛なものであつたかが考へられる。

二葉亭主人の飜譯、それから明治初期に於ける鷗外先生の飜譯は、その分量から見れば極めてわづかであつたが、恐らくこれが呼び覺した力は意外なほど强いものであつたと見られる。それと併行して基督敎信徒の方面と、語學者の方面からの輸入として英米の文學もあつたらうが、その方面には文學の流れを作るほどの感化力のある飜譯はなかつたと思はれる。アメリカ宣敎師が片言日本語でやる說明を眞似したやうな飜譯の物語が、よく基督敎書店から頒布されてゐたが、讀んでも面白くも何ともなかつた。それらに比べて、私どもの青年期の心に意味を與へ、啓發をなしたのは、この少量の飜譯であつた事は否めない。二葉亭主人に對する深い敬意はここから生じたと思つていいやうである。――飜譯が嚴正であつた、ロシア語に通じてゐたといふやうな事は、二葉亭主人自身の用意又は武器であつたので、その價値の重さは、立派な藝術作品を身をもつて味ひ得た人が、それを日本語に移植するに充分の藝術上の才能を備へてゐたといふ點に有る。そしてこれらの移植が、沃土の上に播かれた種子となつたのであつた。

これが文學の方面でも、前に引用した柳田先生の判斷を裏書きすると思ふ理由である。

前に述べたやうな種子の稀れな少い時分には、貴重さがそれに比例して大きくなる。近頃になつて二葉亭主人に干する魯庵氏の追憶記や、阪本浩氏の傳記などを讀んで見、又二葉亭主人自身の手紙日記などを讀むと、さういふ仕事が如何に主人にとつて惱みであつたかが、よく察しられる。文學は男子一生の業とするに足らずと言ひ捨てたのなども、つくづくその人の身になつて察しる事が出來るのだが、雲の中にゐるやうな正體の見えない人で、どうも深みのある心と、すばらしい作品を書く人が、このやうな言葉を言ひ捨てて、何か他の大きなものに向つて取つ組まふとしてゐると聞くと、當時はその正體が實に怪偉なものに感じられるのであつた。

一般の感銘もここに集つてどこか似よつた感じを持つてゐたらしい。二葉亭主人に對して、この幻想のや

うな感銘は、その頃の文學好きの青年、特に二葉亭主人を尊敬してゐる青年たちの、これが一つの迷信、偶像のやうであつた。四十年頃に初めて前田晁君と知るやうになつたが、その時分前田君は旣にその「迷信」の本尊に親炙してゐたので、前田君からも二葉亭の印象をいろいろと聞く事が出來た。しかし私はその新しく聞く話で、少しも前からの幻がくづされなかつたやうだ。

やはり、例の「男子一生の業とするに足らず」が、何か復雜な、もつと活躍のある他の世界に向つて、巖壁を突き抜いて行かうとして、待期してゐる恐しく強い膂力を持つた人を感じる度が深まるばかりであつた。人それぞれで、二葉亭主人に對するこの種の幻想は多少の違ひが有るとしても、これはかなり一般性をもつた幻想であつたやうだ。その言葉は隨分後になつても、事あり氣に解釋されてゐるのを讀んでも解る。よく口繪などに使はれる寫眞を見ても、どこか深刻な壯重さをもつた容貌と、話に聞くとがつしりした大きな身體の人だつたといふから、親炙した人もその人の「政治計畫」をなみなみでない心からと感じたらしい。その印象が話し傳へられるので、迷信に似た感銘が一層濃厚になつてゆくのであつたのだらう。

魯庵氏の回想記、又は忠實に見て書かれた阪本活氏の傳記「二葉亭四迷」を讀んでも、二葉亭主人は一種眞率な實行家であつた事はよく解る。微塵も浮薄な影がなく、信ずると實行しないではゐられない人であつた事はよく解る。特に日本の將來を憂へ、その憂ひの對照をロシアと見た心も納得出來る。それ故にこれを何とかしようとする工夫の苦心が敬意をもつて會得されもする。

この情熱の向つてゐる方向から、「男子一生の業とするに足らず」が出たのは、二葉亭主人の場合には自然であつたらう。しかし、その傳記を讀んでゐると、この情熱——あれほどの人が、あれほど心を燃え立たせて、「男子一生の業」として執着してゐた目標は、どうも實際には空想であつたやうには思れるのである。しかもあれほど濃厚な幻想を多くの後進の青年の胸に描かせたのが、その空想の中でもがいてゐた人の姿から出たものだつたのは何とも寂しい事である。

何事にも眞劍で熱心、そして心をひそめて向ふ人が、一生をかけて取つ組んだ相手が、餘り大きすぎたと見るよりも、その自身の心に、どこか焦點の確かでない處が有つたやうに思はれる。これは實に寂しい事實であつた。どうも私にはさう考へられるのだが、二葉亭主人は自身では懷疑派だと言つてゐられるが、それよりも廣い意味での批評家でありすぎたやうに思はれる。「もつと本式の實行家」ではなかつたやうである。

ところで、二葉亭主人が否定しながらも苦心の限りを盡してしかも自ら滿足の出來なかつた文學の方面では、後の時代に重要な影響を殘してゐられる。たゞそれに就いて、私はかういふ事を考へて見る。

それは、その當時何故坪內先生が逆に二葉亭主人の影響を受けなかつたのだらう、といふ事である。謂ふまでもなく坪內先生は、最初からの二葉亭主人の知已であつたし、半ば先輩で半ば友人であつたし或る種の指導役でもあつた。二葉亭主人が人生、人間をあゝいふ眞實心で視て、深く考へるあの感度を坪內先生が知

つてゐられたのは當然の事であらうし、先生がどれほど深くそれを感じてゐられたかも想像出來る。然るに坪内先生の作品に、殆ど全くといつてい丶ほどこの生きた眞實の魂の影響が現れてゐない。元來藝術の制作をやる人達の間には、何かの意味で互ひに影響しあふものである。それにしては初期の頃に於ける二葉亭主人の藝術に對する態度の深度と美しさとが、若かつた時代の坪内先生に作用するのが當然の事であつたらうと思はれるのに、しかし、それが案外に先生を覺醒させてゐる處が感じられないのはいぶかしい。當時の先生の作品の上からも、その後の作品についても、さう思はれる。この二人の心は結局因緣の世界が別であつたのだらうか。

この點——つまり十八九年代から二十年代にかけての、よろづの點で單純で乏しく、新しい藝術が生れようとしてゐながら幼稚で、從つて純潔な驚き易い時代に、若く氣を負つてゐた坪内先生が、二葉亭主人と親しい交渉のあつた事は、後になつて靜かに考へて見ると、先生には實に鋭い刺激でなければならないと思はれるのだが、先生は案外その美しい深淵を覗いて見られなかつたやうに見える。

理解が出來なかつたのだらうか。つまり時代が若すぎて、二葉亭主人の内に呼吸してゐた魂の美しさは、了解されなかつたのだらうか。坪内先生にその深さを受け入れ得なかつたと見られる「無影響」は、實は一人の坪内逍遙の損失でなく、明治時代の展開に何等かの點での停滯にもなつてゐる。さう思ふのは、先生はその若い時代から、いつも水先案内の役をつとめられた人々の中での、重な一人であつたからだ。

終りにこの一項を加へたい。

「二葉亭の訃が傳はつた時、知るも知らざるも巨木倒るの感に打たれざるは無かつた。其の巨木が梅や櫻の如き花木であるか、或は松や柏の如き常盤木であるかを知らないものでも、パンゼイやカァネエシヨンのやうな小さな土器鉢の草花だと思ふものはなかつた。當時はまだ勞農の赤ツ氣のホンノリともしない太平無事な露西亞であつたが、それでも一小說家が露西亞へ行くといふのは瓢をかついで花見に出掛ける風流人が寒中山登りでもするやうに危ぶんだらしかつた。二葉亭も亦ゴルキーやアンドレエフの國へ行くに方つてすらも文學の「ブ」の字も口にしなかつた。一新聞社の通信員以上に日本の文壇の大使を氣取る衒氣を爪の垢ほども持合せてゐなかつた。此の非文學說の是非や非文學的態度の當否は措いて左に右く二葉が尋常普通の定木に當てはまらない人物であつたのは二葉亭を餘り能く知らない人にも感知された。

二葉亭は青年時代ゴンチャーロフやドストエフスキーに傾倒して志を文學に立てながら、其の後文學に慊らなくなつたのは文學の避くべからざる遊戲氣分に堪へられなかつたからである。文學は果して二葉亭の信ずる如く遊戲氣分を避けられない乎、假に避けられないとしても、それほど忌むべきものであらう乎は攻究すべき餘地があるが、それは別問題として文學に對して二葉亭

ほど眞劍なのはない。二葉亭の人生に對するや實驗室に於ける科學者と等しく一々精密なる實驗をして數學的に證明しなければ納得しなかつた。『浮雲』第二編は即ち其の實驗報告で、當時或る人は恰も地層の斷面を見るやうだと評した。地層の斷面圖か地形の盛上げ圖か、ドチラか知らぬが左に右く定木とコンパスで作られたものであると評したのは當時の二葉亭の作を能く穿つてゐる。『其面影』や『平凡』や後期の作には酸いも甘いも嚙分けた二葉亭の苦勞人振描寫は窺へるが、前期の眞劍な科學者的人生報告は却つて見られない。藝術的效果はドチラに軍配を擧げて可なるかは人に由つて各々說はあらうが、二葉亭が日本の創作界に新たに開拓しようとした新らしい嚴肅な人生觀照は『浮雲』第二篇以後の誰の作にも、二葉亭自身の作にだも見られなくなつた。

二葉亭の人及び藝術に就いては人各々見る處があらう。が、初めは軍人を、後には外交家を志し、ドチラにも志を得ないで文學に趨り、文學にも亦安心を得ないで一時腰辨に韜晦し、東家西家暫らく人生の彷徨者となつたが、最後に終に久戀の舞臺を得て花々しく一と芝居を打つつもりで勇んで露西亞の旅の途を瞻めたのが、一端役をだも振られる遑が無くして半途で病に仆れて了つたのは恐らく死んでも死切れない遺憾であつたらう。二葉亭は小說家で終るを喜ばなかつたが、終生志を得ないで、自ら屑しとしない小說家として終に最後の幕を閉ぢたのは生活それ自身が一生の使命の艱みに悶えた小說であつた。遮莫れ、常に不滿、絕えず不平、不遇失意をオモチャにして一人相撲を取るの觀があつたは、渠も亦慘敗の苦汁を舌打して賞味する "Sturm und Drang" の時代の放浪兒なる哉である。

魯　庵　生

（『二葉亭を懷ふ』――現代日本文學全集「二葉亭四迷集」序）

この短い二葉亭主人との古い親友である魯庵氏の一篇、如何にも要を得た序文は、何か直接の心持を含んだ故人の代辯をしてゐられるやうに感じられる。阪本浩氏の傳記を讀んでも、これに似た感銘を受けたのだが、主人自身の一生が大きなにぎりこぶしを振りながら悶えもがいてゐる悲劇の感を受けるのは、誰もの感銘に違ひない。

それを感じると同時に、前に述べた二葉亭の生涯が求めもがきながら、一部は空想に追はれてゐたと思はれる點も、もしロシヤの滯在に健康が傷けられなかつたら、新しい運命の展開があつて、その經綸が事實となつたかも知れない。それは一切判斷を超えた未知の闇の中に沈んでしまつたのである。しかし、私はどうもその『空想』が二葉亭主人の性格組織の一原素であつたやうに思はれてならない。この『空想』といふのは、目標に對しての硏究をした智識も備へ、計畫に向つての組織力もあり、廣い觀察力、理解力もありながら、萬般の備へが具つてゐながら、何か一つ實際からはづれたものがあつて、いつもその實行の生長をくづ

す、さういふ性格の組立ての人に就いて考へられる「一要素」である。よく世の中はこれを運命といふ。しかしそれは必ずしも運命ではなく、器械の齒車がそこにゆくとがちゃりとはづれる何か必然のものが有るのではなからうか。

　二葉亭主人の生涯を靜かに考へると、私はその點を感じて來るので、つい私はこんな事を書いてしつた。これは或は故人に對して非禮の業であつたかも知れない。

藤村覺書

或る仲間の直接先輩

　この覺え書きは、おもに「破戒」以前に對して書く。ここに島崎さん島崎さんと、どこかなれなれしい呼び方をするのは、私の若い時分一番島崎さんに親炙した頃の仲間の言ひ馴らしをその儘使つたので、今だにその習はしが私に殘つてゐて改つて藤村翁とか藤村氏とか呼ぶのが、どうしてもしつくりしない。それで禮を失した點があつたら、故人の靈に對しても謹んで御詫びするつもりで、心置きなくさう書く事にする。

　これは全く餘計な事だが、明治三十八九年頃から大正初期にかけて、私ども或る範圍の仲間に三人、直接の先輩とも言ふべき人があつた。――斷つて置きたいのは、私はその仲間のうちで、いつもおしりにくつついてゐた一人で、會合とか一かたよりに成つての旅行とかには、殆ど加はつた事がない人間だつた。從つてその人達の細かな言動に就いては殆ど何にも知つてゐない、といふ點である。だから仲間の一人と言ふのは

間違ひかも知れない。言はゞ班に列するにすぎない一人だつたのである。――三人といふのは國木田獨歩、田山花袋、島崎藤村。その仲間では田山さんと島崎さんはさん呼びで、國木田さんだけはどうしたのかさんと君との兩方で呼んでゐた。それも君の方がおもだつた。

今考へると國木田さんに對して氣の毒千萬の事に思はれる一小鎖事であるが、それがともかくその時分この三人に追隨してゐた青年たちと、先輩との交誼交渉の現れであつたとも見られるのである。田山さんは先頭に立つた大將なのでさう呼ばれ、島崎さんは畏敬の念を含んでさう呼ばれ、國木田君は尊敬されながら、青年の中に交りこんで一緒になつてゐる兄貴分といふ處で君にされてゐた、とまあ、かういふ氣持だつたらしく思はれる。

藤村追懐

昭和十八年八月二十三日の、各新聞にこの文壇の長老の永眠の知らせが載せられた。それを讀んで、私も遙かに故人になられた島崎さんに對し、謹しんで香をたき、獨り書齋の中に端坐して故人をしのび、その朝の時をすごした。後の記憶の爲めに朝日新聞の記事をここに寫して置く。この記事はもとより新聞記者の匆卒の間に書かれたものであるけれども、

島崎藤村氏（本名春樹）廿二日午前零時三十五分神奈川縣大磯町東小磯八八の別邸で「東方の門」（「中央公論」十月號）の原稿を執筆中、腦溢血のため急逝した。享年七十二。（平塚電話）

翁は明治五年長野縣西筑摩郡神坂村馬籠島崎正樹氏の三男に生れ、明治二十四年明治學院を卒へた頃より文學に心を寄せ、二十六年「文學界」を創刊、その後「若菜集」などの詩作、小品を著はしたが、「破戒」（明治三十七年）を以て一躍文壇に名を擧げ、爾後の諸作と相俟つて我文學史上に自然主義文學の一時期を劃した。「藤村詩集」「櫻の實の熟する頃」「新生」「春」などの作があつて、大正二年フランスに遊び、また「平和のパリ」その他の著が生れた。昭和年代にはいつて構想健筆冴え「嵐」、つゞいて七年の勞作「夜明け前」が出で、文壇巨頭の貫祿を堂々と示した。この文學的日本主義の顯現には、昭和十年度朝日賞が贈られた。昭和十一年九月のペン・クラブ國際大會には招かれて南米に赴き、日本代表として日本服で押通したといふ逸話を殘して歸朝、昭和十六年五月には帝國藝術院會員を仰せつけられた。其後今日まで「東方の門」を中央公論に執筆中であり、二十五日から開かれる今次大東亞文學者大會に出席の意氣ごみで有つただけに、その急逝は文壇を驚かしてゐる。遺族は靜子未亡人、鄕里長野縣で農を營む長男楠雄氏、洋畫家の二男鷄二氏、三男蓊助氏、末女の柳子さんがある。

この記事を讀んだ時、すぐ私が心の中に思ひ浮べたのは、島崎さんが小諸を出て東京に移られた初めの西

大久保の家に、初めて訪ねた印象だつた。といふのは、これが島崎さんに對する私の第一印象だつたからでもあらうが、フランスから歸られた後はほんの一二回しか逢はなかつたので、晩年の島崎さんと極めて疎遠であつた爲めでもあらう。――年をとられてからの島崎さんは、以前よりも一層淸らかになられた感じが殘つてゐて、思ひ出すと嬉しい。私は絕對に島崎さんのデス・マスクなどは見たくないと思つてゐる。――處でその西大久保の新居に初めて島崎さんを訪ねたのは、明治三十八年の夏で、私が學校を卒業して間もなくの頃の事だつたと思はれる。

その頃の西大久保は、まだ畑がそのまま殘つて居り、林、屋敷林、藪、それから常時の東京名物の一つだつた躑躅園も有るといふ村の樣相を九分通り備へてゐて新開町になり始めの時分であつた。島崎さんの家は、新宿の電車終點――今の停車口の處で、新宿のあの賑かな場所が、埃だらけの寂れ切つた場末町だつた――からはいつて間もなくの處に、鬼王神社といふささやかな村のお宮――小さくはあつたが淸らかなお宮だつた――があり、その邊は少し前から住居を建てた人が集つてゐるといふ場所、大きな盆栽植木屋、郊外住宅のかたまり、その出はづれといつた處に新しく建ち並びかけた家の一つであつた。前からの住宅街の中には小泉八雲さんの家もあつた。

西大久保の新居に初めての訪問の時、私をつれて行つてくれたのは蒲原有明君であつた。その家は北側の窓がすべてすぐ通りの道に向つて開いてゐるといふやうな道沿の家で、その後西大久保から柏木あの邊一帶にぞくぞく建てられた粗末な安普請の一つであつた。はいつて行くとささやかな庭に、四つ目垣があり、鷄頭や朝顏、百日草など、よく農家が普通に植ゑてゐる草花が少しばかり植ゑこんであつたのが目に殘つてゐる。屋根の低いトタン張りの家で、どこか長屋の感じがした。山崎斌氏の「藤村の步める道」を讀むと、その中に西大久保のこの家に就いて蒲原君が書いた思ひ出が引用してある。

「……家は極く普通の四室ぐらゐのささやかさであつたが、書齋と言はるべき一室が主人公の意匠の加はつたもので、まづ類のないものであつた。素より月並な文化的裝飾のあらうはずもなく、ただオリーブ色に染めさせた木棉の壁かけのやうなものが自慢であつたものの、大體部屋を地床におとしてあつたのがめづらしいのである。それで他室からは一尺以上も下つてゐたので、そこに座つてゐると穴倉めいて、書齋といふよりも仕事場といふかたちであつた。」

この思ひ出を讀むと、その部屋がまざ〱思ひ出される。これを書いた蒲原君につれられて初めて西大久保を訪ねた日にも、私どもはその書齋に通されたのであつた。私は何にも知らない學生上りだつたので、この書齋を變な部屋だと思つただけであつたが、そこには小形の机が一つ置いてあり、他には何にも無かつた。後で見た新片町の書齋も同樣だつた。これが島崎さんの好みらしい。この床を落した部屋で、蒲原君が例の大きな高調子の聲で話をするのに、初對面の主人に實に落ちついた靜かなもの言ひをされる。それを私は傍で聞いてゐた。

もう今では、その日の感銘は、この漠然とした畫だけで、他には何にも記憶に殘つてゐない。その上この日の島崎さんの印象もはつきりしない。その後永い年月に渡つて、折ふしお目にかゝる位ではあつたが島崎さんを見馴れてしまつた故か、そのからだつきや風貌についても、初めて接したこの日の印象が鮮かでない。

たゞ妙に思はれる事は、島崎さんの住みなれる家がどこも――といつても、私は新片町と麻布の飯倉のと、ここを二三ケ所だけしか知らないのだが、その何れもが何となく穴倉のやうな家を撰ばれる、その事である。西大久保の家は蒲原君の書いてゐられる通りであつたが、それでもまだあの土地が畑場所から新開町へ變らうとする時期だつたので、周圍ががらがらに開いてゐて明るかつた。蒲原君の穴のやうだと言つてゐるのは、たゞ部屋のぐあいからだけの感銘であつたに違ひない。しかしそこから次ぎに移られた新片町の家になると、この蒲原君の言葉が、そのまゝ通用する。石垣の中の穴の感じがする家だつた。

フランスに行つてゐられた留守中の、高輪の家は、當時明治學院で先生をしてゐた落合太郎君と散歩をしてゐる途中で、ここが島崎さんの留守宅だと教へられ、近所に遊んでゐた子供の中に楠雄氏が交つてゐられるのを、その子が島崎さんのだと言はれて、しばらく見ないうちに隨分大きくなつてゐられたのを感じて通りすぎただけだつたが、飯倉の家には二三度訪ねる機會があつた。そこも通りの電車路から石段をおりて行つた處に門のある崖下の家であつた。

ところでその新片町の家に移られた時には島崎さん自身ではかう言つてゐられる。「手狹ではあつたが住心地の好い二階云々」。これには場所が古くから「緣故も深かつた」處なので、その心持も手傳つてゐたらうし、西大久保で出逢はれた悲痛な暴風のあとで、町中のひつそりした家に落ちついた感じもあつたらう。いろいろのその時その場の心持が働いての感じからの言葉であつたらうが、どうもあの家が住心地がいいと感じられたのを、私は奇異な氣持がして思浮べられる。

私は何かの機會に折ふし島崎さんを思ひ、それにつれてその書齋を思ひ出すのだつたが、疎遠になつてしまつた後、實際から離れて幾分かづゝ私の中に概念を築き上げてゐる處もあらうが、島崎さんの撰んで住まれる家を「島崎さんの憂欝」とに相聯關した交涉があるやうに思はれる。島崎さんにおのづから備つてゐられた壯重さ――誰でもきつとすぐ感じたらうと思はれる壯重、重厚の風、その奥にかたく侵されない鑛石から發する鋭い光のやうなものを感じる人柄、その他、一口に言へば復雜な美しさを備へてゐられながら、いつもどこかに「憂欝」が蟠つてゐて人を壓するやうな風で現れる島崎さんには、何かそのからだの組立ての中に沈默した暴力が含まれてゐたのではないかと判斷される。

その作品を讀んで、全體に澁滯を感じる素はここから生れて來るのではなかつたかとも思はれる。この島崎さんの撰ばれる住居書齋なども、たゞその美しい趣味、生活を愛される上からの特殊などだけではなく、私には本質の底から自然とさうなる處のある氣がしてならない。

かういふ風に思ひ出を書いて來ると、さう深く親炙した人でなくとも、まだいくらでもいろいろの事が心

に浮んで來る。その中の一つ二つを書いて、私の覺書の本すぢにはいつて行かう。

あの「破戒」が綠陰叢書として刊行された時の感動を私は今でも忘れない。島崎さんが小諸を出て來られるに就いての前後は、「藤村の歩める道」に、細かに島崎さん自身の心の經過をたどつて書いてあるから、それでよく解かる。私は當時一部の靑年達が、それから受けた感銘、感動を外側の方から書いて置きたい。

いつたい島崎さんの小說隨想の殆ど全部といつていいほどが、細かに自分を說明してゐられるものである。藝術にたづさはるものが廣い意味で、作者自身自身の說明をしない人はあるまいが、島崎さんほど鎖細に涉つてそれをつゞけ通した人も少からう。島崎さんの狹い處「特殊」もそこに有る。その狹い一點から萬有にひろがり通じやうとされたと思はれるが——言ひ換へると、その「點」の一點を普遍であらしめようと心を碎つて精進されたのであらうが、そこまでは到達されずに終つてしまつた。しかし島崎さんの身邊周圍の說明は、よく世間から了解されたし、感動を傳へもした。これは島崎さんの一生を通じて變らなかつた事のやうであつた。

小諸の生活を切り上げ、新しい出發を覺悟しての處女作「破戒」の未定稿をもつて、居を東京に移すといふ、この事が、私どもの間にひどく重大な感動を帶びて傳へられた。その話を私に聞かせてくれたのは蒲原君であつたが、蒲原君の一種の感動を私はそのまゝ受取つて深い意義を帶びてゐる事と思ひとつた。これは一面「若菜集」「落梅集」の詩人藤村に對する尊信が背景になつてゐたのだらうが、後になつて考へると、どこか迷信じみた感動であつた。しかし、それが私一人の心持に止るのでなく、少くとも當時往復してゐる友達の多くの部分が、同じ感動をもつてゐたやうに思はれる。

それから西大久保の生活の間に、島崎さんを襲つた不幸、その間に苦しみを荷ひながら精進されてゐた、多分二年近くの沈默の間、誰も島崎さんが制作をしてゐられる事を忘れなかつた。そこに何か强い力が籠つてゐるやうに思つてゐなかつた人は少からう。

その後、綠陰叢書第一篇「破戒」が刊行されたのである。これは實に尊重の念に充ちた期待をもつて迎へられた。私なども それを實に喜んだ記憶が今だにはつきり殘つてゐる。處で、私はその「破戒」を讀んだ後、ひそかに失望してしまつた。こんな風に島崎さんに對しては、初めから世間の期待と感動とがあり、それが晚年に至るまで少しも變らなかつた。

「文學界」靑年の惱み

「破戒」以後の島崎さんの文學生活よりも、私はそれ以前に遡つて行く事に心に向けて見たい。詩人藤村の時代、その中でも「若菜集」時代と、更らに遡つた靑年藤村を考へる事は何かの鍵をさぐる事に思はれるのである。

明治末期から起つて、日本に藝術らしい文學が現れて來るやうになつたその源流を、私は考へて見たいのである。これを私はよく一口に言ふ「小說神髓」の出現により、時代を劃して新しい流れが生じたといふやうな事で片づけてしまふ事は出來ない氣がする。それも一つの流れの源泉であつたらうし、鷗外先生の存在も源泉であつたらう。基督敎の文學的傾向もその一つ、二葉亭主人の事業もと、それぞれ數へ始めると、さまざまの流の源となつたものがある筈だ。それは水源の大小によつてしみ出す水がいろいろであつたらうし、ぽこぽこと湧ぐ泉でもあつたらう。先覺の事業が後進に與へた影響の中で、後の水脈をつくつたものは、すべて後代を生む源泉として考へて見なければならない。だが、その生む動機となつたものを重んずると同時に、それよりも更らに大きい價値を感じせしめられるのは、その新しい流に依つておのづから目を覺まし、更らに生き育つたそして次ぎの流れを大きく流れさせる底力となつた人々、當時は存在の明かでなかつた人々である。この先人に對して新しい日本文學を展開させたといふ尊敬と共に、それを受けて目を覺ます魂が吾々の民族の中に、たゞ少數の特異ではなく全體に渡つて潜んで居たといふ點に、日本民族の優秀を信ぜざるを得ないのである。

この意味で、「文學界」の青年文學者たちは、微かであつた水源の流れに交りながら、まだ社會からは認められずに幾年かの間流れつゞけた力であつた。その中から一番太い流れになつたのが島崎さんであつた。特にこの「文學界」の青年文學者の心が惱んだ惱みが、私には重要な鍵の一つのやうに思はれる。この青年たちの惱みを單にその時期の世相を背景としてだけ見るのは、どうも不足のやうな氣がする。それにも一つ自發する力が有つた事、即ち「惱み」を惱まざるを得ない心が本然のその人々――そして當時の青年の或層――に有つた事を考へなければならないと私には思はれる。これが源流から流れ出し更らに流れを作つた力だと、私は言ひたいのである。

さて、この人々の惱み……情熱、それがこの時代に、何に依つて養はれたかは、これまでに文學史家の興味のある題目であつたと思はれる。また思つたよりすぢ道がたどり易くもあるらしく見える。基督敎氛圍氣の影響、ヨーロッパ文學に依る覺醒、それらに加へて若い優秀な青年の美しい野心と情熱。又は覺醒された美への憧憬。これを或る人は「主情的新文學運動」といひ、或る人は「西洋浪漫主義」と呼んでゐる。しかしさういふ風に呼名をつける前に、あの時代――「文學界」の時代、文學界の相が極めて單純であつた時代の、或る青年の一群が、おのづから相倚り集つて、互ひに鼓動を通じあつたあの情熱は、どこから生れたのであらう。外からの影響はそれとして、その外のものに呼應した內心の動き、即ちその魂の本質の中にあつたものを考へて見たいものである。その上、この青年文學者の「惱み」は、決して一つの主義でも又は強く唱へられた主張でもなく、それよりもこの人々の一かたまりの傾向――からみ合つた心の動きと見る可きもののやうである。そしてその作品は、殆ど習作であつたと思つていいやうだ。後年その人々がそれぞれその位置に据つた日に、各人の集を編まれた中に、一人もその時代の作品を保存しようとした人がなかつたのを

見てもわかる事である。

島崎さんも古藤庵時代の作品をその生前に編まれた幾回かの全集の中に入れようとはされなかつた。それは當然しかるべき事であつたらう。それでゐてしかも「文學界」が過去の注目すべき仕事であつたといふのは、その同人個々文學上の仕事ではなく、一つの流れが原流の一つだつたといふ點にある。何れもまだ道が定らず摸索してゐる青年の習作時代であつたにすぎないのであつたらうが、その一群の青年の發表した作品は、當時の文學界に對しても一つの新鮮な生活力として感じられたらうし、次ぎの生れて來るものの先驅となりもした。また一面にはかういふ事も考へられる。その當時のまだ眼を覺まさないがしかし新しい道を求める青年を代表して表れた一群。この人々をさういふ風に思つて見てもいいやうである。さう思はれる事は、後の年代になり、別の場合にも、幾度か私どもが經驗した覺えがあるやうだ。例へば明星派の極く初期の時代に、あのなま〳〵しい「肉感の幻」とでも言つたらいゝか、さういふ作品が鳳晶子女史（當時の）から生れ出すと、それを機會にさういふ情感が湧くやうに反應して來た。模倣もあつたらうし他愛のない雷同もあつたらうが、しかし決してそれだけではなく今まで土の中に埋つて眠つてゐたやうなもの——當時の人の心の中でまだ目を覺してゐなかつた種子が芽をふいたに違ひない。その證據にはそれが機緣となつて、青年の情感が豊かになり、いきいきして來たといふ生育に向ふ流れをつくつた。それを恐怖に似た心で批難した人たちもあつたが、その批難をした人は、實感が却つて批難する對象よりもずつと卑しく低い處にあつた爲めの無理解から起つたやうである。——即ち、鳳女史の出發の頃は、やはりあの時代の「心」の或る面の代表であつたと思はれる。

特に、「文學界」の人々が、一つの團結をもち、その機關に雜誌を持つたといふ事が、この代表の立場、或は後の時期への流れをなすのに大きい力になつた。それぞれ美しい情操と表現力、それから當時として清新で眞實の深さの勝れた思想を帶びてゐられたとしても、あの人々の作品が、單獨個々であつたとしたらば、世間の心にはもつとずつと後の時期にならなければ觸れて來なかつたらう。

眉山綠雨

この文學界の青年文學者の放射は、後の時期に向つて流れた影響と同時に、その周圍に向つても働いたと思はれる。それに就いて私はたゞ痕跡のやうなものを見て、想像してゐるのだが、どうしてもこれが一つの事實働いた力のやうにも思はれてならない。それは川上眉山とか齋藤綠雨とかいふ人と、この一團との交友である。

これは例へばと言つて考へる可き二三の人かも知れないが、一葉女史の遺された日記、又は馬場孤蝶氏、平田禿木氏の書かれた思ひ出を讀んでゐると、年齢の點では余りのかけ離れは無かつたらしいが、この兩氏

などは、當時既に名をなした作家たちであつたのが、社會的にも若いこの人達に進んで近づき、交つて行つたのは、一種の「飢餓」から來た牽引だと私は思つてゐる。

一つには、既に新しい黎明を誰もが感じてゐた時期でもあつたらう。それで世間からは既に名を知られ、一面では當代の大家と見える人達も、實はまだ若く、内に自分の藝術に對しての確信が弱かつたので、この新しい潮の流れを感じる心も鋭敏だつたと思はれる。それでその人々が新しいものに接しようとしたのは一種の心の飢餓であつたに違ひない。それの鋭く强かつたのが眉山、綠雨といふやうな人で、その上にその飢餓に對して正直であつたから、おのづから「文學界」の人達との交りが密接になつて行つたのだと思はれる。

內田魯庵氏は、「綠雨醒客と抱一庵主人」の「齋藤綠雨」の中にかう書いてゐられる。

「綠雨は逍遙や鷗外と結んで新しい流れに棹さしてゐた。が、根が昔の戲作者系統であつたから、人生問題や社會問題を文人には無用な野暮臭い穿鑿と思つてゐた。露骨に云ふと、かういふマジメな問題に興味を持つだけの根抵を持たなかつた。が、不思議に新しい傾向を直覺する明敏な頭を持つてゐて、魯文門下の「江東みどり」から「正直正太夫」となると忽ち逍遙博士と交を訂し、續いて露件、鷗外、萬年、醒雪、臨風、嶺雲、洒竹、一葉、孤際、秋骨と絕えず向上して若い新しい智識に接觸するに少しも油斷が無かつた。根抵のある學問は無かつたが、不斷の新傾向の聰明なる理解者であつた。が、此の學問といふ點が綠雨の弱點であつて、新智識を振廻すものがあると痛く癪に觸るらしく、獨乙語や拉丁語を知つてゐたつて端唄の文句は解るまいと空嘯いて、「君和田平の鰻を食つた事があるかい？」などと敵を討つたもんだ。

この思ひ出は、よくその心持を說明してある。一代の皮肉家と呼ばれてゐた人の、この下らないけちな負惜しみは、半世紀後の今日では滑稽にすら値しないほどのものになつてしまつてゐるが、當時はそれでも幾何かの彈力があつたのかも知れない。この人が新しい潮流に感じた觸覺は、魯庵氏が言はれるやうな聰明であつたには違ひなかつたらうが、單なる聰明だけとは思はれない。私には「文學界」の若い人々の情感とも相通じるものがどこかに潜んでゐたと思はれる。それが芽をふいてその間に生育する事が出來なかつたので、從來自分の身に帶びてゐた屬性の中だけで、その文學生活を終つたのであらうが、潜在してゐた共通の種子はやはりこの人にもあつたのであらう。

すなはち、それが「黎明」に對する憧憬であつた。眉山氏に到つては一層、この新傾向に心の呼吸が近かつた。それでゐて尙ほ新しい潮流の中へ溶けこんで行けずに、むだ花の一つになつたのは——「眉山氏の藝術」として、その事業が殘されるとしても、後に展開し次第に生活力が逞しくなつて行つた日本の文學とは、ます／＼離れてゆくのは、眉山氏の觸覺がその新しい心の世界に觸れて感じても、それが氏自身の心臟の鼓動とはならなかつた故であらう。

必ずしも「文學界」同人だけが、この新しい心をもつてゐたとは限らない事は勿論であるが、發表の機關

を持ち、一つの群となつて世間に現れたので、そこに動き始めた流れの姿が見え、またおのづから水脈を集める機緣ともなつたと見られる。同時に、眉山緑雨といふやうな人々を思ひ合はせると、その新しく興らうとする魂の目覺めに對して、それを感じそれに觸れて行きながらも、それぞれこの新しい流れに飛びこんで行けない「何かその人のもの」が有るのを見ると、これが新しい心に對する批判でも、反抗でも無く、もつと本質の人自身のものだつたのは興味が深い。時代の心の中にある錯綜の相が見えるからである。この時代へ來るまで――明治十七八年から二十五六年代は、特に古く流れつゞけて來た文學の頽勢が明かで、停滯した詩情がよどみ切つてゐた。和歌俳句の當時の風を思ひ返すのが、最もよいその說明である。その中に、新しい情勢の文學が生れ始めたのだから、その對比が當時ではさぞ鮮かだつた事だらう。從つてそれの美しい健かさを感じながら、そこへ趨き得なかつた人々の多かつたのも、その理由がはつきり思ひやられる。同じ「文學界」の同人の中にも星野天知氏などは、この中間の存在であつたやうに思はれるのだから、この混淆は甚だ雜然としてゐた事であらう。

「文學界」同人の情熱

島崎さんや北村、馬場、戶川、平田、上田諸氏、「文學界」の靑年のあの新しい情感はどこから生れたか、その道すぢは、極めて單純であつた。基督教の文學性と、その間に親しんだ西洋文學、そしてそれから展開された讀書、それに加へて靑春の純情と、かう數へて來てほぼそれが言ひ盡せるほどである。一つには世態が底に深く力をもつてゐながら、表に現はれ行はれてゐる生活が極めて單純で狹隘であつたのも考への中に入れて見なければなるまいが、この多感な靑年の魂の目覺めは、それほど簡單な境地から生れて來たのであつたのだつた。それには第一に、この若い魂が受けたものに對して感じた感受力。これが新しい流れの初めだつたと思はれる。またそれを敏感にした空氣が世間の中にもあつたのである。

私どもの自分の靑年期の初めの頃――少年から靑年の日に移つて行く頃の事を思ひ浮べて見ても、その時代の世態の中に、私どもの文學心を敏感にさせるものがあつた――即ち簡單な日常生活の中に、特に目立つて美しい花園、心を躍らせる饗宴が、いろいろの意味の刺激を持つてゐた事を思ひ浮べさせられる。それらの點からも、私どもより十年前の、島崎さんたちの靑年期を類推する事が出來る。

例へば、その頃私どもの目と耳と心とに歡びを與へる場所は、ほんのこれ位であつた。寄席芝居、それから老若共通の遊山場。その他に學生達の間には、音樂學校の卒業演奏會、處々の學校で時々行はれる「文學會」（現在の學藝會）、外國語學校の何とか言つた會、上野の白馬會展覽會等々。なほそれより以前の私どもの幼年期に、殆ど古い昔噺を家の中の「かたりべ」から聞かせて貰ふ以外に、書籍が殆ど無く、むつかしい大人の讀むやうな漢文くづしの文章で書いたものを讀まされてゐた狀態と相通じてゐる。そんな本を讀んで

ゐた時代にも何とか——どういふ狀態かでそれを理解して、心に物語の映像を映してゐたのを今になつて思ひ浮べると不思議なほどである。

人それぞれの境涯と賢愚の差、好き不好きの違ひで、同一の狀態にあるといふ事の無いのは勿論だが、まづ寄席芝居は特別の遊樂（最もいゝ意味だけで）の場所、學生たちに寄席は簡單であつた代りに大衆向きでありすぎた。その中での名人の藝を味はふのにしては、年の若いものには力が足りない。芝居は誰しも好もしい。しかしあの中の空氣と藝術とは、その頃の若いものが渇いて飲まうと求めた心の境地とは、一つ別の特殊のものに見えた。それらよりも、はるかに未熟で幼稚な學校演奏會と學校文學會の方に、もつと直接な力を感じた記憶がある。かういふのは私の感銘に殘つてゐる記憶なので、ここからの類推は的のはづれた處があるかも知れないが、新しく島崎さんの「春」を讀み返してその明治學院の學生時代を考へ、または馬場孤蝶氏の同じ時代の回想を讀んでゐると、同時に自分の青年期——明治三十年代の頃の一部青年の周圍の空氣が鮮かに思ひ浮べられる、そこから考へると、この前の時代もほゞ似た感情を持つてゐた氣がする。

島崎さん達の學生期が、決して私どもの時代と同一ではないとしても、ごく似た匂ひと色彩の空氣であつたのには違ひが無さささうである。この約十年の間に私どもが青年になる頃には、それがやゝ賑かになつてはゐたらうが、思つたより進み方は淺かだつたらう。ところでこの人々を圍繞してゐる生活と、その生活の底で時代全體が摸索しながら求めてゐた「展開」、それを自覺しはじめたのは、西洋文化による刺激によるものであつた事は動かせない。その爲めにその新しい生活の種々の相が——生活のいろいろの品目も、感情も、習慣の一部も——輸入され、それを尊重したのは當然の事と思つていい。これは斷じて當時の日本が恥づべき盲從模倣をしたのではなく、「日本の心」が新鮮な若さで動いたからである。その證據には、この中から除々に日本の傳統が——革正され、豐富な姿になつて現はれて來たではないか。いろいろの行きすぎた現象や、つまづきは、力の動きにつれて起る無駄で、それはいつの間にか消え去る無駄花にすぎないのである。

もとよりかういふ動きはこの年代になつて初めて生じたのではなく、もつと古くから、もつと幼稚な姿で（即ち鹿鳴館時代のやうな）はじまり、反動が起り、反省・取捨がおのづからの間行はれて時と共に傳はつて來たのである。それがまづ器具衣服の便利なものからはいつて來て、傳來の生活の中に交りこみ、食物は幾分なじみにくいので後れ、やがて最後に思想感情が傳つて來た。その時代の追懷や研究を讀んでゐてこの跡を考へて來ると全く興味が深い。

生活の上に働く感情や判斷には、特に傳統の力が強く働く。その中で、島崎さんたちの若い心が惱んだ惱みのひどかつた事は、誰でも想像が出來る。若い人々の新しく觸れて美しさに心を躍してゐる思想や感情は、周圍からは一顧の値もないものとされ、生活の資とするには足らぬ。周圍がその青年に求めるものは、ずつと眼前の役に立つ腕と、順應して來る「考へない心」とである。同時にそれでなければ、役に立たない人として見られ、從つてその人に酬いる「金を拂つて」はくれない。これが北村透谷氏をあのやうに苦しめ

て、その清純で氣負魂のはげしい人をこぢらせて行つたと思はれる。同時に「春」の前半で話されてゐる島崎さんの放浪も、目標の定らぬ苦惱も、幾度かの自殺の企ても、これらの矛盾が戀愛とからみ合つて生れたものと思はれる。その點では、たとへまだ若かつた年齡であつたとしても、藝術に對する執着が、どうも本すぢでなかつた事も思はれる。しかし、さういふ個人を離れて、西洋文學の輸入されるわづかの機關――即ち基督教の傳道學校での教育の中から、この人々が、あれ程新鮮な文學境を感じ得たのは、日本だからだと言つていいやうに思はれる。「日本の聰明」だ。しかも、馬場孤蝶氏が何かで言つてゐられと覺えてゐるが、その時分には、手輕にはさういふ西洋文學に干する書籍を求められなかつたといふから、比較的狹い範圍の讀書であつたらうのに、そこから開拓し始めた心の觸角は、青年の純情からの求めてやまない勢ひが、いかに鋭かつたかを思はせる。

しかし、この世間との矛盾は、この一團の人々をいつとなしに藝術の制作から離れさせて行つた。馬場氏戸川氏などは、或は初めから制作の心が薄かつたのかも知れないが、「文學界」の同人が、わづかに島崎さん一人を殘して、賢さうに世間へ妥協して行つたのはおかしい事であつた。「春」にはその消息がかう書いてある。

「機運遂に止むべからず」

と言ひながら市川は手に持つた雜誌を繰つて見て、やがて福富が書いた文章の一節を節面白く讀んだ。

『ピウス二世が法王の位に上らざりし時、其甥に送るうちに「少年の時はめでたきものなり、人生の五月も歡ばしきものなり、されど學藝はそれよりもめでたく、知識はそれよりも歡ばし。」』

市川は岸本の顏を眺めて、味ひ深さうに、其文句を繰返した。

『されど學藝はそれよりもめでたく、知識はそれよりも歡ばし――はゝゝゝ。僕は矢張斯の主義だ。』

菅は市川に同意を表した。『岸本君の旗色は、どうも少し鮮明でないやうだネ、』と言はれて、岸本は頭を垂れた。彼は何か言はうとしてグッと詰つて了つた。唯彼は肩を揺つてゐた。

『しかし、皆が皆同じやうにならなくッても可からう。一人位は遊んでる者があつても可からう。』

到頭斯様な風に言ひ出した。

『そんならそれで可いサ。』と市川は岸本の方へ頭を突出して笑つた。『左様いふ意氣込が有るなら、また頼母しい。』

岸本はまた無言に返つて、深く思ひ沈んで居る。

聰慧い市川に言はせると、今は奈何いふ時世であるかを考へねばならぬ。十年二十年の後に成つても、見られるか奈何か解らないやうな青年の夢を、今が今見ようとしたところで、左樣は世間が許さない。それよりは靜かに學問でもして、傍ら藝術を樂しまうではないか。それが遙かに高尙な生涯ではないか。斯う岸本に說き聞かせた。

菅は譃語半分に、

『君はあの時分に死んだ方が可つたよ。』と笑つて、舊からの學校友達を憐むやうな眼付をした。

『彼の時分』とは岸本が旅に居た頃のことである。（『春』第百七章）

言までもなく、岸本は島崎、菅は戶川、市川は平田、福富は上田と小說の中で變られた名である。この島崎さんの「春」は、特に自傳の性質を帶びてゐるので、「文學界」の青年文學者を知るのに便宜である。そしてこの第百七章前後は、「文學界」同人の精神的に分裂しかけた時期の狀態が書かれてゐて興味が深い處だが、この平田氏や戶川氏が、昂然として「學問」と稱したのこそ、ただのイギリス文學の研究にすぎなかつたのではなかつたか。その聰明らしい風で「學問」にはいつた人は、後年飜譯をするか、穿ちを言ふかで終始してゐるにすぎない。愚直で「無能」だつた「岸本」が、一人藝術を衞りとほして、といふのは惱みと直面し通して、島崎藤村の藝術を生み得たのだつた。島崎さんの藝術に對しては、私などでさへ必ずしも推服出來ない點もあるが、この初一念を衞りぬいた心は尊敬せざるを得ない。この日から遠からぬ後に島崎さんは仙臺に行つて敎師になりそしてその第一集の「若菜集」をそこで生んだのであつた。後の雁が先になつた感がある。「藤村の步める道」の終りついてゐる「年譜」に興味の深い一項がある。

明治二十九年――二十五歲

北村透谷君の一週忌を迎へ、亡友のために「透谷集」を編んだ。この年の五月、平田禿木君の發案により「文學界」の分身ともいふべき「うらわか草」を出した。上田敏、田山花袋、柳田國男の諸君を知る。東北學院の敎師として仙臺に赴くやうになつたのもこの年であつた。云々（以下略）

――（上田敏氏とは、その以前から知つてゐたと見るべきで、それは「春」自身が說明してゐる。）

明治三十年――二十六歲

處女詩集「若菜集」を春陽堂から出した。この最初の詩集は仙臺名掛町の三浦屋といふ下宿で書いた。滿一年にして東北學院を辭し、この年のうちに東京へ歸つた。十二月、雜誌「文學界」廢刊。この年、獨步、花袋、國男氏等の詩集「抒情詩」出版。

この「年譜」が間接の説明をしてゐるやうに、「文學界」同人が、あの雜誌によつて表れて、それから藝術に對する愛好憧憬をもつ若い魂の間につながる絲が、次第に錯綜して廣がり複雜になつて行つた跡を感じられる。この間の先後、又は因緣については、その方面に興味をもつ專門の考證家に讓る可しで、ここにはそれよりも、何處となしに生れて來る感應——新文學、西洋文學に依つて新しく目覺めた新しい情感が互ひに感應しあつて、それとなしに絲がつながつて行くのを興味の深い流れと思はざるを得ないのである。

この流れは更らに生育して蒲原有明氏薄田泣菫氏の出現、新詩社の詩歌運動、自然主義運動、白樺一派の出現と、その源の細流とは、直接に因緣の無い各方からの目覺めが起り、日本の文學は、たゞ世界の國々の中で「新文學も在る」境からすつかり拔き出したのであつた。

「文學界」の發生は、勿論、後年のすべてを生んだ力ではない。極めて一部分の青年の心が目覺めたのであつたにすぎない。それが早い年代であつた故に、鷗外先生の事業、坪内先生のそれ、二葉亭主人の飜譯などを共に源流の一つとなつて流れが始つたので、その當時まだ地下に眠つてゐた幾多の違つた要素が、やがて次ぎ次ぎに目を覺して來る新潮流に、直接間接の感應を持つたのだと考へられる。

新しい戀愛

本間久雄氏は「明治文學史」下卷の中に「精神的戀愛の誕生」の項でかう言つてゐられる。(「文學界と西洋浪漫主義」の「北村透谷」の一節)

「今一つ更に文化史的立場から見る時、この運動は正しき意味に於ける戀愛感情を創造し、同時に女性尊重の傾向を喚起した云々」

これは明かに「文學界」の人々の情熱から生じた現れであつた。ところで、私はこの點に就いて特に日本女性の覺醒といふ側を切實に感じる。新しい青年の情操の對象となつた女性が、どのやうに目覺め始めてゐたか、それを考へると初めてその對象としての青年の感動の性質がはつきりして來る。その點に就いては極めて朧氣だが(「春」は全體に暗示するといふ書き方で表現してあるが、餘りそれは徹してゐない)この「文學界」同人の中の二三、(青木、管、岸本)の戀愛に就いて、青年の側からの消息が「春」には書かれてゐる。それに幾分當時を想像し得る私どもの聯想を補足して考へると、その空氣を感じ得られるし、それに從つてその女主人公たち女性の心持を感じる事も出來る。

一口に言ふと、この基督教學校で育てられた若い女性は、「新しい」學問と共に、廣い意味での人を愛するといふ事を敎へられた。それを素直に受入れた人達であつた。も一つそれに加へて萬人平等の感情をもいつとなしに植ゑつけられてゐた。基督教の信仰雰圍氣の中で、神の前に人間は一切平等であるといふ心持が、從來の感情であつた身分の高下を考へる心を破壞して、感動を新しくしたといふことを考へなければならな

い。女の自主性の覺醒と言はれるものの內容になるのかも知れないが、その女性たちは、純眞に、充ちたそして感情の美しい青年に對して、極めて感動し易かつと思はれる。私はこの女性たちを贊歎して思ひ返すのだが、この人たちにはまだうるさい理屈からの觀念が無く、おのづから「愛」が目覺めて來てゐた事であつた。生地は日本傳統の母性の盛んな婦人であり、その中から因襲を破つた人間に對する愛情が育つて來てゐたので、當時の青年相互の感應がどんなに純眞であつたかが考へられる。これは個々の個人間の問題であつて、社會に一つの風として現れ始めたのは、十數年後の明治三十年代にはいつてからだつたのであるが、この心の動きは——更らに前からの源流となるものはあつたらうが——實に尊敬すべきものであつた。

先づ、北村透谷氏はその愛情に依つて家庭をつくつた。「文學に理解を持つ」などといふやうな淺薄な事ではない。表面はその「事業」に同情を寄せ、愛をもつてゐた。それが理解をもつ、などと言ふやうな簡單な言ひ方ですまされてゐたのだあつたが、もつと眞實の深さ、愛の深さが表れてゐた。それに日本婦人の複雜で愼ましい母性が加つてゐた。島崎さんの場合などは、島崎さん自身の盲動の方が激しく、それの動機となるものをぼかしてあるのではつきりしないが、「勝子」といふ對象の靜かな激情が、それでも想像する事が出來る。戸川氏の問題に就いては、これはまるで性質が違ふ。

「勝子」に對する戀愛を感じ始めてからの島崎さんの動搖を讀んでゆくと、一つの衝動の重點が生じ、それに感じて若い心が複雜な動きを始めた跡が考へられる。その衝動は島崎さんにとつては極度に强いものであつたと見えるけれど、實は案外贏弱なものであつた。しかしこの衝動ははつきりした想念の上よりも底に潛む島崎さんに暴動を起させ、身體の虐待と一緒に、島崎さんを冥想の中に引きこんで行つた。その後で仙臺行きとなり、假りに生活の安全が來ると、初めて島崎さんの制作が、本格に流れ始まつた姿になる。即ち心の流れもここから道がついて來たと見られる。「若菜集」が生れたのは、先づ第一のその結果が現れたのである。「一葉舟」が生れ、「夏草」が生れ、更らに成長して「落梅集」が生れたのを考へると、それ以前の蓄積がやうやく言葉になつて流れ出し、その力によつて島崎さん自身生育を積んで行かれた跡をたどられるやうに思ふ。

それにしては、「若菜集」の表現が餘りなだらかな型を持ちすぎてゐたやうだ。一體島崎さんはフォマリストだ。何につけても形を整へないと承知の出來ない性質を持つてゐられたらしい。その初めの現れが「若菜集」にも見える。これを私は北村透谷氏の作品と比べて考へる時に一層明かになると思つてゐる。この二人の激烈な情熱を並べて考へると、透谷氏は表現の形が整はないほどそれを破つて心を盛らうとしたのに比べて、島崎さんは巧みに形を整へられた。「若菜集」の詩調は、當時の「新體詩」界の他の作品に比べると、心が銳く流れてゐるし、自在であるし、詩界全體はこれによつて、その表現を進める事が出來たのは勿論であるが、私の獨りだけで思ふのは、もし島崎さんが透谷氏の情熱による表現を繼承されたらば、そしてあのブロックンな表現からぬけ出されたならば、「若菜集」は一層違つた——或は一層よい——影響を、詩界に與へ

られたのではないかと思はれる。そしてこの點に藤村――透谷の人としての差が見えて來るのである。後の完成が無かつたので、あすこでぷつつり緒が切れたやうになつてゐるが、透谷氏の藝術にはいろいろいい豫約が含まれてゐたやうに思はれる。

芭蕉

ぼつぼつ書いて行くと、藤村覺書はもつと先きまで行きたい氣がするが、ここでひとまづ止めて、も一つの題目に移る事にしよう。ところで、も一つ考へさせられるのは、島崎さんが芭蕉に深く親まれた事であつた。西洋文學を食物としてゐた人々が、一面に日本の古典から離れずにゐられたのは何より注目すべき事であつた。それが芭蕉に行つた事も成程と思はれる。一つにはすぐ前まで日本の古典が嚴として臨んでゐた力の影響も有るかと思ふが、それらの古典が西洋の反影に應じて島崎さんたちの心に生き返つた點を考へると、有難い事だつたと思はせられる。島崎さんの場合だけを考へると、それは詩人芭蕉であつて、芭蕉の發句ではなく芭蕉の詩であつたやうだ。この點は日本派俳句の隆盛と共に却つて地下水となり沈んで、はるかな後になつてまた認識されるやうになつたかと思はれる。

處で、島崎さんは芭蕉には行かれたが、和歌には趨かず、萬葉集に行かれなかつたのは、考へて見ていい事である。藤村傳記の記者だけではなく、當時の「心」を考へる上の一つの問題と思はれる。

島崎さんの初期に萬葉集の影がさしてゐなかつたのを、私はやはり當時の文化の度と相照らして考へて見るべき事だと思つてゐる。これが私の考へて見たい事である。即ち、よく礎ぎ研かれた面の手ざはりから、更ら素地のままの魂へとは進まずにゐたのだらうか。萬葉集が古事記などと一緒に、最古の典籍として、石窟の中にある感じのままで置かれてゐたのではなかつたか。後年和歌革新の當初の頃を思ひ合せて見ても、因襲の感情を破るそれから西洋文學の影響、新しく「詩としての歌」しかし詠み口としてはその前までの和歌をそのまま受けついだ姿によつてゐた。その點からもこれが思ひ合される。

この點で正岡子規氏が萬葉復活を提唱されたのは、日本の本質に觸れようとされたのであつたが、作品の方はかなり形だけに止つてゐた觀がある。私の思ひ浮べ得る限りで、この和歌革新初期の中で、萬葉集の魂を帶びてゐたのは却つて高村光太郎君の作品の中にあつたやうだ。

各人の趣味性にもよる事であらうが、島崎さんが芭蕉に趨いて萬葉まで到達されなかつたのは、全く當時の「美」を感じる心の度による事であつたらう。

植村正久・內村鑑三・巖本善治

植村正久文集

昭和十七年八月七日、或る用事で千葉の町に出て行つた時、久々で町の書店にはいつて見ると、岩波文庫が澤山並べて立ててあつた。その中に『植村正久文集』が二十册ばかり並んでゐるのを見付け、新しく出たのかと思ひ、久々で先生の顏をまざまざ思ひ浮べながら、一册買つて懷に入れて來た。

歸りの汽車の中で、奥付を見ると、昭和十四年八月の刊行であつた。まる三年前に出た本であつた。先生の文集がかういふ普及版になつてゐるのは、幸ひな事と喜んだが、しかし現在では世間のごく一部分が、先生からの心の糧を受ける時代に進み入つて來たのだと思はれた。それに先生が說教者であつた爲め、その生前、最も力のあつた時代でも、高名有力であつたのに比べて世間との接觸が、一部信徒の範圍から外には餘り浸潤してゐなかつた事も思はれる。明治の三十年代の終り頃に、私などは先生に接するやうになつたのだが、その頃は基督教々會がだいぶ世間からも親まれ、その教へがずつと一般に浸潤して行つた時代であつたらしい。しかしそれでも尙ほ、世間の一部にこもつた信仰團體として見える感があるのだつた。「日本」の中に決してすつかり溶けこみ切つてはゐなかつた。先生があれ程熾な力をもつて說き、信者の信服を摑んでゐられたとしても尙ほ先生は「基督教界の重鎭」であつたのだつた。私はその日千葉の書店で、先生の普及版の文集が、そんなに多く並んで殘つてゐるのを見て、先生の絕叫と世間との間隔が、ますます距離を遠くして行つてゐるのを切實に感じたのである。その上、近來では基督教の教師の迫力が、低調になつてしまつてもゐる。

この先生の文集を、私は懷しみの深い追想をもつて讀んだ。特にこの中に「黑谷の上人」が收錄してあつたのが、これは私だけの他には通用しない追想だが、ひどく懷しかつた。この一篇は、明治四十四年頃先生主宰の福音新報社から出された雜誌「宗教及び文藝」の、たしかその創刊號から二號位に分けて載せられたもので、私は初めて先生の自ら筆をとつて書かれた感想を讀むといふ心持で讀んだ覺えのある一篇である。

さてさういふ回想は二の次ぎとして、先生は一徹に「基督の愛」と「父と子と精靈」を說かれた人で、正統派の信仰を固持してゐられた。從つて狹く、且つ先生の性情に倚るものか抒情詩人の感情の傾向が有る。この文集にもそれが殘つてゐる。博學で達識だと――門下から仰ぎ見られてゐた先生のものの考へ方が如何にも狹さのあつた點をこれらの遺された文集によつても明かに感じられる。

ところで、今、私にはこの先生の抒情詩人風の素質が、私に必要な説明の鍵のやうに思はれるのである。さて、ずつと以前、明治の終りの頃、私が先生からいろいろのお話を聞いてゐた時分に、先生のお話のはしばしに、自分達の先輩の事がちらちら聞かされるのを、どうも變だと思つてゐた。國木田さんは勿論の事、先生が島崎さんも柳田さんも知つてゐられ——この知つてゐられるといふ事は、その先輩が、多少何かの因緣をもつて、先生の教會に出入された痕跡であつた。そしてその先輩は、その時分全く「教會」とは緣の無い人達であつたので、それが私の心には因緣の糸の結べない疑問となつたのであつた。もとより教會は公開の場所で、その時既に五十代だつた先生、若い日から一生を傳道に捧げて來られた先生であるのだから、その間にいろいろの方面の人との交渉が有り、思ひがけない人がその教會に出入したのに不思議はない筈である。しかし私が先生からの話を聞いた當時その先輩たちが、全く基督教の教會と緣のない人に思はれてゐたので、先生の話を聞いてゐて變に感じたのであらう。

これは別の問題だが、私には教會基督教の先達が焦慮の念を持つて、信仰の浸潤が徹して行かず、これらの先進の青年が、その門に足を踏み入れては去つた跡に、寛容ではあるが批難の心を帶びてゐたのは、少し的はづれではなかつたかと思はれる。信仰が輕薄であつたと斷じるのには、その側からの僻見があつたので、もつと言ふと日本の血液をその側の人自身が明かに自覺し得ずにゐた處に原因があつたのではなからうか。門に入らうとした人々が教に感動する良心は明かであつても、そこに民族の血を忘れた渡來の感情と相和し純一となり得ないものゝ有る點との矛盾、傳統に戻る結果が有つたのではないかと思ふ。時がたち、靜かに回想すると、認識の不足や、判斷の偏りは却つて批難した側の方にあつたのではないかと思はれる。

たゞし、これはこの時代の日本の覺醒が反映して、從來の基督教教會風の感情がもう甘くなつてゐたからでもあらう。（教會側からの見では、それらをすべて墮落と見た風もあつた。が、これらの見界は大體に宗教團體通有の獨善の嫌ひさへ有つたと見られる。）明治の末期から日本の文化は激流の態になつてゐたが、二十年前に遡つて見ると、この基督教の講壇と教會とは實に淸新な感激の泉だつたのであつた。この文集の中に收められてゐる明治二十年代から三十年代の初めに書かれたいろいろのものを見ても、先生がどれほど世間から、先んじてゐられたかが解る。これらが直接間接に、或る人々の文學心を啓發した事は當然考へ得られる事である。

それに特に加へて考へなければならない事は、基督教の講壇から說かれる「神の愛」が教へであると共に、多分の文學性を帶びた表現のあつた事である。從つてその中から特別英米の詩人の作品が、間接に紹介される場合も非常に多かつた。これは說教者のペダントリーではなく、感動——それが藝術作品に對する正當な感動であつたか否かは別として——をもつて傳へられた事は、文學に敏感な青年達をして、直接にその作品に親しませるきつかけともなつたらしい。更らに聖書そのものゝ文學性、その飜譯された日本文——一種の感じの鮮かな文章から受ける情趣と、心に響くその內容の力が、眠つてゐた日本の文學心に新鮮な目ざめを

なさしめた事を考へなければなるまい。

更らにも一つ、外國語の習得に對する青年の情熱も日本を目覺めさせた力の一つであつた。これは新しい世界を知らんと欲する情熱であつたが、知る事がいよいよ深くなるに從つてその水口から、どれほどのものが流れこんで來たか量り難い感がする程である。三十年代から四十年代の所謂翻譯全盛期は、その噴出の一つの現象であらう。——この外國語、特にイギリス語が流れこんで來たのに就いては、基督敎の敎に件はれての事で、周知の事實である。後年はそれが飛んでもない政治上の惡辣な手段の一つとしても使はれたといふ話を聞くが、とにかくアメリカ宣敎師は、昔から何か高等な國語の傳授でもする顏をして「英語」を敎へてゐた。その敎へを受けた日本の青年は、それをいゝ食物として攝取した。これに依つて當時の青年が歐米の文學を味ひとつた跡は、いろいろの批判が加へられはするだらうが、盲信ではなく、慾望をもつた食物の攝取であつた事を、明治以後の文學界の生育展開が說明してゐる。

詩人としての植村先生

單に先生の讀書からの廣い知識の影響又はその良識に依る啓發からだけではなく、先生の敎壇に於ける說敎には、いかにも詩人らしい情熱がこもつてゐた。當時の記憶によると或る時初めて海老名彈正氏の說敎を聞いた晩に、私は變な風に思ひこんでしまつた事がある。海老名氏は自分達の先生植村正久氏と並び稱されてゐた名牧師で、堂々とした威容をもち、朗々たる音聲で滔々と說かれる申し分のない雄辯であつた。それに比べると我々の先生は、吶々として、ぶつきら棒で、しかも何とでも取組みあひをしかねないやうな——實は初めて市ケ谷敎會（先生は當時一番町と市ケ谷と二つ敎會を牧してゐられた。）に出席した日に、そこにずし〳〵とはいつて來た洋服の人を、どこかの請負師の親方かと思つて見てゐたらば、それが牧師さんで、そしてそれが植村先生だと敎へられて奇異の感を抱いたほどであつた——先生は實は極めて素朴な人なのだが、一寸見には恐しく粗野な感じのする人であつた。處で、だん〳〵とその說敎を聞き馴れ、その言葉を味ひ馴れるに從つて、だんだん先生の感動と眞心とに心がうたれて、しまひには敎壇に立たれると、こちらの心持がすぐそれに吸ひつけられたやうになり、交り氣なしの、直接な力でその言葉が傳つて來る。さういふ先生の說敎に聞き入つてゐた私どもだつた爲だらうが、海老名氏の朗々と美しい聲、名口調で、悠々として說かれる雄辯に接した時に、私は何だか作り言を聞くやうで、嫌な氣がしてその途中からこつそり場をはづして來てしまつた。まだ年のいかない頃なので、見さかひの無い無禮をしたと、後年それを思ひ出すと後悔するのだつたが、私どもの先生にはさういふ朴吶から來る吸引力が強かつた。

一體先生は、日本人の基督敎牧師として、珍しいほど日本人らしい心で立派な信仰を持ちつづけられた說敎者であつたし、實によく勉强された卓拔な神學者でもあつたらうが、しかし一面に詩を書かざる詩人でも

あつた。それは先生の殘された文章を見てゐると、一層はつきりとそれが感じられる。先生の文章は、嘗つての說教と同樣に管朴直截であるし、その中を貫いてゐる情熱が、いつまでも消え去らずに人に傳つて來る。しかし、今ではもうそれを耳に聞くよすがも無いが、講壇に立つて道を說かれる先生の言々句々は、これらの文章よりも一層力が强く感動の火がこもつてゐた。ずつと近くの年代、明治の終りから大正の頃になつても、先生は他の說教者や敎徒に比べて少しも甘くなかつた。それに接したものは、遺された文章を見て先生の殘滓を味ふ氣がする程である。かうまで感じられる所以は、その身に帶びてゐられた渾然たる詩情が、文章に殘つてゐないからであらう。

つい私は先生に對する追想に耽りすぎたが、この詩人の要素が、若くして目覺めようとしながら惱み求めてゐた時代の「文學」に、どの點からかの影響が無かつた筈はない。所謂系統をたどるべきすべは困難であらうが、何れその時代の秀才がその心と共に步むべき道を求めて、當時輸入されつゝある新しい聲と言葉を聞かうとしたのは不思議のない話である。先生が、後になつて私どもの文學の先輩の誰彼についての思ひ出を話されるのは、その間の消息を話されたのであらう。この復雜な同情を持つてゐながら、根が一徹に「信仰」の一路を步かれた先生の事だから、その人々への判斷が、信仰に對する去就にばかり干はつてゐるのは仕方がないが、それは先生の側だけからの見方と思つて差支へはあるまい。受けた方の人々にとつてはそこ〳〵に啓發の種子が播かれてゐたのだと考へていゝと私は思つてゐる。

內村鑑三氏

內村氏にも、植村先生と相通じたものが多量に有ると思はれる。私は內村氏に對しては、全く緣がなくただ學生時分內村氏に親炙してゐた故小山內薰君に、氏の話を聞いて感じながら想像してゐたのと、——それは多分「柏木パンフレット」を出してゐられた頃の事であつたらうかと思ふ。明治三十八九年の頃か？今でもあのパンフレットの一部が私の書架に殘つてゐるのは小山內君の勸めに依つたのかとも思はれる——ずつと後年に、神田の靑年會館で內村氏が非常な情熱をもつて基督再來を說かれた時、一回その講演の聽衆の中に交つてゐながら、遠く謦欬に接しただけであるが、氏の著されたいろいろの書からは、隨分敎を受けた。

さういふ尊敬をもつてゐたので、內村氏に親炙してゐた人々もかなり多く知つてゐた。さういふ人々は、勿論その先生から心を拓かれてゐた人たちであつたに違ひない。しかし、この先生方からは必ず叱られるに違ひない事だが、私の今考へたいと思つてゐるのは、先生方が精神上の飢渴と稱へられた「救ひ」の方面ではなく、そこから派生して、日本の文學にそれとなく大きい影響のあつた流れの方面である。巖本善治氏に比べると、この先生方は直接には文學界に何かの結果を生むやうな事は——卽ち、「女學雜誌」又は「文學界」のやうな——なされてゐず、信仰上の交涉影響だけに限られてゐたやうに見えるのだが、私は先生方の

門を出入し、後に小山内君の所謂「背教者」となつた青年文學者の間に、播かれた種子は何々と數へきれない程のものの有る事を考へさせられるのである。

それをかうだと言ふ事も困難に思はれるが、人間（人生）を考へる考へ方、天然（自然）に向つて開かれた眼、その青年各自の生活を新しくした力の上に、實に大きい影が及ぼされたと言つても差支へはあるまい。これは何よりもこの基督教の先達の諸先生の詩人風の要素がその力を鮮かに働かせたのに依ると思はれる。植村先生の風とはその情熱の現れ方が別であつて、内村さんには、自然科學をおさめられた素地が有るので、その風が全體に現れてゐた。植村先生よりも散文家らしく見える處である。近頃になつて、私は昭和十三年に刊行された「明治の文學」といふ雜誌の增刊かと見える本の中で、新居格氏の「岡倉天心と内村鑑三」の一篇を讀んで、思ひがけない懷しい話を聞いた感じがしたのだが、新居氏が植村先生に洗禮を受けられたと知つてのも、何か額を知らずにゐた同行であつた氣がしたのだつた。さういふ私情は別として新居氏が覺えてゐられる内村先生の輪廓、著書などに就いての覺書が、「その頃」をまざまざ回想する機緣を作つて下さつたのを感謝した。

その中の一節をこゝに引用する事を許していたゞく。私の回想に同感がそこにも有ると思ふからである。

「わたしは彼の文章が好きである。これは又聞きだから正確ではないが、内村さんは英文を綴ることは上手だつたが、日本の文章には馴れなかつたので、落合直文氏に教へを乞ふて書き出したが、そのうちに、内村調ともいふべきスタイルが出來たといふのである。眞僞の程は知らないが、私は内村調の平明で歐派的清新さのある文章がすきであつた。

内村さんの詩を試みに引用してみよう。

春は來りつゝある。
雪は降りつゝある。
然し春は來りつゝある。
さむさは强くある。
然し春は來りつゝある。
春は來りつゝある。
春は來りつゝある。
雪の降るにも拘らず
寒さの强きにも拘らず
春は來りつゝある。

慰めよ、苦しめる友よ、
汝の患難多きにも拘らず
汝の苦痛强きにも拘らず
春は汝にもまた來りつゝある。

右の詩に詩のエスプリがあるとは思はぬ。しかし、平明にして率直、感じがいい。

「信仰日記」の一節を引かう。

「九月十六日（月）快晴、いよいよ秋が來た。天下の秋が來た。輕井澤や日光に在る避暑客にのみ來る秋ではない。神の送り給ひし秋であつて天下萬衆何人にも來る秋である。故に特に快いのである。今より大に讀むべしである。大に書くべしである。又止むを得ざる場合に於て高壇に上りて語るも辭さない。馬肥え我心も亦肥ゆ、碧空澄み渡りて我心の躍るを覺ゆ」

わたしの所謂內村調がどこかに感ぜられるであらうと思ふ。

（中略）

わたしは十數年以前から背敎者となつてゐる。完全なる無神論者であり、無信仰徒ではあるが、內村全集と植村全集とは熟讀したいと思つてゐる。特に最近になつてさうである。內村鑑三を語つて脇道にそれた感があるが、內村さんは妙に今尙われわれの頭の中に强く投影してゐるやうな氣がする。」（以下略）

日本の文學界に この引用した一節に近い心をもつ「背敎者」がどれほど廣く且つ多いかを私は想像する。（もとより私自身もその一人に加へらるべきであるが）そしてそれが、どれほどの影響を、潜在力をもつた影響を明治末期以降の日本文學界に與へたかを想像する。その見えざる種子は實に根强く發芽し生長した事を考へねばならないのである。殊にこの種子が、次ぎの時期の飜譯全盛のひところに、歐洲文學を理解し消化するのに力となつた點に、恐らくその實際上の大きい働きをしたであらうと思はれるのである。

巖本善治氏

時代の順序としてに、植村、巖本、內村となり、植村先生と巖本氏とは殆ど初期に於いて並び、內村さんがやや後れて働かれたと思はれる。內村先生の盛んに働かれた時期に、植村先生はいよいよ圓熟の境に居り、しかも聊かもその情熱が老いずに居られたので、先生の力は、この時期に涉つても、內村先生と並び働かれたと、さう私は見てゐる。

この兩先生と巖本善治氏は、全く色彩素質が違つてゐるやうに感じられる。私は學生の時分に、「女學雜誌」のごく末期の數ケ月を、學校に通ふ道の書店で買つて讀んだ。よくある基督教信者がやつてゐる書店であつたらしく、内村先生の本もそこで買つて讀んだし、植村先生の二つか三つしか出てゐなかつた說敎集もそこで見つけて買つた覺えがある。そんな事は、つまらぬ餘談だが、その女學雜誌――明治十八年七月創刊、三十四年三月、五百十四號で廢刊。――で巖本氏の「隨感」の文章が如何にも冴えて美しく思はれてゐた。今手元から、その雜誌は散逸してしまつてゐるが、二三の人の思出ばなし、それと一緒に採錄してある一二篇を讀んでゐると、當時の「ひびき」の記憶が心に生き返つて來る。喨々として鳴る笛の感じである。それが若い心に響き傳つた感動は、思ひ出されもするし、さぞかしと當時の影響を想像する事も出來る。

それにしても、藤村氏の「春」にはこの人に對しての印象が殆ど書かれてゐないのが腑に落ちない。その爲めに、當時もつとも直接であつた青年の一人の藤村氏からは、何にも聞く事が出來ないのが殘念でもある。藤村氏が「女學雜誌」にものを書かれたのは、その二九八號からで、明治二十五年一月のが初めとなつてゐる。（神崎淸氏、「島崎藤村と女學雜誌年表」による。）それから一年間に三十四篇公けにされてゐる。その後は、巖本氏の明治女學校（即ち女學雜誌の母體と見てよいもの）にも敎師として席を置いた人なので、たとへ星野天知氏の中介があつたのだとしても、巖本氏と藤村氏との間に相應の懇親があつた筈である。明治女學校の失火前後に、巖本氏が藤村氏に養子の問題を持ち出した事が書いてあるのを見ても、或は小說を書いて叱られた話も書かれてゐる點からしても、かなり親しい先輩と後輩との干係があつたのだらうが、「春」は、巖本氏を少しも說明してゐないし、描き出してもゐない。それほど、若い時代の藤村氏等――一部新銳の青年文學者たちと巖本氏とは、交涉が薄かつたのであらうか。私はそれよりも、「春」といふ作品が、極めて記述が稀薄で、當時生れ出ようとする若い心に集中してばかり書きすぎてあるといふのが、その理由だと思はれる。も一つは島崎氏がこれを書かれた當時、作中の人物が殆と現存してゐたので、それへの遠慮からやや座談の風で、各人の心理を書いて行かれた故もあらう。さうすると、「春」の書かれた頃には巖本氏は尙ほ深刻な批難をその交涉のある周圍から受けてゐた時分であつたから、尙更らそれが書きにくいといふ事になつたのであらう。さういふ不便にもかゝはらず、島崎氏は人生の春と、藝苑の春とを結びつけた「生活展開」の興味が、あの一篇を書く心になられたとしたら巖本氏が少しく閑却されすぎて居ると思はれる。

故人になられた先輩の作品に對して、こんな穿ち入つた批判めいた事を言つたのは、みだりに「春」の批評をしたい爲めではなかつたのである。即ち、この文學の春の誕生が行はれようとしてゐた青年たちの背後に、やはり一人の先輩がかくされてゐながら、その風貌が埋れてゐるのを考へられる――いくらかの事情を知つてゐる者で、又更らによく事情を知つてゐる人の書いた回想を讀んだ者には、「春」が觸れまいとしてゐる先輩がやはり考へられて來る處に、因緣の糸を見つけるからである。――

巖本氏の「隨感」を、三十年代になつた頃にも私たち青年は、名文だと感じたのだつたが、その感銘は、

ちやうども少し以前——つまり私たちより一時代前の青年が、例へば琴の音を聞いて感傷の情を搖がし、そこから何か特に美しいもののやうな幻想を描いた文章を書く、又それを讀む人の心が直ちに同感する——と言つた感應の「度」と相似たものが有つたと思はれる。それでなるほどそんな風だつたかと思つて巖本氏の印象を聞いたのは、當時明治女學校の生徒だつた相馬黑光女史の「默移」の一節である。その「巖本校長の人物」をここに採錄する。

私の印象に基いて申しますと、先生は丈高く、血色美しく、うるほひのある大きな鮮かな眼が何かを深く凝視するやうな光を帶びて、いつも靜かに瞬かれてゐました。その見事な鬚髯、やゝ厚く色あざやかな唇、凡そ男性的なあらゆる美を備へた姿を壇上に運んで、敎を聽く者の眼に、その強い眼を絕えず與へながら語り出される時、その聲がまた實に沈痛なひびきを帶びてゐました。私が在學の頃先生はさういふ態度を以てスペンサーの敎育學を講じ、そのほか講話の時間があつて、これは先づ普通の學校でなく校長先生のお修身といふところで、大抵は無味乾燥にきかれてしまふものが、先生の場合は大變な違ひで、みなその時間の來るのを待ち、お話がすんで講堂を出る時は、誰も誰も感激に眼をかゞやかせ、人生の喜びを深く感じ或る時はまた先生の非凡な才氣に全く敬服して、この學校に來たことの幸福を今更のやうに強く感じて、うつつの如く足を運ぶといふ風でした。

フェリス女學校から轉校してまゐりまして、はじめてこの先生の講話の時間に出ました時、先生の話に私はたしかに驚異を感じました。フェリスでは何か疑問を抱いてをつても、それを口に出して聞けば「聖靈をけがすものだ」と他から壓迫される位であつたものが、こゝでは校長先生の講話といふのに、女義太夫の「素行」の名が出る。「圓朝」「小さん」といふやうな人々のことが語られる、藝術至上の精神から、先生が捉へて來て示されるものは實にかくの如く自由で味ひ深く、聽いてゐるうちに自分の視野がぐんぐんひろがり、あらゆるものに許されてゐる向上の精神が、ここに、そこにとさし示されるやうに感じられて、耀き深い人生の自分も一人であるといふ氣がしたのでした。（以下略）

これは古い日の記憶を、改めて判斷する事なしに、そのまゝ無邪氣に書いたもので、少女時代に於ける黑光女史の憧憬が、さう視、さう感じだのだと思つて讀んだ巖本氏の印象記であつたが、また古く明治女學校寄宿舍の娘たちが抱いてゐた通念でもあつたらうと思はれた。しかし、この巖本氏は同じ基督敎先達の中で、植村先生や內村先生とは全く質を異にした人であつた事が解る。私は巖本氏は傳道界に於ける事業家肌合ひの人だつたと判斷してゐる。宗敎家でゐるよりも事業家。さう思つてゐるのだが、從つて「女學雜誌」が、

後の「福音新報」と全く根抵の性質を異にしてゐた空氣を漂せてゐた雜誌だつた事が思ひ合されて來る。

この「女學雜誌」は、新しい文學の道を開かうとする青年をそこに集めた。その人々に「自由」に、即ち宗教に隷屬した窮屈な文學よりもずつと自由に、その趣くまゝの作品を公けにせしめた。それでも紙面も限られてゐたらうが、文學の自由と「敎へ」の窮屈との矛盾がだんだん明かになつて來て、「文學界」をそこから誕生させた。機緣はかういふ風に移つて行つたのだと言ふ事であるが、こゝに生れた文學は實は初めから巖本精神の支配の中から發生したものではなく、巖本氏の「事業」がそれを傘下に集め、各自の育成をそこでなさしめたのだと思つていいやうである。それだから「春」の人々は、巖本氏とその表むきの交渉は密接でも、心の鼓動の上にはあのやうに疎遠だつたのかも知れない。藤村氏が巖本氏を描かなかつたのは、この理由からであるのかとも思はれる。

新しい移入の水口

基督敎界に對しての私の了解は狹い。以上三人の先達に關心を持ち、その中の植村先生に依つて直接に敎へられたといふに過ぎないのであるが、多少その世界に親しんだ處から、明治の末期頃からの吾々の生活に對してその影響は意外なほど大きかつた事を經驗してゐる。日本に眞からヨーロッパの風が浸潤したのはまづこの基督敎の盛んになつた處からであると思はれる。明治の御代に、日本の新文學がともかく確立されたのも、この社會の推移の中から生れ出たものである。青年がまづその新しい思考と新鮮な生活とに鋭しく感應し、その中に飛びこんで從來の生活に對する改造を行つたのである。

第一に氣のつく事は、この傳道者の中に社會事業家が多く輩出した事である。この人々の手で所謂精神的の各種の事業が計畫され獻身的にそれを築き上げられてゐる。學校、慈善、矯風、救濟等々。これは勿論、殆どと言つていゝ程その人たちの新案ではなかつた。大體歐米にそのお手本があつて、それの移植であつたし、又傳道會社からの指令もあつたらう。處でこれ等の社會事業は、ともかく日本に根をおろした。一面には明治維新の後、國力の進長と共に、世間を整理する必要からも、社會事業がおのづからの要求が有つたのであらう。しかしそれの方法に就いて、この新しい移入はうつてつけだとすぐ受け入られたか否かは別であるが、少くとも日本の社會事情に次第にとその要求が生じてゐたものを促進させたと見ていゝやうである。その上に海の彼方で、國情こそ違へ旣に試驗ずみになつてゐる方式が移されたので、それでこの國にもこの種々の文化的の新事業は根をおろしたのである。その結果として世相が如何にも變つた風に見え、明るく活潑になつて來た。

從つて人の情趣、感情の動きも新しくなつた。心で考へる考へ方も廣々として來た。束縛されてゐた古い觀念も解きほぐされた。これが西歐の藝術への感動に更らに現實の力を添へた事は言ふまでもなく大きかつ

たに違ひない。明治の後半期に「藝術」の出發が明かになつたのに、これらの移入が目立たぬ底の流れとなつたのを考へざるを得ない。

明治二十年代から以後の、「清新な文學」と稱された作品が、その背後に西歐の文學からの影響を含んでゐないものは無かつたと、單に言ひ切つても、ひどい間違ひは無ささうである。それ故にこれらの新文學の作品が或る源流に支配されてゐる末流のものと見られたとして、それは否めないかも知れない。しかしこれは變轉の間の姿であつた。何は置いても明治の時代は日本の文化が脱皮する一階程の時期であつた。その時に銳敏に歐米の文化を感得し移植した事は、その現れ方を見るとこれは少年期の模倣に極めて似たものがある。そのやゝ無差別に見えた攝取は、貪食であつたし、どれほど食べても飽く事を知らない食慾でもあつた。そして、その底からおのづからこの民族の本然が肥え太つた活力をもつて目を覺して來たと見てい丶と思はれる。しかもその移入したものを賢く處理して、いつの間にか身につけてしまつてゐる日本民族の本能を私達は正しく見なければならないと思ふのである。

基督教の信仰が、或はその教會即ちその團體の雰圍氣や、新しい行事習慣が、新文學を生むのに何等かの影響をした事は、思つたよりも大きな力をもつてゐたと私は信じてゐる。明治三十年前後から、それは他にも動機となる社會事情があつたらうが、智識のある、そして情感の銳く若々しい青年が、所謂「宗敎的の惱み」を惱む心が目に立つて眞劍になり深くなつたのを特別に思ひ起したい。「人生とは何ぞや」といふやうな事が、その青年層の各自の胸におのづからの避け難い問題となり、同時にその人々の合ひ言葉のやうにもなつてゐた。それがどうも藤村氏の「春」の青年達が惱んだ、あの惱みがだんだんに發育して來たものであるやうに、私には思はれる。――これは「春」の青年たちばかりの惱みではなく、前代の青年の或る層が感じた一斷面が「春」であつたと見るべきで、その前代から傳はつて來た流れが、もつと廣がつて三十年代には水流が激しくなつたのだと思はれる。それでこの時代の青年の大勢は、一應基督教の教會と何等かの緣を結んでゐる。

そして綱島梁川氏や河上肇氏の「見神の實驗」の現れたのも、この三十年前後の時で、その眞率な感激、神秘性を帶びた冥想が、世間に公けにされたのは、一面に時代の感情の噴火口であつたとも見られるのである。

處で、これほど基督教の雰圍氣、感情、信仰が強い作用をしてゐながら、文學には所謂基督教文學と稱するものが殆ど生れて來なかつたのを、私は實に面白い事と思つてゐる。植村先生などは後年までそれに對して一種の輕蔑したやうな憤懣の心をもつてゐられたのではなかつたかと思ふ。私などにさへ幾度もさういふ批評を聞かされた覺えがあるし、一時その傘下の青年を集めて、宗教文學を起さうと計畫された事さへあつた。

宗教家のさういふ焦慮は、植村先生に限られた事ではなかつたらう。他の先達に行つても同じ感懷を聞か

された事であらう。——人に依つて考へ方は違つてゐたとしても。——しかし、文學の流れは、宗教に隷屬せずしてその道を新しく進んで行つた。宗教家の先達の人々が慨嘆されたやうに、信仰が輕薄であつたのだらうか。それは全くその先達の獨斷としか思はれない。文學が文學本來の流れを進み、その中に宗教性——特に基督教的の精神を帶びたものが生れるにしては、明治以後の基督教は決して日本民族の心を占め盡し、生活に浸潤してはゐなかつた。まだ狹い一部の人々の信仰であり、そこから氾濫したいろいろの事業、行事は、一方には日本風に馴致され、一方には異國情趣としての興味として受入れてゐたのである。その先達が期待したやうな文學の生れて來なかつたのは當然の事であつた。

同時に、德川末期の低調賤劣の極に墮ちてゐた文學が、明治維新と共に、この國へ流れこんで來た西歐の文化を攝取すると、たちまちに新しい流れが生れて、半世紀もたゝないうちに生々の力を帶びて生育し始めたのを思ふと、私は日本民族の生活力を自ら恃まざるを得ないのである。

明治三十年代の青年小說家

一

「明治三十年代の青年小說家」、これはどうもはつきりとすぢの通らない標題に思はれるのだが、ここではこれを一つの道標といふ位のものにして、私は自分の記憶をたどる事にしたい。

昭和十四年の八月某日、京都の小林政治氏から、その還曆の紀念に刊行された『四十とせ前』といふ表題の小說集を贈られたが、その時に、鮮かに思ひ浮べられたのが、その「四十年前」と稱される頃の、若く、まだ世間に名をなさない小說家の人々に對しての回想であつた。この回想の映像を一つにまとめて考へて見たいと思つたのが、この一篇である。

まづ小林政治氏を一應紹介する必要がある。小林天眠といつて小說を書いた人と言つたら、以前の大阪出身の文學者でない人でも埋れてゐた記憶を呼びさます人が必ず多いであらう。明治三十年代に、大阪の青年

文學者の一團の中で傑出してゐた小説家であつて、東京の方でも當時の青年雜誌の中で勝れた青年小説作家として考へられてゐた人である。その後、所謂作者としての文學界から去り、實業家になつた。そしてその方面で大成した人である。それでこの「四十とせ前」といふ小説集は、還暦の年に昔のかたみとして綴られその知友に贈られた一冊である。

この時代に、小林天眠氏と「轡を並べてゐた」そして當時まだ世に名を成さず、しかも儕輩の群を拔いてゐた青年小説家——その頃の「青年文學雜誌」で活躍してゐた人々の名を、今日でも私は他にも幾人かを思ひ出す事が出來る。中村春雨、本山荻舟、佐野天聲、宮本此君庵、櫻木歌二、鮫島大浪等々の諸氏。今日ではこの人々は現存してゐるとしても既に老境にはいつてゐられる筈だし、それぞれ別の方面で確固とした仕事をしてゐられる。その人々に逢つて昔小説を書くのに熱中してゐられた頃の話をもちかけたら、あれは若氣の至りでと苦笑される人も多からう。この私の記憶に殘つてゐる人々以外にも、もつと多かつたその頃の、その人々の儕輩の誰彼、今日老成されたその人々の中で、恐らく過去をかへり見て、その「若氣の至り」の感をもたれる人が多からうといふ感がする。

この輕い後悔に似た心持が、その人々に起るだらうと思はれる點に就いて、私は重要なものを感じる。これは必ずしもなまなましい心でものを書いた若き日の悔ではないのである。恐らくその人々が後に歩まれた眞實を極める人生と、當時の「小説を書いた心持」との間に餘りにも息の通つたものが無さすぎたからだと思ひたい。「四十とせ前」の「はしがき」に小林氏もかう書いてゐる。

一昨年還暦を迎へた私は、恰も數年以前よりさかんに興りつゝある明治文學研究の聲にでも促がされてか、舊友數氏から文學少青年時代の舊作小説を取纒めて、還暦記念に出版してはと奬められたが、さて四十餘年を經過した今日の眼で讀み返して見ると、宛然死児にでも再會したやうな懐しさは痛感するけれども、その着想も筆致も全く冷汗(ひやあせ)ものなので、いかに童心に立ちかへつても上梓するの勇氣なく見合せてゐたが、この數年來續々多くの知友を喪ふに至り、俄然心機一轉して、舊作掲載の諸雜誌を物色蒐集し、二十餘篇を寫し取る事を得たので、その中より十二篇を選び、往時私が文筆に意を斷つて、築き上げた商店の「創業四十年」紀念日に際會したことに結びつけ、九月六日を發行日として、之が出版を敢てする事とした。

從つて私は此の小冊子を、明治文學上の謂はゆる文獻に資せむなどとは夢にも考へてゐない。たゞ四十年以前の明治文壇に於ける登龍門に押寄せた雜兵中の一人が、當時書いた小説てふものは斯くの如きものであつたといふ形見を、一人ぐらゐは殘して置くのもよからうと思つたからである。云々（昭和十四年初秋）

私はこの序文の意を、率直にそのまゝ受取つて讀む。その後の小林氏が言はれる四十年の間に文學に對する野心の灰汁(あく)がすつかり洗はれて恬淡たる心になられたこの著者は、この一冊に收められた作品に對して、正しく回想する判斷を持つてゐられるのを感じる。所謂「若氣の至り」を靜かな微笑で回想し、そして嚴しい心から冷汗を感じられるのであらう。

それが、如何に當時の「小說」が、現世の心と直接でなかつたかの說明ともなるのである。

二

「四十とせ前」の著者は、この一冊をほんの自分と周圍の知已との爲めに回想の記錄としたと言つてゐられるのだが、この紀念にされた記錄は當時の青年の或る層が、「小說」といふ概念の型をかたく心にこしらへてゐた痕跡の說明になつて殘る。私もその頃の青年文學雜誌の投書家の末班に列してゐた一人であつたのだが、それらの先輩諸氏の名前の記憶は有るのだけれども、その作品に對する記憶はすつかり拭ひ消されてしまつてゐた。そこで新しくこの小林氏の集を讀んで見て、新しく當時の青年小說家——まだ所謂名を成さない小說家の心を圍饒してゐた觀念を改めて思ひ出す機會を得たのであつた。

その頃には「小說」と稱するものが有つた。人生の或る出來事に對して、作者が一つの方向に向つた感情を以つて、それに色づけをするのがその「小說」で有つた。讀者はその色づけの調子に魅惑を感じ、昂奮の快感に耽つたのである。この源流となつたものは、戲作の讀み本で、それを受けついで更に巧緻の境に進めた硯友社一流の人々が、社會に思ひこませた「型」であると私は思ふ。寫實を標榜した「書生氣質」が少しもこの觀念の型から出てはゐなかつたし、美妙齋の如きはその紛飾さへ充分になし得ないで、所謂「構想」といふからくりを拙くこねまはしたに過ぎなかつた。

「浮雲」や「水沫集」の中にある小說作品に藝術らしい作品の發芽があり、後年の眞の源流と言ふべきものがあつたが、それを當時の讀者は、さういふ意味から、「小說」として承認しなかつたのではないかと思はれる。それよりも當時はもつと簡單で露骨な「因果應報」や「勸善懲惡」やがないと納得しなかつたのであらうし、表皮に浮いてゐる感情を刺激して、泣いたり喜んだりするのが「小說」といふものに思へたのであらう。これには芝居の力も相當に影響してゐるやうに考へられる。芝居と小說とが相通じてゐる關係は勿論の事であるが、それよりも芝居の方が壓力が強く小說の方が、その影響を多分に受けてゐたやうに思はれる。これは自然さうあるべきで、當時の筋書同樣の肉のついてゐない「人情話し」では、讀者が心で補ひながら讀むのでは不充分であつたらう。それに比べると芝居は現のものをして見せる——生きた人がやつて見せるのだから、自らそこに肉もつき感銘も鮮かで深いわけである。そこで自然の順序として小說が芝居に支配されてゐたやうに思はれる。單純な當時の文藝界の事情では、簡單にこの因果を考へていゝやうに私には思は

れる。

その前の時代の「筆戰場」と稱した式のつまり後の投書雜誌には、ずつと後年やつと捜し當てて見たわづかの記憶に依ると、一種の美文又は議論などの短いものは有るが小說を書いた青少年は殆ど無かつたやうである。無かつたといふのは私の見聞が狹い爲めで斷定するわけに行くまいが、とにかく小說を書くといふ氣圍氣又は刺激は稀薄であつたと見てもいゝであらう。當時も小說は曲りなりにも有つたので、それを書いた人もゐたのだが、その人達は一種の商賣人だと思はれてゐたやうで、その作者作品を戲作と言ひ、戲作者と言はれる事が、後で思ふほど侮蔑の呼び方ではなかつたやうでもある。

この中に、「書生氣質」が現れ「浮雲」が出、更らに硯友社一派の才人が現れて來ると、「小說」と言ふものゝ觀念が一應そこで形をこしらへたやうである。

そしてその觀念が、この明治三十年代の青年小說家を浸してゐたと見る。小林氏の「四十とせ前」の中の作品に殘つてゐるのがその當時の觀念の面影と見られるのである。

三

二十年代から三十年代へかけての、所謂青年文學雜誌の發達は、次第にまだ成熟しない青少年の文學心を育んだのは一通りでは無かつた。これには一應かういふ事を考へる必要がある。それ等の雜誌の計畫者の「案」即ち計畫した人の想像の中にあつた雜誌と、雜誌の發育とは全く違つたものであつたといふ事である。計畫者は所謂「文章の習練」といふ極めて明白な事のやうに考へられる目標をたてたのらしいが、實はそれが雲を摑むやうな曖昧なものであつたのに、たゞその雜誌を開放して「來る者は拒まず」の態度が、おのづからそこに才分のある青年を集らせる機運をつくつたのであつた。從つて種子が太陽の光を受けて發芽するやうに、青年の中から文學を志す人を呼びさましたのであつた。

わき路にそれるが、昔私は母からよくかう言ふ話を聞かされたのを覺えてゐる。私の幼時に、廣津柳浪氏が當時農商務省の小吏であつた父の同僚だつたといふ事で、その頃よく「小說を書いて持つて來て、讀め讀めと言はれた。」と母が話してゐた。多分私の赤ん坊であつた時から四五歲位の時分の事であるらしい。私は明治十六年生であるから二十年にかゝる時期の事らしく、柳浪氏がまだ硯友社の同人として、新進の小說家と認められない時分の事であつたらう。さういふ事を考へ合せて、三十年代の青年小說家の現れる前にも、同じく小說を書かうと志した青年の層のあつた事がはつきり見えて來る。この層からは露伴綠雨が生れ、硯友社の才人が現れ、一葉が現れて、明治文學の初めの喚發が行はれた。この時には明かに過去の小說界に一線を劃して、新生が行はれた觀がある。——實質はともかくとして、一應はさう見えた。

これから想像すると、その以前にも同じ志を抱いた人々があつたのを考へられる。それは「小說」といふものが、江戸幕府の末期の世情騷然たる日にも、ほそぼそながら水みちが絕えないで續いて來たのであらう。

春水種彥の二世三世を名乘るそれらの小說家の門下が存在してゐた。またその作品が書籍や、新聞の讀きものとして公けにされてゐた。その明治初年の小說家たちがそれぞれ幾人かの門弟をもつてゐたのを考へると、この想像の裏書が出來ると思ふのである。處でこの小說家の門弟はどうも一種の道樂者であつたやうに考へられてゐた。地口の巧い町の若者の中から生れ出した文章家で、人情ものでも書いて得々となり、それにはまりこんだ困り者が、結局小說家の門弟となつたといふふうであつたと思はれる。しかし、私はここにも日本民族の藝術心の芽を感じるので、それを見のがしたくない。當時の全く荒敗した中で、所謂働きのない役たゝずの、のらくら者と見られたそれらの人々は、實は微かな刺激に感じて芽を出した草が、肥料も日光も與へられない中で、尙ほ花を咲かせようとして、その一生を「迷ひ」の中でさまよつたともたとへられさうに思ふのである。この情熱を私は民族の持つてゐる藝術心の現れと思ひたいのである。

四

かういふ層が、幾年かの間隔を置き、順を追つて生れ出した現象は、その後も幾回となく繰返された事であつた。明治三十年代は、小說界ではその第三層位に當るかと思はれる。この次ぎが自然主義運動、白樺派の出現と、だんだん現在に近づくに從つて、その現れが復雜頻繁になつて來てゐる。いつもその度に「新進作家」と呼ばれる人々が讀者の心を新鮮にする。ところで、私はこれを通觀して見て、そこには、その背後の社會事情の反映もあるだらうが、とにかくその層が現代に近づくに從つて眞實を深く帶び、藝術性が正しくなつて來たと思はれるのである。これは吾々の民族が自ら恃んでよい正しい進步であつた。

私が想像して第一層のやうに思つてゐる「戲作者門弟」の時期には恐らく町の一種の風流道樂者、そしてすつと卑俗な心情の文學志望者であつたらしい。次ぎの時期に硯友社に集つた、或はその同時期に現れた人々は、前代から見ると劃期的と言へるほど藝術家らしい氣ぐみの青年たちであつた。この時期には旣に一方に新しい詩の萠芽もあつたが、生活の報酬を得られる文學は、まづ小說に限られてゐた。といふ以上は讀者がそれに反映して來て、從つてこの時分、妙に「小說といふもの」と云ふ觀念の型が出來てしまつた。私はそれを手つとり早く言ひ表し得ないのであるが、人情話しの類の一つといつてもいゝ。當時の批評家たちは、それの巧拙是非を論じ、いろいろその中に含まれてゐる觀念を抽象した人たちもあつたが、結局反省の淺い、思考の輕い、作者の感情から生れた正義、愛憎を土臺に置いた人情話しにすぎなかつた。例外は除くとして大體これで一括されていゝやうに思ふ。

ところで三十年代の青年小說家は、この觀念の雰圍氣の中で、それを破らうとする獨創よりも、まづその範疇の內での成功を主として考へてゐたやうである。それは實人生の中から狹小な響を發する笛の一律だつたのだ。そこで、後年この人々は、かへり見て自分の若い日の作品が「若氣の至り」に見えるのだと私は判

斷してゐる。實際その人々は、その作品の小說に溺れ終るにしては更らに賢く且つ逞しい心を持つてゐた人たちであつたからである。

五

「層」と呼んで私の言ひ表した文學推移の段階は、勿論文學史家に認められる性質のものではない。それは自分でもよく承知してゐる。それにもかゝはらず、自分に確とした意見が有つて、さういふ時代の區分をしたわけでもない、言はゞたゞの便宜によつたにすぎないのに、「層」などと言ふのは少しおかしいが、私としては以前から永い間の自分の文學界に對する記憶を思ひ浮べて見ると、幾つとなく次ぎ次ぎにその「層」が重り、次ぎから次ぎと新しい青年の作家たちが出現して來たのが思ひ浮べられるのである。その中には實を結ばないまゝで消えてしまつたのもかなり多いが、しかし仔細にその人々の心に立ち入つて見ると、かういふ層を爲して新作家の現れるのには、何か必然の機緣となるものの有るのを感じられる。それが何々主義と呼稱して立つといふやうな鮮かな動機であれば、史家もそれを認めるし、その結果も世間への影響を殘す。けれどもさういふ程でなく、たゞその文學に對する情熱には變りがないが、その動機に新しい潮流の生れる必然性を缺いでゐる爲めか、そのまゝ展開を遂げないで終つた層も多い。

私がここに對照として考へてゐる「層」は、硯友社の小說家が齊々として幹流の態をしてゐた時代から、それを覆へして現れた自然主義運動の起る間に出た「層」の一つで、大體には當時の文章觀――琢磨と粉飾を文章の巧さと思つた文章觀から、私の言ふ「人情ばなし」を書くのを小說とした作品であつた。當時當面した「小說」と稱する觀念に疑ひを持たず、その道すぢで大成しようとした態度であつた。それでこの「層」の人々は小說家として殆ど生育を遂げなかつた觀がある。

しかしこの人々はそれぞれ別に立派に才分を備へてゐた。今日になつてその才分に應じてそれぞれの道をとつて進まれたのを考へると、廣大な自然の意志が、暗々のうちに人間に働いた跡を感じられる。表は生活の爲めといふ眼前の撰擇にすぎなかつたかも知れないが、その人々の本然の心がその背後に働いてゐたのを考へられるからである。しかしかういふ事は私一個の感想だ。それよりも、も一つ考へられる事は、いつ何處からとも知らず盛り上る文學心が、極めて衰退した時期にも、我々の民族の中にはたへず流れとなつて、流れ傳つてゐる力。私の切實に感じられるのはこの點である。

一葉雜記

○

三四年前、「樋口一葉全集」が新しく刊行された時に、その編輯擔任の人だと思はれるが、諸家の一葉論を別卷として編む計畫を言つてよこされて、私の昔書いた「一葉女史とその周圍」をそれに加へたいといふ交渉があつた。

私にはその時にすぐさういふものを書いた事さへ思ひ出せなかつた。それで今井邦子女史の「樋口一葉」の終りに丹念に集めて整理されてゐる「一葉の參考文獻」を見返して、埋沒してゐた自分の書いたのの標題を見つけ出した。それは大正元年十月の「文章世界」に載つたもので、將してどんな事を書いたか自分でも記憶が無い。それで全集編纂の擔任者へは、恐らく價値のないものだと思ふから、新しく書きなほさしてほしいと要求した。さうしたらば紙面の都合で斷るといふ返事を貰つて、この交渉はそれで終りになつた。

これをきつかけとして、一葉女史に對して考へた事を自分の心覺えとして書いて置く事にしたのがこの一篇である。

一葉女史に對する追懷、感想、批評は、その死後盛んに書かれてゐるが、昭和七八年頃から改めて盛んになつた感がする。ともかく、あのわづかに二三十篇の小説作品を殘したにすぎない。そしてやつと二十五歳の若い生涯で死んで行つた女流作家が、どうしてかう多くの問題を藏してゐる風に見えるのか——その事自體が一つの問題に思はれるのである。今井邦子女史の「一葉參考文獻」は昭和十五年七月まで發表のものの調べであるが、それを見ただけでも、新しい全集編纂の時に、この中から選んで一冊の一葉批判の書を編まふとした人々には、いかにもそれに盛らんとした內容が、溢れ上りはみ出して困つたらうと、すぐ想像された。恐らくそれらの全部を一つに集めたら、斷片に至るまで丹念に集められた新全集の、全分量より遙かに多い量の女史の追懷と批判の書が出來上る事であらう。本尊の一葉作品は寶石の如く小さく、そこから發する光の擴がりがずつと大きいやうに見える。

こんなに一葉女史の文學生涯は問題を藏してゐるのだらうか。それに就いて私はそれは決して多くの論議さるべき問題を藏してゐるのではなく、何くれの「話題」を含んでゐるので、人を誘ふ機會が多いのだと言つた方が適當な氣がするのである。ならば、どういふ處に話題があるのだらう。その二十五年の若い處女の生涯は、別に特別の生涯ではなく、また女史自身が特別に人と異つた人柄でもなく、怜悧で、生一本な才能の豊かな娘が、貧しいが氣位の高い生活をしたと言ふだけの生涯であつた。その中には殆ど特別に人の好奇心を誘ふほどの大きい題目は一つもないのである。この勝氣な處女は母と妹との三人の生活の支柱であつた

爲めに、眼前の貧しさからのがれようとして、幾らかの大膽な行動——娘として見ての上から大膽ととられる行動をしたのだが、それも決して珍しく人を驚かす程の事ではなかつた。そしてそれらの事は、女史の死後に發表された日記の中で初めて人が知つた事が多かつた。

死後にわかつたかういふ隱れた行爲に對しては、受取る人の想像がかなり強く加はるものである。生前の知已が以前の思ひ出話しをする時に、聞く人の心には或る陰影がそれに加はり暈をかぶつて來る傾きがある。特に一葉女史の日記はさういふ受取られ方を多分にしたのではないだらうか。これに就いては素となるものが有つて、それから傳はり流れた心持が今日まで續いてゐるやうに思はれる。「素」といふのは何か、即ち「文學界」の一葉心醉の心理から發生したものだと私は思つてゐる。更らにこれの原因をなしたものは、その若い人々が生前知已の一葉女史から受けた「人の影響」であつた。それが心醉した心持ちの友情をつくり、その人々の女史に就いての説明が、この「素」となつたと思はれるのである。

特にこの事を私は考へたい。明治二十年代の日本の處女は、現在から見てちよつと想像しにくいほど、人に——特に若い男性に向つて心を開いて向ふ事をしなかつた。それは一つの道德であつたし、又一面には戀愛觀念の革命以前の日であつた故もある。戀愛革命以前といふのが、多少私の獨斷の言葉かも知れない氣がするから、註を入れて置くが、それは精神的戀愛の新しい觀念が、まだ言葉として公けに說かれなかつた以前といふ事である。それであの時分の青年には自由に心を開いた女友達は特殊の關係以外には殆ど得難かつた。この點で女史は一家の女主人の風があつたので、女友達としてそこに集つた青年たちにとつては、はばかる可き人がなく珍しく自由であつたと思はれる。その上に、當の女主人公が潑剌として濶達。客を好むといふ風なのが、そこに集つた青年達には強い魅力であつたと思はれる。

當時の「文學界」同人の一人で、女史との往復の繁かつた平田禿木氏がかう書き殘してゐられる。

……「濁り江」といふ傑作も生れたのである。その頃から女史の文名漸く高く、その居に出入する者も、我々「文學界」の連中のみでなく、眉山氏來り、鏡花氏來り、綠雨氏來り、鷗外先生の代理として三木竹二氏來り、小說界の大御所幸田露伴氏までも親しく駕を枉げるといふ風で、丸山町のあの居といつたら、それやとても大賑ひを來したのであつた。それをば一手に引き受けて、見事に取りさばいて行つた手際はとても見上げたもので、「これなら貴女は、あんな小商ひなどしないで、料理屋か待合でも出したら大當りでしたらうに」と戲れに云つた者もある位である。

この追懷は禿木氏が晩年に書かれたのだが、少し下品で嫌だ。しかし一葉女史の或る印象がさういふ風に生前の舊知の心に殘つてゐたのを參考としていいと思はれる。

さういふ風だつたから、その舊知にとつては理解が深くもあつたらうが、感じ方が強くなつて記憶に殘り

もしたらうと私は思ふのである。從つてこの單純な生涯を送つた人をかれこれ穿鑿して考へる心も强くなり、語り傳へる言葉に陰を深くするものが有つたと思はれる。作品の持つてゐる魅力からもそれが作用してゐるらしく、その人の生涯がだんだん傳說化されてゆく傾きがある。

前にあげた禿木氏の言葉を聞くと、一葉といふ人が、如何にも二十二三の處女とは受取れない世間馴れのした婦人に思はれる。この印象といふのか批評といふのか、この言葉は禿木氏が古くから繰返して人に話されたものらしく、私など禿木氏と面識の全くない者まで、若い時から傳へきゝに耳にしてゐる言葉である。禿木氏はそれを一葉女史の才華ほとばしる樣子の說明として、いゝ意味から繰返して言はれたのであるらしいが、その青年の日から女史をばよく訪ね女史とはよく談つた禿木氏としては、もつと率直鮮明な說明がありさうなものだと、前から私には思はれてゐたのであつた。

なほこゝで禿木氏の女史に對する印象を抄錄して見よう。以下の簡單な記載は、禿木氏遺著「文學界前後」の中の「一葉の思ひ出」に書かれてゐるものである。

「自分が始めて一葉女史に會つたのは、明治二十六年三月であつたが、女史がその小品「雪の日」を「文學界」へ公にした直後、その頃通つてゐた一高からの歸途、本鄕菊坂の居に女史を訪れた時であつた。

坐敷へ通ると、女史は地味とも何とも云ひやうのない、くすんだ服裝で現はれ、八疊の廣間の一隅へ遠く離れて端坐し、低い聲で言葉も絕え絕えに、いとつつましやかに應待されるのであつた。

「それから三、四月して、突然下谷龍泉寺へ轉居の報に接したのである。一高へ通ふ爲、自分はその秋から日暮里に下宿してり、遠くもないので不圖思ひ立つてその移轉先を訪ねて見た。（中略）――前日と打つて變つて、女史はいそ〳〵と自分を迎へ、源氏を語り、近松、西鶴を談じ、十年の知已の如く打ち解けて、萬丈の氣焰を上げるので、自分はこの時始めて眞の一葉女史を見たやうな氣がした。

「それから翌年四月の初めであつたか……自分はその途次馬場孤蝶氏と連れ立つて龍泉寺の店へ立ち寄ると、女史はこの來訪を殊の外喜ばれ、初對面の孤蝶氏を相手に、去秋自分單獨の訪問の際と同樣盛んに談じられた。

「女史の貧を強調する者もあるが、女史は決してその中に埋れて、氣を腐らして仕舞つた人ではない。縣知事とか會社の重役とかいふ人がその職を離れると、今まで門前市を成してゐたその家も、急に火が消えたやうになるものだが、さうした寂しさは菊坂の居でちよつと見られただけで、大音寺前のあの店はとても賑かなものであつたのだ。女史も妹の邦子さんも、とても陽氣にはしやいで、まめまめしく子供や客をあしらひ、廓通ひの客も車を停めて立ち寄り、袴を拔ぎ捨て、懷中物なども預けてゆくといふ心安さであつたらしい。

「福山町の居に至つては、「文學界」以外の者でも、眉山氏來り、鏡花氏來り、三木竹二氏來り、幸田露伴氏來るといふ風で、文壇當時の名流殆ど悉く此處に集つて、女史は一々これに接して應酬流るゝ如く、さながら一つのサルーンを成した感があつた。

「生に對するその見方に至つては實に深刻を極めてゐて、とても和解し難い程の僻みを有つてゐたやうである。この點に於ては、綠雨のそれと一味相通ずるものがあるので、確かに互に共鳴するところがあり、一と度火を點ずれば、ぱつと焰を發したであらうが、双方とも意氣地はとても強く、互に對岸に立つて睨み合つて終つて仕舞つたのは、千載の遺憾であると自分は思つてゐる。

「容姿に於ては、一言にして云へば、紫式部ではなく、淸少納言に近いのであつた。我々仲間ではブロンテ、ブロンテ（シャロット・ブロンテ？）とよく女史を呼んでゐたが、全くその通りであつて、決して綺麗な人ではなかつたのだ。色淺黑く、髮は薄く少し赤味がかつてゐて、それをきゆつとひつつめに結つてゐ、盛裝などとても似合ふ柄ではなく、唯興に乘じ、熱し切つて談じるといふ際は、その眼がとても美しく、魅するやうに輝くだけであつた。

以上抄錄した印象に對して禿木氏は漠然とした自分の印象だと言つてゐられるが、この斷片は一葉を考へる上に、生々した力をもつてゐると思はれる。これをその殘された日記と對照して見ると一層興味が深い。

○

一葉といふ人を考へるのに、その年齡、その頃の女の氣質——信仰に似た心持、特に當時の東京の女の心持をよく了解しての上でないと、方言を會得してゐない都會人が村の人の心持を說くのと同じ結果を來たす恐れがある。諸家の一葉論を見て來ると、やゝこの錯誤を感じる。前にあげた禿木氏の印象にさへ、其の人自身の日記で感じる一葉とは、多少の遠近の誤りのある事を思はせられる。生前の知已の間でさへ、人と人とはこれほど相互の了解にくひ違ひが有るものかと、私は深い寂寞を感じさせられた位だ。

禿木氏によつて、第一にはつきりさせられる事は、一葉女史が劃然と藝術に參したのは「文學界」の青年同人との交渉が始まつてから後だといふ點である。女史が初めに小說の制作を思ひ立つたのは、主として「和歌」の閲歷が素因となつてその文學心が生じ、その屬してゐた中島歌子の社中の同人であつた三宅花圃女史からの刺激と、も一つは、當面に生活上の收入を得る道といふ事とが直接の動機となつて、當時の新聞小說家半井桃水氏に指導を仰いだ。これは誰も彼もが承認してゐる事だ。しかし女史の文學心は桃水一派のそれとは全く性質を異にしてゐた。その事は女史自身には少しも自覺されてゐなかつたので、いちづな心持での師弟の道だけが女史の心を領してゐたと思はれる。その本質の矛盾につき當らない前に別の問題が起つたので女史の美しい幻は終生壞されないですんだのである。主從、親子、師弟とそれら關係が、信仰に類した神聖なものであつて、批判を超えてひざまづく心がまだ前の時代から續いてゐた頃なので、それが「別の問題」と並んで桃水氏に對しての女史には働いてゐたのを思はなければならない。幸ひにしてこの師弟關係は未だ深くないうちに斷たれてしまつた。桃水氏の作品「胡砂吹く風」などを女史が反撥する心なしに尊重して讀んだ日記を見ると、それがこの證據と考へられる。女史が極めて若く批判力が幼稚である年頃の事であつたとしても、それから二年とたゝぬ後の發達を見ると、そこに自覺しない本然の文學心が當然桃水一派の文學とは相いれないものであつたのを考へざるを得ない。

そこへ「文學界」との因緣が結ばれたのである。この所謂清新派の青年との接觸は、眠つてゐた種子の發芽をうながし、一葉女史をして一躍した生育を遂げさせた感がある。禿木氏が書かれた追懷の最初の訪問の日、女史は公人としての一葉ではなく、家庭の中の一處女（家庭の中でどういふ關係位置に居る身分であるにしろ）であつた。それは今日でもその水脈が續いてゐるやうに、年の若い處女が初對面の青年の訪問を受けた時、特につつましくとりなし、暗默の中に身を護る本能の働く事は當然である。特に明治二十年代の日本婦人にとつてはそれが正しかつた。も一つは女史としてもさういふ訪問には馴れてゐなかつた。これらの點から、賢い處女はつゝましく內に藏するものを含んで、客に接したのだと思はれる。この初對面では禿木氏の方が書生さんの不用意な開つぱなしであつたに違ひない。

しかし、この日の初對面がいかに女史にとつて貴重であつたかを私は考へる。この慧敏な處女の本能は、必ずその青年の談話の中に、それまで觸れる事のなかつた同族の氣息を感じたらうと私は信ずる。その後、「文學界」で讀まされたそれら同人の作品は、この直感を育てた。次ぎの禿木氏の訪問、その後の馬場孤蝶氏と同伴した日の訪問を喜び、且つ活潑な心の吐漏は、決して女史の彪變ではなく、同族に對するその人の表れである。同時に、そのつゝましさをかなぐり捨てて本性を露出したのでなく、藝術に身を奉ずる人の誰にも經驗のある心の開放と見るべきものである。そしてこれは女史の藝術力を急に發達させたと思はれる。

更に後に福吉町の居が當時の文壇名流のサルーンの感をなしてゐたといふのは、一方からは年の若い才分の豐かな女流作家に對する興味からの訪問と、それを受けて藝術に對する情熱を燃してゐる女主人との華か

な雰圍氣を思ひ浮べさせられる。

○

一葉女史は實に才氣奔る人であつたと見られる。しかし、これを巧みに感應の波に乘つて發揮される才氣だとは、私には思はれない。その賑かなサルーンの觀を呈したといふ女主人の應酬流るゝ如しだつたのを、禿木氏が見るやうに、並みの婦人ではないと考へるのは少し俗惡だ。本來、片隅にひつこんで小さくなつて世を送る事は堪へられないたちの人で、さういふ賑かなのを好むだのは、その日記からも考へられるが、おのづから自分が中心になる自分の客間の應酬と、そこに心が集中して目指してゐる文壇の當時の名流の中に坐つて、女史の心は活躍して動き閃いたのだと見る可きであらう。この間の生育は飛躍をつゞけたので、わづかの年月の中に、その心が奔騰して伸びたやうに私には考へられる。かういふ「敎育を受ける」機會を持つのは、必ずしも一葉女史だけの場合に限られたものではない。その覺えのある人が他にも多からう。ふり返つてそれを思ひ起す人は、その幸福な記憶をも一度思ひ浮べた時「感謝」を新しくされるに違ひない。この一葉女史の場合を考へながら私はさう思つたのだつた。

一葉女史のこの場合が、私にはむしろ無邪氣な熱中と思へるのである。その中にゐた人は時に女史の言行が人の機微に觸れて、驚かされるやうなのを見る事もあつたらうし、その取りさばきの圓轉滑達の風に接して、たゞの人でない感じを抱いたのは、一應尤もであらうが、それは慧敏な心の持ち主で、且つ小說の制作に打ちこんでゐる人のひとりでに活躍する觀察、判斷がさうならしめたのだと思ふのが正常のやうである。後で回想して禿木氏などは、却つて自分達が開拓して播いた種子に、驚嘆してゐるのではなかつたらうか。

○

一葉女史の日記を見てゐると正直いちづの人が心に映つて來る。その藝術も刻苦して築き上げる精神から決して離れてゐない。幾度も生活の不如意の爲めに、身を處する道に迷ひ、途方にくれてゐる跡を見ると、つくづく傷ましくなる。それが二十歲を越したばかりの處女で、しかも一家三人の支柱となつての苦慮を思ふと、實に强く負けてしまはない勇敢さを感じさせられる。そしてその苦しみが心を搖り動かす事の甚だしかつたのは、文學に對する方向の定らない前ほど、一層ひどかつたやうに見える。

禿木氏が、女史はその貧乏を餘り氣にしなかつたやうだ、案外のんきな處があつたと言つてゐられるのは正に然るべき事だつたやうに思はれる。特にその心が定つて文學を專心やらうとするやうになつてからは、一層生活の不自由などは心を犯さなかつたのだらう。それは一つには元來誇りを持つてゐた人であつたからでもあらうが、女史の氣品がさうさせた處が大きいと思はれる。

明治時代の文學者で、貧しくなかつた人は殆どないと言つてもよからう。金錢の報酬は實に少かつた。この點では一葉女史だけが氣の毒な事情で生活されたとは言はれないのである。

○

或る一葉研究家が、女史の日記を見て時事の問題、政治家の行動についても女史が關心の深かつたやうに書いてゐた人があつた。日記を見るとさういふ記事が幾箇所かに見える。大體は新聞を讀んだ上での、何か書いて置く必要のある事を見たといふ氣持で書いたもののやうに見える。德川期の隨筆に、折ふしある選擇なしに聞き書きを書き留めたのと類を同じくしてゐる。

しかしこの事で氣がつくのは、當時の世情の簡單さといふ點である。も一つは明治十年前後以來の庶民一帶の氣風に政治意識が盛んであつて、何かに就いてそれが日常の話題の一部をなしてゐた、それらを考へ合せて見ると一葉女史の日記に時事の問題、政治の問題が書き留められてゐたとしても、それ故女史がさういふ世相に對して何か特に心を働かせてゐたと思ふのは、少しく穿鑿にすぎてゐはしまいか。しかもよく讀んで見ると、それらの記事に水脈をひいて流れてゐる跡がない。

さういふ事を穿鑿だてするよりも、第一に正しく理解しなければならないのは、女史の人柄だと思ふ。それは明治初期の「女」といふ事が第一の問題で、その色彩に包まれてゐる心が、後れて育つた吾々にはともすると自分たちの時代の心持を混同して解釋され易い。この點は氣をつけなければならない事である。處で十年おくれて生れた私などだと、それに家庭に江戸の物堅さと、敢爲の風の傳つてゐない點からも、どうもそこをはつきり言ひ表せない姿がある。朧氣に感じる勘は持つてゐるやうだが、人に話す事はむつかしい。もつとも緩みのない心がつゝましく内に深く藏されてゐて、みだりに出しやばりを卑しめ、信ずる事には生一本で敢爲、人我の境が明かで、思ひやりと犧牲心とをあがめ、禮讓の正しさを尊しとする。さういふ心の組立てで人に言はれずとも精進する心持。その反面には諧謔を喜び、鋭い批評を持つてゐる……かういふ複雜な素質を幼い時から、おのづと敎へられて身に帶びてゐるといふ事が、東京の傳統正しい心だつたと思はれる。物堅いと義理とか、神信心とか、慈悲とか、物解りが良いとか言つて人に尊敬されるのは、その心の敎養のよく出來てゐる人で、いい人になるといふ事は、その境に達しようと身を責めてゐる人であつた。さう思ふ事が本能としてその人達には働いてゐたのである。一葉女史もこの種族に屬してゐた人と思はれる。

しかも昭和現在の二十歳は、その後のやゝ中だるみした時期を越して、またそこに到らうとしてゐるが、女史の二十歳は一見ひどく年に比べてませてゐるやうに見える。一方に風俗もさうであつた。私などの經驗でさへ、二十年代から三十年代の初め頃の中學生は、もう一かどの大人だつたのを思ひ合せられる。今の幼い顏の中學生を見ると、時々こんなかはいい子供がもう中學生かとふつと思つて獨り苦笑する事さへあるのだが、これは決して自分が年をとつてしまつて、それで起す錯覺だけではない。その時代は髭武者の中學生が、大人顏をして道を闊歩してゐたのは事實であつた。私などは中學の五年生になつても小さな子供じみた風であつた爲めに、さういふのは隨分仲間からも馬鹿にされてゐた。——明治二十八年私の高等小學二年を卒へた年から中學校に入學させる制度が初めて出來たのだが、（尋常小學が四年で卒業、それから高等小學にはいつたのだから、高等二年を卒へたといふのは、今の國民學校初等科六年卒業に當る）その頃から時期を

劃して中學生がだんだん幼顔になり、子供になつたと思はれる。ましてや女は老成が早い。さらにまして初等科教育を卒つた後の學校生活をしないで家庭の中で年をすごした女に、老成の風が有るのは、學校生活をした人よりも早いのが當然である。女史にさういふ風のある事もこれと思ひ合せて考へていゝ筈である。

生前の知已であつた禿木、孤蝶兩氏などの回想の心に映る女史が、その話を讀むと如何にも成熟し切つた人で、とても二十がらみの若い處女といふ事を忘れさせられた印象が殘つてゐるのは、ちよつとやむを得ない事ではあるが、女史を傳へる上に肝心な點をそらしてゐる感がある。知已であつたその人々も當時は若かつたし、同じ年輩ならば、女の方が姉の感がある上に、一葉といふ人が姉氣分の多い人らしいから、一層さういふ風の印象となつて殘つたのであらう。

やむを得ない事ではあるが、女史の年相應の無邪氣さ單純さが、それで消されてゐるのを私は感じる。表には現れないが、遺された手紙を見たり、猜ひを抱かずにその文學に心を集めて進んだ態度を考へると、柔かい、素直な情熱が、いちづに流れ出して、如何にも若さと無邪氣さがこもつて感じられる。その行動とりなしの大人大人した樣子には當年の周圍に應じた、まあ言はゞ型に應じた成人の風が確かり見えるが、心の處は、二十歲はやはり二十歲の幼さをもつてゐたのが見える。それを考へながら讀んで見ると女史の日記でも、手紙でも、ずつとその人に近いものが感じられるのである。

○

一葉女史の人柄に就いて考へてゐる時に、高村光太郎君の「某月某日」の中に收められてゐる「姉のことなど」を讀んでゐて、特に密接なもの感じる暗示を受けた。それで自分の說明をも少し確める意味からその一節を採錄する。

「姉咲子は父の總領娘として明治十年九月五日に生れてゐるから、谷中に來た頃は十三四歲なわけであるが、私の印象に殘つてゐるところではもつとずつと大人のやうであつた。私が七八歲に當るのである。頭を銀杏返に結つて矢絣銘仙のやうなものをいつでもきちんと着てゐた姉さんは私の崇拜の的であつたが、後で考へると寫眞で見る樋口一葉女史の風貌に甚だよく似通つてゐる。何だかその性質も似てゐるやうな氣がする。姉さんは多分十歲前から繪を習ひはじめたのではないかと思ふ。母が長唄をやるので、初めは長唄を仕込むつもりで稽古をさせたが、三味線はさつぱり物にならず、「宵やまち」程度でこれは駄目だといふ事になつたらしい。ところが讀み書の方は六七歲の頃からなかなかよく出來るので、父が西町に居た頃、程近い竹町の生駒の屋敷內に住んで居た狩野派正統の畫家狩野壽信といふ師匠のところへ入門させた。これは父の先輩である塑刻家故石川光明先生の手引によるのではないかと想像する。石川光明先生の令嬢で、今は塑刻家石川確治氏の夫人である、石川丹羅女史も此の狩野先生につかれたのではないかと思ふが、時代

が少し違ふやうで何とも言へない。ともかく姉さんは狩野門下となつてからは、三味線の時とはまるで違つて喜び勇んで稽古をはげみ、草の芽の伸びるやうに目に見えて繪も上達した。その繪は今日でも遺つてゐるが、とても十三四歳の子供の筆とは思はれない確かさを持つてゐる。谷中に引越してからも毎日辨當を持つて竹町まで通學した。私は姉さんが繪筆を大切に扉に卷き、墨や道具を紫色のたたうに入れて、冬になると御高祖頭巾をかぶつて毎朝早く出かけてゆく姿を實に尊敬してゐた。他の人の言ふ事はきかないでも、姉さんに言はれゝば何でもその通りにした。姉さんは御師匠さま思ひで、禮儀が正しくて何でもきちんとしてゐて、勇氣があつた。冬の日の早く暮れる頃になると、姉さんの歸る時間にはそろそろ暗くなつた。今と違つて松や杉の大木の亭々と聳えてゐた上野の森を拔けて歸つて來る姉さんを私は實に强いと思つた。「上野の森怖くないの」ときくと姉さんはよく「觀音さまがついてゐて下さる」と言つた。何でもさういふところを歩く時は觀音經をよみながら歩くのだといふ事であつた。

狩野壽信先生といふ畫家を私は審かにしないが、父の所藏してゐた其の作畫を見ると成程探幽の流風を汲んでゐて上品である。しかし繪畫として獨立の價値があるとも思はれない。出ず入らずの程度のものと言はなくてはならないが、積極的に厭なものでは決してない。此の先生は畫家自體としてよりも敎師として優れてゐた。其道の傳統を純粹に守護繼承して、弟子の才能をよく育て、筋の通つた指導の法を貫徹した。此の先生の繪畫の敎へ方を考へて見ると、その階梯としては先づ運筆の或る習熟を求めるらしい。今日でも日本畫家が最初に畫く例の寶珠の玉と鐽と槌とを凡そ幾千枚畫かせるのか、姉さんの反古にはこれが無數にあつた。運筆の習熟が或る程度に進むと、今度は狩野家傳來の古畫の上げ寫しと、臨摹とを十分にさせる。白描と淡墨とから追々彩色に進み、彩色も岩繪具を專らにする。それから初めて寫生をさせるのである。此の狩野派流の課程には中々意味深いところがある。いきなり自由畫式に放任しないで、古畫の傳統に十分親炙させるといふのは、つまり繪畫の持つ繪畫性といふものを何時の間にかのみ込ませようとする方法と見るべきである。廣く言つて其の造型性、造型性の中の又繪畫性、何故繪畫が繪畫であり得るかといふ要因を言說に依らず、古畫への直接の見參によつて了會させようといふのである。一度は此の窮屈なところへ導入して、それから當人の器量次第で其を打開して行くか否かを決せしめるといふ隨分遠まはりなやうな道である。姉さんは十四・五歳まで引寫しや臨摹ばかり稽古をしてゐたが、其の十五歳の時のものである「百人一首」の帳や探幽寫生帳は、ちよつと今日の相當の畫かき以上の力がある。十五歳の頃師匠から「素月」といふ名を貰ひ、又許をうけた。さうして其の一二年の間に自己の作である「菊慈童」や「鍾鬼」を美術協會の展覽會に發表して賞を得てゐる。さうして家では寫生を專念し出した。私もよくモデルにされた。めくら縞の筒袖を

着て坐つてゐる九歲くらゐの私の寫生が一枚殘つてゐる。姉さんは岩繪具の彩色が殊にうまかつた。狩野先生は初步の稽古から極く上等の繪具や墨を使はせ、いい加減の間に合せ物の使用を許さなかつた。美の感覺の荒れるのを懼れたのである。父は貧乏の中から工面して其の稽古に使ふ上等の群青や朱や臙脂の綿を買つてやつた。姉さんは其を實に大切に使つた。そして自分で出來る材料は皆自分で作つた。私もよく礬水引きの手傳をした。膠と明礬との煮える匂や、臺所中に張り廻らした綱へ下げて紙を乾かした狀景がなつかしく思ひ出される。

明治二十五年には姉さんも十六歲になつた。繪畫の技倆は驚異的に上達して來た。いよいよこれからといふ其年の九月九日に此の姉さんが死んだ。丁度日暮里の諏訪神社の大祭で、私も鈴襷をかけ、萬燈をかついで街をかけ廻つてゐた頃から姉さんは病氣になり、或日急に呼びに來られて姉さんがもういけないのだと言ひきかされた。不思議に悲しかつた記憶が殘つてゐない。默りかへつた家內中の人に圍まれて姉さんはいつものやうに臥てゐた。苦しさうであつたやうな氣がしない。母が私の手を持ち添へて、枕元にある茶碗の水を細長い小さな紙に浸まして姉さんの少しあいてゐる口を濡らした事をおぼえてゐる。みんなが泣いてゐたやうだつたが私は泣いたやうに思はない。その時祖父さんがいきなり叱るやうな聲で、「親不孝め」と言つたので驚いた事が頭に殘つてゐる。

姉さんは死ぬ八日前まで日記をつけてゐて、其の日記が殘つてゐる。それを見ると八月二日に寒氣してまことに心持惡しと書いてあるから其頃から病氣がきざしてゐたのである。通學を休むのをひどく厭がつてかなり無理をしたらしい。それから日を追つて惡くなり、胸が張り、耳が鳴り、咳が出て、食慾がなくなる。今日考へれば肺炎ではなかつたかと思ふが、當時は漢法醫にかかつてゐた。八月末からは臥たきりであつたやうだ。或る夕方祖父が井戶端でつるべの水を頻に浴びてゐるのを見たので暑いからだと思つてゐたが、後年それは水垢離をとつてゐたのだときかされた。これもあとで聞くと、姉さんは裏隣にあつた總持寺といふ寺の不動尊にひそかに願をかけて、父の無事息災を祈り、父の災難の身代にさせてくれと願つてゐたのださうである。その年が丁度父の厄年にあたり、しかも美術學校で父が高いところから落ちた事があつたりした。其上父はシカゴ大博覽會へ出品する大きな木彫の猿を作りかけて、これが中々はかどらないやうな狀態の時であつた。(此猿は今表慶館にある)此事は病氣でお參りが出來ないため、その許をうけてもらふやうに姉さんが母にそつと賴んだ事から初めて知られたのである。

この高村君の姉さんの回想と一葉女史との間に何の脈絡があるわけではないが、私もこれを讀みながら同種同族の女人二人を感ぜずにはゐられなかつたのである。一葉女史が中島歌子の社中で和歌を學んでゐた間

は、所謂文學の習練期だつたし、この間に古典に親しみ、身に帶び、文學の心を我とも知らず養つて居たと見られる。今日殘されてゐる和歌の詠草は、その中から特に「一葉の文學」の特性を汲まふとするのが無理な位、從順な習練であつた。從つてそれらの和歌は何千首あらうとも「一葉の作品」として見るよりも、手習の双紙と見るべきで、細かに見て行くうちに、その詠草の中に一葉女史の心の影が映つてゐるといふにすぎない性質の遺品である。或る歌人が、この詠草を嚴選すれば更らに幾つもいゝ歌は殘らないがと言つて抄錄してゐたのを見たが、それは全く女史の詠草の性質を正しく考へない考へ違ひから生じた仕業で、却つて故人への蔑辱に似た業になりはしないかと思つた程である。

そこから出發して、短い文章にはいり、やうやくその本然の文學力が現れて來た處で、女史は死んだのであつた。

いろいろの人の追懐を讀んでゐると、後年日本の文學が急展開したのと思ひあはせて、もし女史が短命でなかつたら新しい文學の展開に適應して行けるだらうかといふ想像をしてゐる人も多い。もとよりかういふ想像は無益の事で、根のない論理を進める事だが、その多くの人が、恐らく女史は新しい傾向に覺醒して、女史自身が新たな展開を遂げる事は困難であらうと考へる見方をする人が多い。私はこの豫想に同感する事は出來ないが、自分の考へを展げて見ようとする心持も起らない。たゞ多くの人がさういふ空な想像をする理由は解る。それは女史の小說作品が餘りよく纒つてゐる事を、その表現の樣式が完成したものの感を與へるのに由來してゐるのだと、私は判斷してゐる。この考へには充分の理由があるとしても、藝術家の魂の成育を、單なる想像の歸着によつてたどる事は、間違つてゐはすまいか。天然はそんな事を許さないやうに私に思はれる。

○

一葉女史の戀愛は、いつまでも人の好奇心をひく力が有るものらしい。しかしその穿鑿が走りすぎて、つまらない兎や角を考へすぎるのは惡い道樂だ。人の生涯の天然を損ねる仕業のやうに思はれる。何の書だつたかに「樋口一葉の戀人は誰であつたか」といふ標題の一篇が有るのを目次で見た時に、私はもうその本を讀むのが嫌になつた。

女史のこの問題には、何も不思議な事は一つもないやうに私には思はれる。その日記が極めて正直につゝましく、當時の處女らしく當人自身が書き殘してゐるではないか。それで充分だと思ふ。この事に就いて、私どもが後年理解を遂げるべき點は、當時の若い處女の心持の動きやう――この點をたどる事で盡きてゐるやうに私は思つてゐる。一葉女史も生きてゐた人だ、そして特に心のさとく銳い人の若い日だ。人に戀する心が動いたのは當り前で、また正に有るべき事だ。しかもつゝましく沈默した戀で、心が燃えながら燃え集つて炎とならず、反面には戀を後暗い事に思ふ觀念に支配されてゐる心で、その生涯の下ゆく水となつて終つた――靜かに燃えつゞけてゐる心であつた。

これと同じ意味で、後年の作品と生活とを、餘り密接に照應させようとする考へも、小説作家に對する了解の疎い穿鑿のやうに思はれる。

○

佐藤春夫氏は、全集の第一卷の校訂をした後書の中でから書いてゐられる。

> 女史の文はひとりその用字引歌ばかりではなく文脈そのものが嫋嫋として、纒綿たる情趣と餘韻とは到底近代日本のものではなく、王朝の才女たちを思ひ出させるものが多い。女史の文字の魅力の大半はこれにあるとしても過言ではあるまい。女史が言文一致體の文體をたとひ熱心に試みたとしても終に成功の見込みはなかつたらうと見受ける。自分が注に於いて煩はしいほど女史の文體の理解の手引をしたのもこれがためである。云々

この佐藤氏の言はれる事に、私も同感するが、女史が口語體の文では成功しなかつたらうといふ點だけには私は承服する事が出來ない。女史が短命で、その文學作品がわづかの分量で、それで一切が終つてゐるのだから跡は空の空なるものに向つて理路をつける事になるわけで、何れ佐藤氏の考へに對する私の不承も水かけ論に類する事であらうが、その作品を讀んでゐて、この體にこれほどの自在を會得した人が、年と共に閲歴、教養を重ねて新しく目を覺して來たとしたらば、自分の殼を破つて流れ出さない筈はない。ましていちづに美しさ良さを求める心と、おのづから美しさの本筋を知つてゐた女史が、必ず新しい女史自身の表現の形を築いたらうと思はれる。その場合に美しい一葉一流の口語體の文章が生れたのであらうと私には思はれる。それ故に私は佐藤氏の言に承服出來ないのである。

しかしそれらはすべて據り處の無い推論である。さういふ想像はともかくとして、女史の文章は誰の模倣でもない。幾樣かの型は學ばれてゐるのが、言はんとする處を言ふ特におのづから女史自身の心のまゝに流れてゐる。故にその細かに働く機智が、巧みに言葉のあやとなつて、佐藤氏の言はれる嫋嫋綿綿として、調子を帶びて書かれてゐるのは、よどみなき水の流れのやうである。成程、この魅力は時がすぎ、次ぎ次ぎに新しい文學の表現が生じても變る事なく人の心に纒りつく力を帶びてゐる。

この時分には、直截な言葉が力をもつて人の心に迫るといふ事がなかつた。例へば「夢」といつて、その言葉の含んでゐる意味が直ちに人に迫らず、それには「夢」といふ觀念だけが人に映る。それで「莊周が蝶夢」といふ風に、彩をつける。さうするとそこに一つの感じが心に映る。文章の巧妙とか美しさとかがこの技巧で分れるといふ風であつた。紅葉山人が細心鏤刻したと稱するのも、その種の苦心であつた。(一葉亭の場合は全くこれとは違つて、後の文章の水源であつた。)さういふ考へ方の中で一葉女史も、その文章を書いたのであるが、それが嵌木細工のやうな苦心でなく、水の流れる姿でその心から湧いた感がある。

女史の遺された手紙の中には、それを尙ほよく理解されるものがある。時には勢ひがつきすぎて、言葉が心より先に走つてゐるのを思はせるのがあるし、感情を美しく表さうとして表情の正鵠を失つてゐると思はれるものさへある。尙ほ更ら、その未定稿の斷片を見るとこの點がはつきりする。その心が動き言葉が流れ出した調子が、途中で止つて動かなくなつた跡がよく解る。二種の「なき黒子」を見るとそれぞれよくその點を說明してゐる。

それで女史のあの文章では、小品またはごくの短篇は、句讀こそあれ、一連の言葉の轉つて行く調子で、句切りなどが念に浮ばずにすぎて行く。それでこの表現の方法では長い作品は困難であらうと一應は思はれるのだが、必ずしもさう斷じ難いのを私は感じてゐる。それは女史の文章が全體として抒情詩風の作品だけしか書いてゐない時期のものだから、あの形で終始したのだが、あの細かくよく氣のつく觀察を生き生きと書き表してゐる文章は、年齡がすゝめば必ず、もつと廣々した客觀性の確かなものになる事は必然だと思はれるのである。口語體の文章へ進むに違ひないと思ふのもそこの點からである。

ともかく、この完成の姿と見られる「一葉の文章」は、實は若い日の幼い文章で、當然の變化が後に來る前の日のものだと、私はさう思つてゐるのである。

○

女史のやうな作家が、明治二十年代に生れた事を、も一度よく考へて見たいものだ。さうすると、微妙な血の傳統に思ひ到る。日本民族の魂に。勝れた藝術を生む力の滅びない魂に。太古の日から脈々として傳へられてゐるものに思ひ到る。明治の御代は、維新の變革と共に民心の新たにせられた初めである。この時に埋れてゐた民族の藝術心が新しく芽をふいて茂らうとした事は、否み難き生々の力であつた。そこに思ひ到ると、實に深い感動に包まれるのである。

私は、この感動に觸れてから、もう久しい時がたつたが、今日もその感動は新しく吾れに返つて來る。

川上眉山の最後

一

御手紙を拜見しました。川上眉山氏の最後に就いて何か知つてゐるかとの御問合せですが、あいにく眉山氏とは一二度お目にかゝつた事があるだけで、その生涯を通じて個人として何にも交渉がなく、特にその晩年に就いてはその周圍の人からの噂も聞いた事がありません。從つて何にも眉山氏に就いてお傳へする資格をもつて居りません。

しかし、眉山氏の意外な最後が新聞に載つた日――それももう古い事で、亡くなつたのは明治四十一年五月（馬場孤蝶氏の記載による）だから、その頃は私は、やつと學校を出て二三年の若い時でした。その日に私は驚いてその記事を讀んで見ますと、もうどの新聞だつたかも覺えがないのですが、生活の不如意と制作に就いての行きづまりがその原因だといふやうな事が書いてありました。それからそれを讀んだ時に、私はこの記事を書いた人に對して何とも言へない不滿を感じたのでした。その心持が、今日でもまだ私のうちに殘つてゐると見えて、御手紙を見るとすぐそれが思ひ出されたのでした。眉山氏とは因緣も薄く、人に就いても殆ど知らないのを顧みずに、御返事のこの一篇を書く心になつたのはその心持が原因になつてゐます。

それで私のこの一篇は自決といふ事に就いて考へてゐる私見をも併せて述べる事になります。

二

明治以後の名ある文人の中で、その最後が自決であつた人私の聞き傳へて知つてゐるのは中西梅花、北村透谷、川上眉山、有島武郎、芥川龍之介の五氏だけです。さういふ事情に詳しい研究家の持つてゐられる名簿には他にもあるかも知れませんが、私は世間で誰でも知つてゐるこの五氏だけの事しか聞いてゐない、といふ、ここでも極めて有りふれた智識なのです。

しかしさういふ事はまづ傍に置いて、私はいつたい人の生涯が自決するといふやうな思ひ切つた行爲に依つて終りを告げたといふ場合に、傍らで見てこれこれの原因といふやうな簡單な判斷をしてかたづけてしまふ事は、如何にもいやな事のやうに思はれます。

少し以前に讀んだ島崎藤村氏の「春」の中に、かういふ一節がありました。その筋あひを他人が話すより

もちかに作者から聞く方がいいと思つてそれを寫して見ます。「春」の主人公「岸本」がその憂鬱に押され押されて、一種捨身の漂泊の旅に出る。それは一切をすてゝ身に一物を持たないやうな旅でした。そしてその岸本の憂鬱といふのは、その情熱を傾けてゐる藝術の道は展けず、希望もなく、從つて報いられるものゝ乏しい生活の前途に對する道もなく、その戀も遂げられず、更らに自分自身の内にも處置の出來ない、しかも力の強い蟠りがある。この渦から起る憂鬱でした。

『御泊りになりませんか。』暗闇からちよこちよこ出て來て斯樣なことを言ふ人があつた。聲は老婆だ。星明りに岸本の方を透かして見て、宿賃は七錢だが泊らないか、としきりに勸める。偶然にも、岸本の左の袂から十錢銀貨一つ出て來た。それだけあれば、一晩泊めて、風呂に入れて、朝の飯だけ焚いてくれるといふ。斯の約束で、岸本は導かれて行つた。

爐には火が燃してあつた。無い〳〵とばり思つてゐた金錢が――假令十錢でも――出て來たお蔭で、思ひがけなく岸本は木賃宿に泊る事が出來たのである。手拭に附着いた飯粒を穢い風呂場で洗ひ落して、僅かに一日の疲勞を忘れた頃は、最早ガッカリして了つた。彼は明日の事なぞを考へて居られなかつた。天井の低い二階、古新聞で張詰めた壁、細く暗いカンテラの光、それから幾人の貧しい旅人がその上に枕して眠つたかと思はれるやうな、冷い、垢染みた木片の臭氣

――何もかも一夜を他の軒下で震へ明すから見れば、どうして苦になるどころではない。部屋には外に客もなかつた。彼は先づ寢床の上に倒れて大の字になりにふんぞりかへつた。『ア、草臥れた。』と心から疲れたやうな、放擲したやうな聲が思はず知らず出た。妙なもので、其樣なことでも言つて呻吟つて居ると、それだけ樂になるやうな氣がした。蒲團は薄いのが一枚しか無い。彼はその中に包まつて、柏餅のやうになつて寢た。

翌朝、岸本は急がしさうに斯宿を發つた。而して前の日と同じ方向に指して歩いて行つた。眼前には種々の光景が展けないでもなかつたが、判然と心に映るものは少かつた。彼は、今迄に何里歩いたかといふ事も知らなければ、今何處を歩いて居るかといふことも知らない。斯樣な調子で、とぼ〳〵辿つて行くうちに、晝過になつても食ふ物は無かつた。其時は最早、親兄弟は言ふに及ばず、友達とも遠く離れた。稀に途中で逢ふ人は知らない他人ばかりである。終には歩き疲れて、自分の身體を路傍の土の上に投出すやうになつた。

薄日が霜枯れた草の上に射した。岸本の眼に映るものは、今、その動搖する光ばかりである。ボンヤリとして眺めて居ると、彼の頭腦の内部も幾分か明るくなつて來る。紛とした土の臭氣を嗅ぎながら、彼は身の周圍を眺め廻した。唯一人――斯うなると寂しいところを通り越してシーンとして了ふ。最早、何にも無いと言つて可かつた。有るものは、薄い日の光と、戰き慄へてゐ

る自分ばかり――斯樣な風になつて、長いこと岸本は悄然眺め入つて居た。すこしも靜止として は居られなかつたが、と言つて休息まずにも居られなかつたのである。
日が隔つて來た。復た岸本は器械のやうに歩き出した。（「春」第四十章）

しきりに犬が鳴く。往來には鍬を肩にかけて歸つて行く農夫がある。稻を負つて來るのもある。岸本は急いで人家のあるところを行き過ぎようとした。怪しげな者が通る、と言つたやうな聲を出して、犬が追つて來た。平常とは違つて、タヽの犬の鳴聲とも言はれない程、岸本の耳には怖しく聞えた。彼の方で逃げようとすればする程、餘計に來て吠え付く。終には、三四匹一緒に成つて、牙を顯して、今にも背後から嚙付きさうな氣勢を示した。

『畜生ッ。』

と岸本は怒氣を含んだ。彼は悲しさうな眼付をしながら、石を拾つて投げた。

この犬の鳴聲が遠くなつて、聽て聞えなくなる頃、彼はある坂を下りた。不圖、浪の音が寂しく耳に入る。それを聞いて、彼は海岸に近いところへ出て來たことを知つた。坂を下りきつて、それから次の村へ入らうとするところに、橋がある。その橋の上に立つた頃は、黃色く光る西の空が彼の眼に映じた。

苦しみ、餓ゑ、疲れた旅の一日は次第に暮れて行つた。彼は朝飯を食つたばかりで、水一口も飮まずである。村はづれの家々、立ち登る煙、夕暮を急ぐ人々の顏、何もかも彼の眼には一緒になつて、グラ〳〵動いて見えた。橋の下には音のしない水が流れてゐる。欄の上から覗き込むと、急に彼は眩暈がして來た、その水の中へ轉げ落ちさうな氣がした。而して、その水を見ると同時に、實に思ひがけない思想を胸に浮べた。

幾度か岸本は橋の上を往つたり來たりした。最後に村の方へ半町ばかり歩いて行つて、急にそこで踵を返した。彼の足は浪の音のする方へ向いた。橋の畔から竹藪のやうなところを通り拔けて、小高い砂山のあるところへ出ると、一筋の細道が枯草の中に在つた。所謂濱道だ。それを辿つて海の方へ行く前に、彼は先づ四邊を眺め廻した。右に墓地がある。花なぞを供へた新しい墳がある。死人に手向けた水もある。彼はその茶碗を取つて、渴いた咽喉を潤した。それから古い石塔の倒れたのを見つけて、その上に腰を掛けて、考へた。

『萬事休す。』

斯う思つて立ち上つた頃は、最早海も暮れかかつて來た。蒼茫として彼の眼前に展けた光景は、永遠偉大な自然の繪畫でもなければ、深秘な力の籠つた音樂でもない。海はただ彼の墳墓である――冷い、無意味な墳墓である。不幸な旅人は、今自分で自分の希望、自分の戀、自分の若い生

命を葬らうとして、その墳墓の方へ歩いて行くのである。到頭、彼はその墳墓の前に面と向つて立つた。暗い波は可怖しい勢で彼の方へ押寄せて來た。（「春」——第四十一章）

『此世の中には自分の知らないことが澤山ある——今ここで死んでもツマラない。』

斯う岸本は思ひ直した。彼は浪打際で踏み止つて、そこからもう一度人里の方へ引返した。偶然にも、岸本が今歩いて居るところは、前川村の隣村であつた。いや、小字が違ふだけで、同じ村續きと言つても差支ない程近いところへ來て居た。このことを土地の漁夫から聞いた時、岸本は地を踏んで悦び躍つた。して見ると、彼が入水しようとしたところは國府津に近い相模灘の海岸で、一度青木と一緒に泳いだ場處とは物の十町と離れて居なかつたのである。（「春」——第四十二章前半）

以上は藤村氏の半ば自叙傳風の小說「春」の一部で、藤村氏がその「若い日」を新しく描き出したとも見られる作品です。明治二十年代の「文學界」の青年群の生活と思想の動搖、流動を書いたもの、この回想は藤村氏の心で後永い間、反芻咀嚼された後に書かれたものと見るべきですが、同時に幾分かの細部の取捨が行はれてゐるとも見てよいと思ひます。

この未遂の自決と、それから餘り時を經ずして遂に決行された透谷氏の自決には、內容に明かな差異があるとしても、一脈相通じた心の壓迫があつたのが感じられるのです。透谷氏のは後に述べる事とし、藤村氏の衝動は或る力に押しつめられた若い心の尖りつめた窮迫と見られます。從つてそれを背から見てゐると、もつといくらでも考へる餘地もあり、そこから出て行く道があるのに、いちづにそれと思ひつめた感がありますゝ。その當時どうしてもさうするしか道がなかつたと言ふのは當人の心自體が受けてゐた壓迫だつたと思ひます。自決といふ行爲には、どうも第三者では思ひも及ばないさういふ「尖りきつた」心の狀態が、押して行く結果があるやうです。

しかし岸本の場合では、その發作は一つの夢魔でした。岸本のからだの中には、たとへその場合には息をひそめてゐたとしても、若い魂の「希望」——將來への展開が少しも壞されて居ず、いざといふ瞬間にその襲ひかゝつた夢魔を吹き拂つてしまひました。且つ岸本のからだは極めて健康でした。だからその偶然の決心は人を脅かすやうな考へでありながら、夢をぬぐひ去られてしまふと極めてあつさりと通りすぎた流れ雲のやうにも見えます。岸本にとつても——「春」によると——それが生涯の大きな轉機のきつかけともなつては居りません。と言つて私は人のかういふ場合が、ちやうど敏感な秤の動きのやうに思はれるのです。この眞面目極まる感情の動搖には、實に微妙な秤の均衡があつて、それが一つ狂ふと、結果としてどういふ事が行はれるか解らないと思はれるのです。

かりにこの岸本の場合に、その秤が狂つてその時の偶然の決心へずるずると引き入れられたとしたら、そ

の跡、世間では動機になつた希望も纔も遂げられず、生活に光明が無い絶望の爲めに、岸本がその最後の道を選んだと噂するかも知れません。だが、それは單なる動機の一部で、實際は説明の出來にくい秤の狂ひが、最後の時の全部だつたと思はれるのです。

この當人が自身で明かに思ひ返してゐる記憶を書いた作品に依つても、自決の場合の心持は説明出來ないものが、ありありと働いてゐます。

三

「春」の岸本の場合と、青木の場合とはもとよりずつと違つてゐます。そこには青木は岸本に比べてずつと神經の脆さがあります。青木——即ち北村透谷氏の晩年が今から考へると激しい神經衰弱にかゝつてゐられたと思はれるのですが、何が北村氏をそこへ追ひこんで行つたか「春」の描き出してゐるだけではきわめて不充分に感じられるのです。有り餘る情熱を傾けてゐる仕事に對しての世間の反應の寂しさ、そこから來る失望、それから自己自身に對する失望、それから當面の生活の不如意と希望の無さ、それらが原因で神經をすり減らした症狀になつたのか、神經の疲勞が一層尖つてさういふ現狀を心の重荷にならしめたのか、多分めぐる環の原因が結果、結果が原因となつて壓力がかゝつて行つたのだと私には思はれます。それと更に誰れにも説明されない他の或るものが何か加つてゐなかつたか、それも考へさせられる事です。北村氏はそれでひどい衰弱性の病人になつてゐられたのでした。その自身を説明した手紙にも生來の憂鬱性といふ事が言つてあります。して見ると北村氏には少年の時から病氣にかゝり易い憂鬱性があつたのでせう。藤村氏と透谷氏とはからだの組み立てがまるだ違ふやうです。岸本は青木に比べると遙かに頑健で太く逞しいものを身に持つてゐたと思はれます。

さらに透谷氏が自決したのは五月半ばで、所謂新綠の憂愁の季節、透谷氏のやうな衰弱した神經に激しい刺激を與へる時であつたのも考へられますし、その決行された夜が、よく晴れた月の光の美しかつた事も考へ合はされる事です。この月の光から起る恍惚が透谷氏をどれほど誘ひ立てた事か、これを氏の詩情とも相照らして考へて見てい〻と思はれるのです。

これはわき路ですが、「春」の岸本にしろ、青木にしろ、新しい文學——思想と情熱とをひつくるめて——の生みの苦しみをしたのだと思はれるのです。明治の文學に更らに新しく美しい流れが生れ出ようとする時の苦惱の跡がこ〻でも思ひやられるのです。

四

第三に、年代の順を追つて考へるのですが、眉山氏の自決です。それを傳へた新聞紙は前に述べたやうな一わたりの判斷を下して、それを手輕に書いてしまひました。

明治四十一年、眉山氏がその自決を遂げられた時には、もう數年この方同氏の消息が餘り世間に傳へられなくなつてゐた時でした。それに文學界には新しく自然派運動の起り始めで、世間の視聽がどやどやとそこの一點に集つてしまつた觀のある時でしたから、眉山氏を簡單に過去の人と見てしまつた風でした。それでその數年前まで小說文學の世界を壟斷してゐた觀のあつた硯友社中の名家を、世間はたやすく忘れようとしてゐたのでした。

さて眉山氏の自決に就いては、その後にも氏の舊知の人の中でそれを話してゐる人が甚だ少いやうに見えます。その他の場合でも何かの追懷の話されてゐるのさへ極めて少いので、人として餘り傳へられてゐない感があります。私の知つてゐる限りで一番親切に眉山氏の追懷を書いてあるのは馬場孤蝶氏の著書です。しかしその書の中にも自決に就いてはほんの僅かしか書かれてゐません。相當に親しかつたらしい馬場氏も、その最後の悲劇には全く交涉がなく、新聞で知つて驚かれた一人のやうでした。それと知つたといふだけで後の事に就いても、何にも交涉がなく却つて人づての噂を聞いたといふにすぎない風でした。

まづ、馬場氏の書から眉山氏の最後に關する少しばかりの斷片を書き拔いて見ます。

年四十そこそこで不幸な終りを告げた眉山川上亮君……（「あの頃の川上眉山君」より）

眉山君が最後の家、天神町（東京、牛込區）へ越したのは三十八年頃であつたらうかと思ふ。尋ねて見た事は二度程あつたが、何時も留守であつた。

富士見町で、眉山君と門下の某氏との酒の席へ出たと、或る藝者が云つてゐたが、それは四十年頃であつたらう。逢つたら、そんな笑話もしようなどと思つてゐながら、つい尋ねそこなつてしまつた。

眉山君のなくなつたのを、新聞で見て驚いたのは、四十一年の五月頃の或る朝であつたかと思ふのだが、或は記憶に誤りがあるかも知れない。

それからずつと後になつてのことであるが、或る晚、細川風谷がたづねて來た時、眉山君の話が出ると、風谷は、

「川上が死ぬ前に、僕の方が借金なんぞでよつぽど弱はつてゐたんで、これぢア近々に腹でも切るか、ぶら下がりでもするかより外はないと云ふと、自分で死ぬなんてそんな心得違ひがあるかと云つて、川上からひどく意見をされたんだがね、ところが、それから一週間ばかりたつと、僕に意見をした川上の方があの通りにやつてしまつたんだ。」と話した。（「眉山・綠雨・透谷」の一節）

馬場氏の書にも、これだけ、よそ〲しい書き殘しが有るだけです。その他に眉山氏に就いて、

――多分二十八年の三四月頃であつたらう。僕はその時分、本郷龍岡町十五番地に住んでゐたので、川上君が二遍ほど泊つたことがある。始めて泊つた時に川上君は、『寢てゐて飛んでもない大きな聲で叫ぶ癖が僕にはあるのだから驚いてはいけない』と云つて床に入つたけれども、僕の家では一度もそんなことはなかつた。(「あの頃の川上眉山君」の一節)

と馬場氏が書いてゐられるやうな癖があつた。前からからだの中に病氣があつたのではあるまいかと思はれます。その上に家庭内にも若い時分からいろいろと重壓となるものがあつたといふし、大酒だつたといふし、自分の藝術に關しての矛盾があつたし、少しもなだらかな生涯ではなかつたと話されてゐます。

「川上君は話聲なども優しい人當りのいかにも柔かな人であつた。從つてよくものを堪へた人であつて、自分の境遇などをあまり人に打ち開けなかつた。さういふ風で、人知れぬ苦悶が多かつたのであらう。酒はかなり强かつたやうだ……」(「その頃の眉山君」の一節)

そのおとつさん（眉山氏の父）の亡くなつたのは、二十九年の五月頃ではなかつたかと思ふ。一葉女史の日記「みづの上」二十九年六月十日のところに、左の如く書いてある。

「門に人のあし音聞え初めぬ。お家にかといふ聲はさながら其人なるに、あな川上ぬしにこそとて座をたてば、平田ぬしも同じく席をはなれて迎ふ……かれこれ共に悔みなどいふに、定りたるにこそは、さても其後のせはしさよ、淋しなどいふ事かけてもなく、日々にさま〲の相談事などいとうるさう、負債のぬしよりせめはたり來るなども多く、やる方なき暇なさなりといひて、さのみは憂はしげもなく打笑ふ……」(「眉山・綠雨・透谷」の一節)

「川上君はある點までは、自分の心を人にうち明けるが、その點から先きへは何うしても人を近づけなかつた人だ。」

確か田山花袋君はそんな風に云つたと思ふ。さういふところは、眉山君の一種のプライドから來たものであらう。(「眉山・綠雨・透谷の」一節)

それから私自身に唯だの二回だけ眉山氏に御目にかゝつた事のある、もう古い事ですが、自分の印象を思ひ浮べながら以上の記事を讀んでゐますと、何となしに眉山氏が最後にふと「堪へ能はなく」なられた心持が考へられて來ます。殊にその細川風谷氏の簡單な談話は凄い力のある記憶の斷片で、思はずぞつとした感

がありました。

なるほど、その頃の世間は眉山氏の心を追ひつめてゐた事でせう。眉山氏の風貌については孤蝶氏が、採錄してゐられる一葉女史の日記とまるで同じやうな印象を私も受けてゐるのですが、——私の記憶に今もはつきり見えて來るのは三十五六年頃の、山伏町に住んでゐられた時分の眉山氏です。眉山氏は如何にもゆつたりした、そしてしとやかな人に感じられました。その頃の氏の風貌が、かつきり記憶に殘つてゐるのは、私が厄介になつてそこから學校に通つてゐた矢來町の叔父の家と、眉山氏のお宅とが背合せで、庭の竹垣で隔てられてゐるので、眉山氏が折ふしその裏庭と思はれる方に出てゐるのを、庭で從妹たちと遊んでゐる時によそながら見馴れてゐました。そのあとで、私はたしか蒲原有明君から頼まれて書を屆けに行つたか、受取りに行つたか、どちらかの用でお訪ねしました。(その本は、黃色い布表紙のガーネットが英譯したツルゲーネフの作品でした。)そしてこの高名な小說家を目のあたりに見たのでした。

その時は、如何にもおほやうな風の人柄に見えたのですが、その後の數年で眉山氏がどう變られたか、私は知らないのです。この時でも內にはどういふ苦汁と憂欝とがこめられてゐたかも、私に解りやうがなかつたのです。前に採錄した馬場氏の記憶を見ても、その人の中には健康でない一部があつたのかと思はれます。それに加へて四十年前後頃の文學界の調子は、決して眉山氏には希望を明るくさせるものでなかつたでせう。まだ自然主義文學の聲が世間に溢れるやうにはなつてゐなかつたでせうが、もう明かに新しい文學の潮流が勃興するきざがそこらぢうに動いてゐたのは事實でした。

だが世間のこれらの風、又はもつと側のものが立ち入りにくい種々の事情が眉山氏に迫り、それ故にあゝいふ最後の決行をなさつたと判斷するのを、私は簡單に承認が出來ないのです。さういふ種々の事は、自決の原因にはなつてゐたでせうが、それぱかりでその結果を計算するのは、その人に對して禮を失すると思はれます。即ち、風谷氏の談話が讀む人を慄然とさせるのも、眉山氏の心身にふいと平均の破れた時といふ事が、氏をして自ら傷つける所行を敢て爲せたのだと私は思ふのです。これを考へると誰にとつても心を脅かすものが必然に見えて來ると思はれるのです。

これらの人々の事は、極めて平靜な時代に行はれた個人の悲劇でした。從つて戰場の勇士の場合などとは、まるで違つた心で行はれてゐる事は言ふまでもない事です。

五

この眉山氏の最後を思ふにつけて、更らに前からの眉山氏を考へざるを得ないのです。眉山氏の遺された作品に今日なほどれほどの存在力が有るかを、ここで批判したくはないと思つてゐます。その時々の世評は浮べる雲で、眉山氏の一時の盛名も隨分はかなく雲散霧消した感があります。後には言ひやうがないので

代の名文といふやうな事をよく言はれてゐるのは、氣の毒な感がします。眉山氏には出來上つて後代に殘るやうな作品はなかつたかも知れないのですが、當時の硯友社一黨の中で、一番藝術性の鋭く且つ正直さを持つてゐた作家だつたと思つてい〻氣がするのです。

たゞ、初めから終りまで通じて、心が動搖しつ〻、自分の道を明かに掴む事が出來ずに終つた作家だつたと思はれます。しかもその時分――氏がまだ二十五六歳の時分に一面には相當に世間から認められてゐたのに、一面には潛熱が顯れるやうな新文學の動きが氏に感じられ、氏の夢を醒さうとしてゐるのでした。「文學界」の同人とは、さう年齢のへだたりは無かつたでせうが、文學者として所謂世間に名を成してゐる人としては、「文學界」の人達とはずつと距りがあつたのです。それだのに、この青年の群れに交り入つて相當に親しい友情を持つてゐられたのは、新しい文學者への友情を持つてゐられたのは、新しい文學の感情に親しむ心が強かつたからだと思はれます。この心の鋭さが或は眉山氏には苦惱であつたかも知れないと思はれます。

硯友社の先輩のなかでは、眉山君が一番當時の新しい若い文學者に近づかうとしてゐたやうに見える。

「川上君なども、舊い殼を破らう破らうと努力してゐるのだが、なかなか破れないので煩悶してゐる。」

田山君（花袋氏）が三十八年頃かに、島崎君と同席の時に、さういふ意味のことを云つたと思ふ。それは田山君が辨天町に住んでゐた頃のことであつたと記憶する。

眉山君は新しい時代のいぶきに敏感であつたがために、當時の既成作家としての惱みが多かつたのであらうと思ふ。（「眉山・緑雨・透谷」の一節。）

馬場氏のかう書いてゐられるのは、一葉女史が書き殘したわづか數年間の日記を見ると、それに照應してゐるやうです。つまり一葉女史の訪問者名簿の中で、眉山氏は齋藤緑雨氏と並んで、その年若な、新進の女流小説家をしげ〴〵しく訪問してゐられるのです。同時にその女史の客間に集つた人々の中で、この兩氏と「文學界」の人々との、互ひに友人らしい仲間づきあひの風が想像出來るのです。その親しみが新しい文學情操に對する同感だと思はれます。馬場氏が言つてゐられるやうに當時の他の所謂「既成作家」の中で眉山氏は最もよくその新情操に感應した風に見えます。それは眉山氏のい〻良心が感じたのだと言つてい〻のです。しかし、ここに一つ大きな障害がありました。その新しく生れて來ようとするものを感じる良心は働きながら、その自體の魂が目醒める事が出來なかつたと云ふ事です。これはその人の惰勢が堅い殼をつくてゐたのか、或はそれまでの時代の影響――文學は文章の巧みな紛飾、言葉の使ひわけといふやうに思つて來た觀念がこの魂の目醒めについて見當がつかないといふ、言葉で言ふと簡單ですが、實際は眞實への深い大き

な飛躍が困難であつたのではありますまいか。

これは眉山氏とは別の尾崎紅葉山人に就いてですが、明治二十年代後半から三十年代頃の消息について、田山花袋氏はかう書いてゐられます。これを讀むと、眉山氏のその場合の苦惱が道を開かなかつた心の彷徨を想つて見る事が出來ると思ひます。紅葉山人の心の動きは眉山氏と同じではない事は勿論ですが、一面に相通じた殼でふさがれてゐたと思はれるからです。

田山氏のその回想を抄錄して見るとかう書いてあります。

紅葉はその時分は『紫』だの『冷熱』だのを書いてゐた。かれは尠くとも『三人妻』に行つて一轉した。とてもこんなものを書いてゐても駄目だ……といふやうにかれは考へたらしかつた。次第に時代が移りつつあつた。新しい芽はそこにも此處にも萠え出した。聰明なかれは逸早く新機軸を出さうと心懸けた。

かれはこの時分、ゾラからモウパッサンのものなどを讀んでゐたらしかつた。それは無論、どの點まで深く讀み入つてゐたかは知れなかつたけれども、「ピエル・エ・ジャン」の話をしたことなどを覺えてゐる。また次のやうなことをも言つた。

「あゝいふライト・タッチで書くやうになれば、それはもう大したもんだけれども、そこまで行くのが中々大變だからね――ちよつと眞似は出來ないよ。』（「近代の小說」第十二章の一節）

これを讀むと、紅葉山人がいゝものを食べてゐながら、その味の眞實、それの生れた所以が心に映り得なかつたのが解るやうです。

『もう紅葉でもあるまい。』かういふものもあれば、『紅葉はもう想が枯れた。材料がなくなつた。その證據には、此頃書くものは、皆な外國の通俗小說から飜案して來たものばかりぢやないか。』こんなことを言ふものもあつた。大家が當然受けなければならない攻擊の矢は、今やかれの身の周圍に蝟毛のやうに集つて來たのであつた。

實際今日から考へて見れば、それも無理はないのであつた。紅葉の作品――かなりにあるが、それは多くはその努力が第二義的のものにのみ集中してゐるのを私達も見遁すことは出來なかつた。かれの小說は、文章の巧いのと、筋の巧みなのと、人情的なのと、場當りの多いのと、色彩の濃かなのとで、多くの人に愛讀されたけれども、もつと骨を折らなければならないところ、即ち深い心理とか、魂の動搖するやうなところとか、さういふ本當の第一義的のところには、決して指を染めなかつたのである。否、その深く入つて行かずに、低級に人情的に留つてゐたところ

に、かれの評判はあつたと言つても好いくらゐであつた。

しかし、かれはそこに氣がついてゐないのではなかつた。また次第に移りつゝあるものにも心を痛めないのではなかつた。で、かれはもう一度、いちかばちかの運試めしをやらうと思つた。かれは全力を擧げて『多情多恨』を書いた。（同上、第十四章の一節）

「多情多恨」は失敗の作ではなかつたけれども、またその大きな努力は、今では多少買はれるべきものであつたけれども、しかも當時の新しい空氣を滿足させるには足らなかつた。（中略）——何と言つても書くものは小說である。いくら本當の事がいいと言つても、いくら寫生でなくてはならないと言つても、面白くないものでは、それを筆にしたところで效がない、面白ければこそ寫生も生きて來るのである。人を惹きつける興味があればこそ寫實も寫實の意味を成すのである。かういふ風に誰も彼も思つてゐた。從つて寫實と言つても、皮を一枚も二枚も被つたものであつたのである。「多情多恨」を見ると、さういふところはよくわかる。自家の米の飯だと言つて、生一本の寫實主義を標榜して居ながら、面白く書くために、または面白く人に見せるために、骨を折つて作者は書いてゐるのである。却つてさうしない方が好いものを、自然に近く見えるものを、わざわざ骨折つて、それに遠く且つ疎くしてゐるのである。つまり寫實主義と言つても、本當のものでなく、三馬京傳あたりから脈を引いてゐる輕い寫實の弊に陷ちて了つてゐるのである。

例を擧げれば、あの柳之助が葉山に伴れられて（註、この例は『多情多恨』によるもの）待合に行く條があるが——あそこなどいかに作者が讀者を喜ばせるために腕を振つてゐるかがわかるがまた實際から言つてもあれだけ書くのは並大抵では出來ないと思はれるけれど、しかし、本當から言へば、あんなことは何うでも好いのである。それほど重きを置くには足りないのである。またあゝいふ風に書いたために、却つて眞を失つて了つたやうな形になつてゐるのである。そこを綠雨などはキザだとも甘いとも、言つてゐるのである。

それに柳之助にしても、葉山にしても、わるく誇張してゐる。面白くするために誇張してゐる。實際に柳之助のやうな人間や煩悶があらうとは思はれない。また葉山のやうな人物があつたにしても、あれだけではあるまい。もう少し眞面目なところが、何處かに、何らかの形を以てあらはれて出て來てゐなければならない。あれではあんまり作者が人物をおもちやにしてゐる。

それはしかし『多情多恨』に限らなかつた。他の人達の作品にもさういふものが澤山にあつた。水陰（江見水陰）のには無論それが多い。眉山のにもある。二葉亭のにもそれがないとは言はれない。つまりその當時の文壇では、寫實主義といふものは、あゝいふものだと思つてゐたのである。

（同上、第十五章の一節）

田山氏のこの「近代の小説」といふ書は、氏が明治中期以來親しく見聞し、體感した文學界の變遷への回想です。特に自身小説作家としての立場から見、且つ感じての批判をもつて書かれた回想ですから、それを計算にいれて讀む可き書です。田山氏は正直に且ついろいろの方面に注意がとゞいて見、それをよく記憶してゐられたと思はれます。但し田山氏の癖で、相當にそゝつかしい早のみこみも有るやうですが、それをよく飲みこんで讀んでゆくと、いろいろの時期の様子がはつきり解つて來ると思はれます。それで以上抄錄した回想の斷片から、その話されてゐる方の側、即ち紅葉山人でも眉山氏でもその側の人達の側に立つて考へると、その人達が眞劍な熱心をもつて、各自の藝術を築き上げようとして努めてゐられながら、どうしても大切な核心となるものに觸れ得ないで終つてゐるといふ事が、何か破り得ない運命のやうに感じられるのです。

紅葉山人に闘するその間の消息は、眉山氏の場合の傍證の一つとして擧げたのですが、その人々の中で、新しく生れようとして動き始めてゐる文學精神に、最も鋭く感應した眉山氏が、鋭く感じつゝ模索しながら、自身がそこになりきれないで了つてゐるのは、その遺された作品が明かに説明してゐるやうです。觀念として解つてゐる處に到達しても、その魂はその血液を内に持つてゐないといふ處がはつきりと見えて來ます。それ故に作品が概念で組み立てられたものだけになり、外からは下手な組み立てをすぐ批難されるといふ結果になるのでせうし、恐らく作者自身でも、作品を書いて見て、同時にひどい不滿が心を苛むといふ結果になつたのではないかと思はれます。又、自由にのび〳〵と制作が生れ出すやうにならなかつたのではありますまいか。

さらに、私はその時代がひどく觀念に支配されてゐたのではないかと思はれます。後々まで文學作品を書きつゞけた獨歩氏・花袋氏・藤村氏などから千駄木山房の博士などは、觀念の奥に、目をつぶつてゐながらおのづと育つて行つたものがあつて、それが年をふるに従つてはつきりと目をあけ、作品を生んだと思はれます。眉山氏はそこへ到らず、その核心への膜を破る事が出來なかつた人と思はれるのです。

後年、藝術に對する心の實感を、眞實に話す人々――武者小路實篤氏、高村光太郎君などが現れると、世間がそれで明かに啓發されたのですが、その前の時代に對する理解も批判も、觀念と方法とを説くだけであつたので、目を覺し得る魂をもつてゐても模索しつゝ終つたといふ人が隨分有ると思はれます。

眉山氏の事を考へながら以上の事を書きました。これを質問に對する答案のつもりでお送りします。

某月末日

小說文體の推移

美妙齋の手紙

明治の初期から中期にかけての、文章の體が推移變遷した跡をたどつて見たいといふ念願は、私には久しい前から心に持つてゐて、しかも容易く遂げられないでゐたものであつた。これは維新以後の日本の心の展開生育の跡がそこに反映してゐると思はれるからである。しかし、どうも材料の蒐集が思ふやうに行かないので、充分に了解し得る處まで到り得ないでゐるのだが、極めてわづかな材料に依つて、一應の概觀を書きとめて置きたい。

「明治文學史」（本間久雄氏著）を讀んで行くうちに、山田美妙齋の項に、以下のやうな意見が抄錄してある。私はこれを緖にして文體の變遷をたどつて見る事にしよう。しかし、これがその問題に關する重要な鍵となつてゐるのだと言ふ譯ではない。むしろ現在から見ると、何だつてこんな事を考へたらうと思はれるほどの事で、たゞ文章に對するこの種の考へ方が壞れて後に初めて、生き生きした眞實を表すに適する文章が生れたのだから、前期の因襲、型として見ての上からである。

これは山田美妙齋に「堅琴草紙」といふ作品があり、それに關係した手紙の草稿が一つ殘存してゐるとの事である。その手紙は「明治文學史」の著者本間氏が所藏して居られるもので、本間氏はそれに就いて詳細な紹介をしてゐられる。この文學史に依ると、著者は美妙齋に對して深い同情を持つてゐられるし、多くの材料を蒐集しての、かなり行き屆いた美妙研究を遂げてゐられる。處で右の手紙は最後の一枚が缺けてゐるので宛名と書かれた年月が不明だが本間氏は十八年十二月に書かれたものと推定され、美妙齋十七八歲の頃のものとの見當である。手紙の內容は當時の文學作品及び飜譯に對する批難と自己の所信を滔々と述べたものので、一應は筋の通つた、はつきりしたものの言ひ方がしてある。

當時の文學作品に對する批難はまづわきに置いて、その中に論じてある文體に關係する意見が、當の美妙齋は全く新しい路を切り開かうとする人の思ひこんだ勢ひで論じてゐるが、現在から見るとそれは餘程奇妙な考へ方に感じられる。これこそ時代の推移が、わづか半世紀のうちにこんなにも激しい流れをなし、人の考へを變へてしまつてゐる跡が見えると思ふ一つの緖である。

「……是即小生が純粹和文（古體和文ニアラズ）を好む所以、云々」

即ち「堅琴草紙」は、美妙が、その當時に飜譯調の生硬な文體に反抗して、作者の所謂「純粋和文」を完成しようといふ意圖の下に試みられたものであることがわかる。さてこの「純粋和文」とはどういふ意味であらうか。美妙はこれに就いて何等の説明をも與へてはゐないが、この手紙の中で「掛詞緣詞」を以て「和文上にて世界中第一等の妙文」と云ひ、後に引く一節にもある通り、馬琴の尊ばるゝのを以て、この掛詞緣詞の點で特に優れてゐるからであるとしてゐるところなどから推すと、馬琴式な和漢混和文を以て「純粋和文」としてゐる事がわかる。(「明治文學史」上卷、三九四ページ)

美妙は次ぎに轉じて、飜譯文そのものは、元來が原作の妙を寫すのが困難であるから、文の妙よりも寧ろ事實を主眼としなければならないのも、止むを得ないことであるが、創作に於いては、事實と文飾とが並行しなければならないものであることを述べたのちに、更に次ぎのやうに云つてゐる。

「もしそれ修飾せざる者は是れ文才の足らざるなり。もしそれ修飾せんとすれば純然規律の定まるありて、且掛詞と緣詞の妙ある和文に勝るものあるべからず。馬琴翁が小説の世人に尊まるゝ所以是に因るといふべきなり。さはあれ、小生が言ふところ豈事實を忽にし、獨り文を崇ぶものならんや。事實は蓋し主眼にして文は之が粧飾なり。事實は即ち墨畫にて文はこれが丹靑なり。二者相得ずんば妙にあらず。二者相得ずんば巧にあらず。或は堅琴草紙の脚色事實もし妙ならさる處あらば、乞ふ、指摘の勞を賜へ。然らば直に潤色せん」(同上、三九六—七ページ)

美妙齋の「事實」と言つてゐるのは、內容で、「粧飾」が表現になるわけだらうが、現在と違つて、「言葉を飾る」といふ觀念が表現の主要な部分になつてゐたのであつた。そこで「掛詞と緣詞の妙ある和文に勝るものあるべからず。」などといふ考へが生じて來た理由もそこらが原因になつてゐるのだらう。

尙ほこの美妙齋の言ふ處を說明してゐる資料として當時やはり同じ年輩であつた尾崎紅葉が、(兩氏とも十八九歲の年齡であつた。)その同人の間で編輯した「我樂多文庫」の筆寫本時代に書いた「江島土產滑稽貝屛風」といふのに就いて、「明治文學史」に紹介してある一部を抄錄して見よう。

……ここは三人(江の島へ旅をした、愚二郎、鈍太郎、猪尾介といふ三人の放蕩漢)が江の島の稚兒ヶ淵を見物して、この稚兒ヶ淵の哀れな傳說に物の哀れを感じて、三人で和歌をつくり、それを懷紙に書いて、海中に投げ込み、その中で水の底へ引き込まれた紙の主が白菊(稚兒の名)に思はれたものと見なし、三人中の色事の總本家とあがめんといふ案を立て、愈々銘々歌をつくり紙に書く。それを銘々が冷かし合ふといふところがあるが、左に引くのは、鈍太郎の書いた歌

の文字の下手なのを愚二郎と猪尾介とが嘲笑する一節である。

グ「マアいゝからそこの懷紙を見せねへ。と手にとりあげ。へ、、、へ……またおかしくなつて來た。アへ、、、この文字の風は。鹿角菜の行列どころか、カンカラ干の横文字が。ねたりたつたりのびをしてゐるアへ、、、。チ「どう〳〵。コイツはたまらねへ。おつなかたちだ。ウ、こりや。古代更紗の模樣にはよくあるやつだなか〳〵下繪は手のものだとひねくりまはして見てゐる。グ「そりや唐草じやねへ。字だは。手跡だはナ

猪尾介ワザとたまげたかほにて。

「ヱさふか。こりや字か。フウン日本の字にやあんまりねへかたちだ。オイ鈍印。こりやいつ頃行はれた字だ。ド「ヘン野暮からしは。山育だけに通りがわりい。こりや大師樣といふのだ。チ「大師た事をいひなさんなそんなだましは空海〳〵。グ「ナルホド空海だけに。筆のあやまりが大相見へる。チ「オイ鈍ちやん。コリヤ上人樣ぢやねへか。ド「上人とはたがことだ。そしてそんな流儀はいまだきゝおよばねへ。チ「ヘン野暮からしは山育ちだけに通りがわりい。上人とは日蓮上人のことだ。グ「猪大人說話のこしを折つてすまねへが。日蓮流の上人流のといふ流儀は。撒亭流の別派か。嵯峨樣のくづしか。かく申すそれがしもきゝおよばねへ。チ「ヘテそれでもこの字が。髭題目に似てゐるから。ド「オキアガレみな〳〵「へ、、、、

美妙は、この一篇——特にこの歌を海に投ずるの一段を評して曰く「一九の『膝栗毛』至妙の評あれども、其快味は主に趣向の意外にあつて語句にある事少し。且つ其文中少く冗に亙れる事時にあり。獨り三馬此弊なく、趣向は素より意外にして、語句また抜群の妙味あり。之を除くの外、日本滑稽小說家中僅に之を得たる者鯉丈のみ。瀧亭のみ。今半可通人（紅葉山人の當時の筆名）が此回の如き、よく前者の弊無くして而も後者の妙味あり。才思の縱橫、筆路の迅勁殆ど塵土の物に非ず。（「明治文學史」上卷、四〇八—四一〇）

美妙がその手紙に書いてあるやうに掛言葉緣語を、「和文上にて世界中第一等の妙文」といふやうな不思議な價値判斷をしてゐるのを、この紅葉の文章を讀み、更らにそれを極上のもゝやうに推賞してゐる批評を讀むと、その當時の美妙齋の心持がおのづから明かになつて來る。勿論、この紅葉の作品に對して書いてゐる美妙齋の批評は、今日の批評の言葉とは少し性質が異つてゐるやうだ。今日でも「漢詩」を書く人達の中で、他の人の作品の後に書く「批評」の言葉が、最大級の言葉を撰んで古今に絕する名吟らしい事を言ふ、あれとやゝ類を等しくするものと思はれるので、正直にこの言葉を受取るのは少しばかげてゐはするが、とにかく紅葉の圓轉滑闊なこの「言ひまはし」を「うまいものだ」と思つたには違ひない。

考へて見ると、紅葉にしろ美妙にしろいかにも早熟の才人であつた。しかし何といつても、この文章も、

批評も、それから初めに抄錄した手紙（文學論の一端とも見られる）も、それを書いたのは兩氏の十八九歲の年頃の事であつたのだから、現在から見て、その幼稚さ不熟さを批判するのは要のない事である。どうしてその當時にかういふ事を好み感じたかを見る資料として、これを大切に取扱ふ可きであらう。

美妙齋の文章

ともかく、明治二十年にかゝる頃から、一つの新しい文學が生れようとする機運が動きはじめた。この一部が、更らに二三年溯つての「書生氣質」、「小說神髓」の影響で目覺めて來たとして、それ等の人々が必ずしも一つの脈を引いてはゐない。まづ「我樂多文庫」に集つた硯友社の才人たちを見てもその中での各々もやゝ自己の領域が明かになるに從つておのづからその「文章を書く態度」が異つて來てゐる。

この若年の才人達が、相結んで一團となり、「我等の文章」を書き始めた時に、恐らく倚る處が無くつて困つた事だらうと思はれる。まづ彼等の文學心を呼びさまして、その境地へ引き入れた動機がどこに有つたかは別として、その若い心の內に元來あつたものが啓發されて、自分でも「文章を書か」ずにはゐられなくなつた時、その人々の基準となるべきものは、當時目にふれ易いものであつた德川中期以後の戲作小說の中のものであつた事は明かである。何と言つてもすぐ手にとり易いもの――想像がゆるされるならば、家々の前代から傳へられた家藏本が、まづその年少の人々に讀まれて、その心の緖をつくつたらうと思はれる。硯友社の人々が、その模範を德川期の小說にとつて、その文章を巧みに學んだのは、その當時としては他に綠の摑みやうがなくつてそこに趨いた感がする。

こゝで、ほゞ同じ時代に出發した二葉亭は、これとは全く別の道を開いてゐた。それは後の項に述べる事として、硯友社の人々も當時はまだ學生だつた。學校で語學を學ぶ――どうもこの人達の外國語は英語であつたらしい。――につれて、同時に英文學の作品のどの範圍かとの接觸があり、それに對しての驚嘆があつた。この方面からの啓發が、その人々を鼓舞し、相當の開拓をした事であらう。たゞこの若い一群はそれに依つての道をとつて進まず、江戶の文學に範を求めてそれにならひ。實に巧みにその文章を築き上げた。その點では珍しいほど天稟の才を備へてゐた人達であつた。前に抄錄した紅葉の戲文を讀んでも考へられるのは、ほんの十九歲にすぎない青年が、あれほど自在な出來上つた文章を書かれてゐるのを見ると、ちよつと變な氣がする位である。明治文學史に抄錄してある美妙齋の「堅琴草紙」の一部分を讀んでも、馬琴の調子で書いた文章が、いかにもよどみなく自由で、そのませた才能が昔よく言はれた神童じみてゐるのを感じるのであつた。

處で美妙齋は、「低劣を極めた當時の文章に慊らず、」最初到達したのが馬琴であつたらしく、それの調子を所謂「純粹和文」と稱して、自己の文章とした。その後いろいろと工夫を凝して言文一致に移るに從つて、

一時世間の視聽を集めたといはれる「獨特の文章」を書くに到つた。これに就いては、イギリス文學の影響が多い風に見えるが、そこには、どうして新樣の文章を書かうかと言ふ美妙齋の心を碎いた工夫が有つた點はいかにも承認する事が出來る。若年の時から自分でも言つてゐる「蓋し作者は小說てふ字面にのみ拘泥して其純然たる美術なるを知らざりし云々」この美術即ち今日の言葉に變へると、「藝術」といふ事を朧氣ながらも感じてゐたのはいいとして、それを文章の形に求めたのは、やむを得なかつた時代の故かも知れないが、何かに煩はされたと思はざるを得ない。

さて此「風琴調一節」は、角子といふ女學生の、歷史の教師で且つ唱歌の歌詞に妙を得た某といふ靑年に對する淡い戀を描いたものであつて、彼れ美妙齋の創案した言文一致の新文體はその當時に於ては事實他に類のない淸新なものであつた。

『一日の間鳴暮してゐた骨折やすめとて、梢の蟬は忍寄る夕脚を合圖に大概聲を收めて葉隱で露の寢酒を飮出せば今度は草葉の螢が其跡を繼ぎそろ〳〵散步の支度をして遠近を飛廻るもの丶其中で弱いのは時々風に吹捲られ羽も利かず彷徨などは詢に樂しい風情であつた。夫ばかりでも夏の夜の價値は十分だのに今夜は月の桂男も雲と云ふ惡徒の從者をば連れず、只冷たそうに澄亙つて白壁の色を靑く染め、木の葉の上に珠玉を貸し、天地を磨上げた有樣、一目見た斗でも汗の神も人肌膚から逃出し、涼しさといふ御客樣が腦の中へはいつて來るほどであつた。』（「明治文學史」四四七―四四八ページ）

美妙齋のかういふ表情をもつた文章を、世間が驚歎したといふ事は、その當時の判斷力、理解性がどういふ狀態であつたかの說明である。この「說明」に私は興味をもつ一人であつて、幼稚であつたのを「あの時代にこれだけの事を考へ企てた」といふ年代の上から割引した價値には餘り興味が無い。美妙齋の文章はこの實例で見ると一目瞭然、頭の中で捏ね上げてこしらへた嵌木細工である。作者は歐米文學の幾何かを讀んでゐて、それからのまだ生の感化で、自分の表現を强いて新しくし、强いて新しい意味を持たせようと細工をしたものらしい。まだ若年の才人が何とか新しい文章をと求めた心は、當時まだ道の開かれない時代に、やむにやまれない要求も働いてゐたであらうが、心よりも形に重點が置かれたので、その工夫細工がかういふ表現が生じたのだと思はれる。勿論、それには美妙齋の根本の性情が働いてゐるのは當然であるが、心持をその工夫に工夫にと趣かしめたと思つていいらしい。それに對して、讀者も單なる言ひまはしの新しさを喜び、それが珍しい新文章として喝采したと思はれる。同時に、當時不熟な飜譯と一緒に何となく歐米風の言ひ表しに漠然とした魅力を感じる神經があつたのではなからうか。この私の想像は後年の所謂飜譯全盛時代の歐米文學に對する「好奇心」と照應して見て考へられる事で、必ずしも空な判斷ではなささうである。

美妙齋の制作年月は、極く短かかつたので、年と共に育つといふ跡は餘り見られない。却つて初期からの癖を深めて行つたと思はれるだけである。

紅葉・露伴の文章

美妙齋の文章は、その短い制作年月と盛名とが世間から消えると同時に、それに對する愛着も世間から拭ひ消されたやうになつて、後年どこにもその感化の跡がない。明治文學史の著者が物に書いてゐられる「修辭學上の擬人法」とかその他の特色と稱されるものを、たとへば日本の文章で最初に試みた人であつたとしても、それが後年——しかも餘り多くの年月を隔ててゐない後年の文章に現れて來た同樣の方法とは全く性質が異つたものであつた。美妙齋はその讀んだ本から學びそれを日本の文章にも移植しようと試みたのであらうが、それは歐文直譯の不消化な文體と規を一つにしたものにすぎなかつた。

元來、美妙齋は巧い文章を書き得ない人では無かつた筈だ。何といつても「文學の人」であつたのが、どこかで思ひ違へをして、あゝいふ表現を身につけてしまつたのだ。私はさう思つてゐるのだが、それにしても美妙齋は描寫力の薄弱な文章を書く人であつた。その點で、露伴でも紅葉でも、比べられない程の描寫力を備へてゐる。紅葉は一代の文章家と言はれて世間でも許し自分も任じてゐたのだが、その文飾の美しさ、氣のきいた感情を盛つた言葉、もの言ひ、如何にもしやれた、すつきりした表情で人を魅する力を帶びてゐた。それは五分の隙もない氣のきいた心の人が、水ぎは立つたもの言ひをする感銘を與へる文章であつた。と同時に、水際だちすぎて、一面たまらない氣取りと嫌味がそこから匂つて來る。しかし紅葉は身をもつてそれに苦心をした跡を、はつきり殘してゐる。即ち身に帶びてゐたので、美妙齋のやうな血の通はない嵌木（はめき）細工の文章と比べると、まるで違つて作者の持つてゐる情趣がその中を脈々として流れてゐるので、その響が讀者の胸に實感を帶びて傳つたのであつた。だが文章の持つ刺激力——讀者の感應を呼び起す力を「思ひ入れ」——抒情性を帶びた言ひ表しと思つたのは、前々からの小說文章の流れが傳つてゐたのを、受けついだのだと思つていい。それを更らにその時代風にして、新鮮なものの言ひ方にしたのが、紅葉の文章だと思はれる。それが又紅葉の文章の魅力でもあつた。

紅葉はしかしまだ壯年の三十幾歲で物故したが、その間實に「慘苦して」と言つていい文章の苦心をしてゐる。一作毎に、その歩みを進めてゐると言つていいが、しかしそれは初めのまゝの流れをたへず新鮮にしたへず清冽にする爲めの苦心であつたと思はれる。囚はれてゐたと言へば、昔からの「文章の美しさ」といふ觀念から離れ得ず、文學といふものを言葉の技術と思ひ、心が目覺める實感とは思ひ到らなかつたやうだ。それ故に、その最後の大作と稱され、又所謂洛陽の紙價をたふとからしめた「金色夜叉」を、今日讀むと、その描き出す情景の巧みさと共に、うるささに閉口させられてしまふし、晩年、筆が澁つたのが、その

病氣の爲めばかりではないのが一目瞭然だと思はせられる。

この作品に到達するまでに紅葉は自身で出來るだけいろいろの文態を試みてゐる。そしてここに精力を傾け盡す意氣ごみで、その最高潮を示す文章を書く意氣ごみであつた。當時は何人もこれらの文態に何等の疑ひを抱かなかつたばかりではなく、かういふ「名文」の生れた事は、文豪に對する尊敬と同時に、文章の美しさの或る高い段階に到達した感をもつてそれを迎へたのであつた。この美しさが根から壞れ一轉して、更らに新しい文章が生れ出さうとは、當時は想像しにくかつたのである。

まづこゝに「金色夜叉」の文章を抄錄する、これを紅葉の文章の熟達した頂點のものと見ていいし、又冴え切つたものを帶びてもゐる。

未だ宵ながら松立てる門は一樣に鎖籠めて、眞直に長く東より西に横はれる大道は掃きけるやうに物の影を留めず、いと寂しくも往來の絕えたるに、例ならず繁き車輪の轢は、或は忙しかりし、或は飮過ぎし年賀の歸來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日に盡きぬる三箇日を惜しむが如く、其の哀切に小さき腸は斷れぬべし。

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌されたる日記を瀆して、此黄昏より凩は戰出でぬ。今は(風吹くな、なあ吹くな)と優しき聲の宥むる者無きより、憤をも增したるやうに飾竹を吹靡けつつ、乾びたる葉を粗なげに鳴らして、吼えては走行き、狂ひては引返し揉みに揉んで獨り散々に騷げり。微曇りし空は之が爲に眠を覺されたる氣色にて、銀梨子地の如く無數の星を現して、鋭く冴えたる光は寒氣を發つかと思はしむるまでに、其の薄明に曝さるゝ夜の街は殆ど氷らんとするなり。

人此裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に、爭か那の世間あり、社會あり、都あり、町あることを想得べき。九重の天、八際の地、始めて渾沌の境を出でたり雖も、萬物未だ盡く化生せず、風は試みに吹き、星は新に輝ける一大荒原の、何等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫に邈く横はれるに過ぎざる哉。日の中は、宛然沸くが如く樂み、謳ひ、醉ひ戲れ、歡び、笑ひ、語り、興ぜし人々よ、彼等は儚くも夏果てし孑孑の形を歛めて、今將何處に如何にして在るかを疑はさらんとするも難からずや。

多時靜かなりし後、遙に拍子木の音は聞えぬ。其響の消ゆる頃忽ち一點の燈火は見え初めしが、搖々と町の盡頭を横截りて失せぬ。再び寒き風は寂しき星月夜を擅まに吹くのみなりけり。唯有る小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂間の下水口より噴出づる湯氣は一團の白き雲を舞立てゝ、心地惡き微溫の四方に溢るゝと與に、垢臭き惡氣の盛に迸るに遭へる綱曳の車あり。勢ひて角より曲り來にければ、避くへき追無くて其中を駈拔けたり。

「うむ、臭い。」

車の上に聲して行過ぎし跡には、葉卷の吸殼の捨てたるが赤く見えて煙れり。

「もう湯は拔けるのかな。」

「へい、松の内は早仕舞でございます。」

車夫の恁く答へし後は語絕えて、車は驀地に走れり。紳士は二重外套の袖を犇と搔合せて、顋の衿皮の内に耳より深く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂れて、橫縞の華麗なる浮波織の膝蔽して、提灯の徽章はTの花文字を二個組合せたるなり。行き行きて車は此小路の盡頭を北に折れ、稍廣き街に出でしを、僅に走りて又西に入り、其の南側の半程に箕輪と記したる軒燈を掲げて、剡竹を飾れる門構の內に挽入れたり。玄關の障子に燈影の映しながら、格子の鎖固めたるを、車夫は打叩きて、

「賴む、賴む。」

奧の方なる響動の劇しきに紛れて、取合はんともせざりければ、二人の車夫は聲を合せて訪ひつつ、格子戶を連打にすれば、旋て急足の音立てて人は出て來ぬ。

圓髷に結ひたる四十約の小く瘦せて色白き女の、茶微塵の糸織の小袖に黑の奉書紬の紋付の羽織着たるは、此家の內儀なるべし。彼の忙しげに格子を啓るを待ちて、紳士は悠然と內に入らんとせしが、土間の一間に充滿たる履物の杖を立つべき地さへあらざるに遲へるを、彼は虛さず勸篤に下り立ちて、此の敬ふべき賓の爲め辛くも一條の道を開けり。恁て紳士の脫捨てし駒下駄のみは獨り障子の內に取り入れられたり。(「金色夜叉」第一章前半)

これは前に掲げた美妙齋の文章から見て、約十二三年後に書かれたものである。その十二三年の間に作者の年齡も重なつたであらうが、文章にもここまで、完成の姿を見るほどの進步が遂げられてゐた。これを見ると、紅葉は從來の、德川期傳來の文章からずつと拔け出して、ずつと自由に自身の態にはいつて來てゐる。この作に到る間に言文一致の態で細かな心理の推移を描いた「多情多恨」も書き、さういふ經驗を積んで、所謂雅俗一體のこの美しい文章が書かれたのである。

この風の文章を書いた、紅葉の門下、鏡花、風葉もほゞこれと類を等しくした文章の態に依つてゐる。この二人の中、風葉は紅葉を更らに俗なものにし、かなり惡どくしてゐる。鏡花の方はそれに比べると、妙な作り聲の氣取つた處はあるが、一種淸冽なものが感じられて、それが人に魅力となつてゐた。ともかく紅葉は、その出發の時に學んだ德川期小說の文態から脫却して、自分のもの言ひを築き上げたし、その門下の俊才はそれを基として、各自の表情をもつ文章を書いた。

露伴は、それに比べると、紅葉ほどその脫却が鮮かではなかつた。ともかく二十年代の若い小說家が等しく求めた文章の態は、――それは書かんと欲する作品の題材、表さんと欲する「心」が、世の中の出來事の

中でその感情を揺り動かすものを基とし、或はその想像の中に描き映る人間を核として、それに衣服を着せるやうに文章を書かうとした處から、當時の文態は生育したと見られる。しかし、その若い小說家達が初めに各自の文章の倚り處を求めて、何れもが當然一つ時代の溝――沈滯し切つてゐた明治初年の文學を飛び越して、更らに前の代の小說の文章を範つた事は極めて自然ではなかつたらうか。それにはも一つそれらの小說を讀む便宜も容易く得られた故もある。このきつかけから搜し求める、新しい發見、發掘に似た發見が次第次第と重る。といふ順序で、德川期の小說文態が、明治二十年代の文態に作用したものが極めて濃厚であつたのであらう。そこを根にして明治文學の第一期の文態は生れたのであつた。

露伴にしても、紅葉にしても、眉山、綠雨、一葉の人々は悉くこの脈を引いてゐたが、しかし、それぞれその藝術を生かす爲めに、おのづから各自の溌剌とした文章を備へるやうになつた。その工夫は各自の身内から生れる要求に依つてなされてゐる。この點で美妙齋は餘りに細工をし、工夫を弄んだ感がある。それを特異の存在と見るのはいいかも知れないが、私はむしろそこからの水脈が少しも流れ出ないで絕えてしまつたのを幸ひだと感じもするし、一たんは欺かれたが、讀者の知性が正しく働いたと感じるのである。

この時代に文章を重んじるといふ事はそれに就いて、實に重要なものを感じてゐたと思はなければならない。譬へて見ると、色の正しい識別を缺いてゐた時代から拔け出して、各自の生き生きした色彩を備へた人々が、そこに重きを置いたと等しい心持であつたらう。文章が全く言葉の力を失つてゐた時代の中から、言葉と表現とを摑み得た時であつた。この時、作者も讀者も、一應過去の文態からの流れに寄つて新しく書き表された感情、表情で心をふくらましたのは、流れの順序であつたとも思はれる。後になつて、當時を振り返つて見たものは、その古い衣裝を新しく着こなした作者の人々に敬意を表す可きである。

さて、露伴はかういふ文章を書いた。これは前に掲げた「金色夜叉」の書き始められた時よりも、ほぼ六七年前の明治二十五年に公けにされた「五重塔」から拔萃したもので、同じ紅葉の文章ではなく、露伴のではあるが、同時に前掲の文章への途中に位した文體態度も併せて考へられる。

言葉は無くても眞情は見ゆる十兵衞が擧動に源太は悅び、春風湖を渡つて霞日を蒸すとも言ふべき溫和の景色を面にあらはし、尙ほやさしき語氣圓暢に、斯様打解けて仕舞ふた上は、互に不妙ことも無く、上人樣の思召にも叶ひ我等の一分も皆立つといふもの。嗚呼何にせよ好い心持、十兵衞汝も過してくれ、我も充分今日こそは醉はうと、云ひつつ立つて違棚に載せて置いたる風呂敷包とりをろし、結び目といて二束にせし書類いだし、十兵衞が前に置き、我にあつては要なき此品の、一つは面倒な木材の委細い當りを調べたのやら人足輕子其の他樣々の入目を幾晩かかゝつて漸く調べあげた積り書、又一つは彼所を何して此所を斯してと工夫に工夫した下繪圖、腰屋根の地割だけのもあり、平地割だけのもあり、初重の仕形だけのもあり、二手先または三手先、

出組ばかりなるもあり、雲形波形唐草生類彫物のみを書きしもあり、何より彼より面倒なる眞柱から內法長押腰長押切目長押に半長押、椽板椽かつら龜腹柱高欄垂木桝肘木、貫やら角木の割合算法、墨繩の引きやう規尺の取り樣、餘さず洩さず記せしもあり、中には我の爲しならで家に秘めたる先祖の遺品、外には出せぬ繪圖もあり、京都やら奈良の堂塔を寫しとりたるものもあり、此れ等は悉皆汝に預くる、見たらば何かの足にもなろと、自己が精神を籠めたるものを惜氣もなしに讓りあふたる胸の廣さの頼母しきを、解せぬといふにはあらざれど、のつそりもまた一ト氣性、他の巾着で我が口濡らすやうな事は好まず。親方まことに有り難うはござりまするが、御親切は頂戴いたしたも同前、これは其方に御納めを、と心は左程になけれども言葉に膠の無さすぎる返辭をすれば源太大きに悅ばず。此品を汝は要らぬと言ふのか、と慍を底に匿して問ふに、のつそり左樣とは氣もつかねば、別段拜借いたしてもと、一句迂濶り答ふる途端、鋭き氣性の源太は堪らず、親切の上親切を盡して我智慧思案を凝らせし繪畫まで與らむといふものを無下に返すか慮外なり。何程自己が手腕の好て他の好情を無にするか。そも〳〵最初に汝めが我が對岸へ廻はりし時にも腹は立ちしがじつと堪へて爭はず、普通大體のものならば我が庇蔭被たる身をもつて一つ仕事に手を入るゝ打擲いても飽かぬ奴と怒つて怒つて何にも爲すべきを、可愛きものにおもへばこそ一言半句の厭味も云はず、唯々自然の成行に任せ置きしを忘れし歟。上人樣の御諭しを受けての後も分別に分別渴らしてわざ〳〵出掛け、汝のために相談をかけてやりしも勝手の意地張り、大體ならぬものとても堪忍なるべき所ならぬを、よく〳〵汝を最惜がればぞ踏み耐へたるとも知らざる歟。汝が運の好きのみにて汝が手腕の好きのみにて汝が心の正直のみにて上人樣より今度の工事命けられしと思ひ居る歟。此品をも與つて此源太が恩がましくでも思ふと思ふか。乃至は旣慢氣の萌して頭から何の詰らぬ者と人の繪圖をも易く思ふか。取らぬとあるに强はせじ、餘りといへば人情なき奴、あゝ有り難うござり升ると喜び受けて、此の中の仕樣を一所二所は用ひし上、彼の箇所は御蔭で美う行きましたと後で挨拶する程の事はあつても當然なるに、開けて見もせず覗きもせず、知れ切つたると云はぬばかりに愛想も菅もなく要らぬとは、汝十兵衞よくも撥ねたの。此源太が仕た汝の中に汝の知つた者のみあらうや。汝等が工風の輪の外に源太が跳り出ずに有らうか。見るに足らぬと其方で思はゞ汝の手筋も知れてある大方高の知れた塔建たぬ前から眼に映つて氣の毒ながら批難もある。旣堪忍の緒も斷れたり。卑劣い返報は爲まいなれど、源太が烈しい意趣返報は爲る時爲で置くべき歟。酸くなるほどに今まで口をきいたが旣きかぬ。一旦思ひ捨てる上は口きくほどの未練も有たぬ。三年なりとも十年なりとも返報するに充分な事のあるまで物蔭から眼を光らして睨みつめ無言でじつと待つて呉れうと、氣性が違へば思はくも一二度終に三度めで無殘至極に齟齬ひ、いと物靜に言葉を低めて、十兵衞殿、と殿の